原生林に猛魚を追う

醍醐麻沙夫

「アマゾンへの情熱が蘇ってくる」開高健

アラスカやカナダへサケ釣りにでかけることが日本の釣り師にとってさほどゼイタクとは感じられなくなってから約十年。

してみればアマゾンまでは、あと一歩であろう。ただし、釣れるときには釣れる、釣れないときには釣れないという鉄則はこの原始林地帯でも作動している。

原始を釣りたい人はこの本をよくよく読んで季節と場所を選ぶこと。ついで、猛暑、ダニ、マラリア蚊、悪水、粗食などについて、ちょっとした底なしの忍耐力を準備しておくこと。

はじめに

横浜港の近くで育ったので子供の頃から釣りはしていたが、熱心になったのはブラジルに来てからだ。それも、ここ十年ほどのことだ。

その頃、私は海辺の村で日本語教師になって住んだ。そこで、野菜作りをしていた前任者の阿部松先生が釣りの手ほどきをしてくれた。赴任した数日後の夜、長靴の音をボタボタさせてミミズの空カソをさげた阿部松先生が夜釣りに誘いに来た。日本語学校の裏を流れる小川の橋の下でカンテラの灯を頼りに釣り、私はかなり大きな魚を四匹釣った。典型的なビギナーズ・ラックだ。それですっかり夢中になって、毎晩のように阿部松先生と誘い合って小川のほとりへ夜釣りにでかけた。

最初の晩は阿部松先生が鈎にエサをつけてくれたし、良い場所もゆずってくれた。棘や歯の危険な魚の区別のつかない私に代って鈎外しもしてくれたのだから、先生を尻目にかけてたくさん釣れたのは、いま考えると当然のことだった。魚が引くと夢中ではね上がるものだから、魚は空中をビューンと十メートルも後方へ飛んでいってしまう。阿部松先生は「アリャアリャ」と奇声を発しながら、雑草をかき分けてその魚を探してくれた。

ずっと後になって初心者に手ほどきをする立場に

なったが、「そうしてはいけない」「こうしてはいけない」と口やかましく言っている自分に気づいてハッとすることがある。阿部松先生はそんなことは言わなかった。徹底的に、楽しさだけを教えてくれた。一人立ちできるまでは必ず良い場所もゆずってくれた。

阿部松先生は大雨のため野菜が全滅し、知人を頼って他地方へ移っていった。私は独りになったが、釣り好きはます嵩じて、汽水帯のフッコ、磯のクロダイと行動半径を広げていった。朝まずめのクロダイを釣るために夜中に家をでて六キロの山道を歩いて磯へ通ったのだった。

実を言えば、私はそれまでの若さにまかせた異国放浪に区切りをつけて、一篇の小説をまとめようと思って、その村へ引っ込んだのだった。午前と午後、二時間づつ日系人の子弟に日本語を教え、あとの時間を小説にあてる予定だった。しかし、文学的素養のない男がいくら決心をしたところで、満足できる小説がすぐ書けるはずがない。結局は釣りが主で、小説の習作が従の生活になった。

教師をやめてからは海水浴場のある町へ移り、河口のフッコを釣って生計を立てた。河辺の家を借り、小さなカヌーを入手し、活エビの餌でフッコを釣ってそれを魚屋に売った。一年ほどの期間だったが、とにかく一家三人の生活を釣竿一本で支えた。

騒音をたてるモーター船でなく手漕ぎのカヌーの行

動が良かった。汽水帯の生物たちの自然な姿にとけ込むことができた。ゆっくりと時間をかけて静かに観察する、という私の自然に対する態度はこの時以来のことだ。

この本の内容は、初期の、とにかく釣りまくって数をあげることに熱中していた時期からやや移行して、自然の生態系に身をおくよろこびを感じはじめた頃の経験をまとめてある。

舞台は第一部が南米の中央に横たわる大湿原（パンタナル）であり、第二部はサンパウロ州となっているが、ともにラプラタ河水系の各上流部である。

しかし、同じ河の支流でも様相はずいぶんとちがい、魚の種類さえ優越種が変わる。それは人口稠密地帯か無人地帯かのちがいである。人間の有無が岸辺の様相は勿論のこと、水中の生物の種類まで変えてしまう。

熱帯の自然、殊に森林について言えば、初めの印象はグロテスクで無気味だった。信じられないほどの大木が密生し、髪をふり乱したように蔦がからみついている。だが、それも見馴れると、その量感は手応えがあり充実した生命感が伝わってくる。温帯の自然の整然とした美とはずいぶんちがうが、それぞれの気候に合致した美と迫力を自然は持っているのだろう。魚たちもまた、そうである。

私はときどき日本へやって来るが、日本の釣具の発

達や釣船の普及は羨しい。南米ではおいそれと買えない道具が豊富に並んでいる。ブラジルなどでは(経済的余裕のある人から余分に負担して貰うために)、釣りライセンスは竹竿使用とグラス竿使用では料金が数倍ちがうが、釣具が安価に普及している日本では想像もつかない規定だろう。

しかし、私が最も貧しかった時期に釣りを始め、それでも充分に楽しめたように、釣りは世の中が平和でさえあればだれでも楽しむことができる。それに、楽しみの度合いはビキナーでもベテランでも同じである。それが趣味としての長所だろう。でも、味わいは技術の向上と共に深まっていくようだ。〝釣りは奥が深い〟とは、とりもなおさず自然の豊饒を指す言葉にちがいない。

この本は日本へ帰るたびに釣具と釣本をどっと買い込む一釣人が、熱帯の手荒い自然の中で魚を追って過した記録である。魚と水の世界はどこでも共通であるという認識の上に立って、ことさら違う診らしい話題を選んでみた。雨の日にでも読んでいただければ幸である。

昭和五十六年一月　サンパウロにて

醍醐麻沙夫

原生林に猛魚を追う・目次

第一部　パンタナル（大湿原）の釣り

第一章　大湿原　11

第二章　大湿原の魚たち　19
ドラード　19
ピラニア　21
パクー　28
ピンタード　32

第三章　大湿原の旅　34
犬魚の強襲　35
黄金の魚　43
河エイのポカン釣り　51
午睡の夢　61
なぜ？と鳴く魚　71
ミミズの値打ち　79
蚊の大群に囲まれる　83
伝承の午後　89
コルンバにて　93

第四章　たった一人の河　99
人を引き込む魚　99
流し釣り　102
原始的な釣りを試みる　107
ダイヤ掘りの親方　115
〝河の王子〟を釣る　125
第五章　夕暮れの中のカヌー　130
クヤバにて　131
ポコネのピラニヤ釣り　138
森への適応　156
野生動物たち　164
夕暮れの河で　171
第二部　サンパウロ州の釣り　177
第一章　パラナ河　177
大物の話　178
ピヤパーラ日記　184
大ミミズの話　206
第二章　汽水帯にて　209
釣り初めの頃　210
スズキ（フッコ）　218

マングローブ林　226
第三章　湖沼の釣り　234
チラピア　235
ポカン釣り　244
第四章　旅への誘い　253
練餌と擬似餌　253
旅の心　261

イラスト＝田中慎二

第一部

パンタナル（大湿原）の釣り

第1章　大湿原（パンタナール）

釣師の望みの第一は、魚がたくさんいる処に行くこと、ではないだろうか？

雨垂れのように銀鱗が跳ねている沼、傍若無人に巨魚が暴れ廻っている河……そういう濃い自然の中に我が身を置いてみたいと望んだことのない釣師はいないだろう。

自然がまだ豊富に残っているブラジルの中でも、そんな夢と現実が一致するほど魚影が濃い場所といったら、まずマット　グロッソ（大森林）州のパンタナール（大湿原地帯）を挙げなければならない。

ブエノスアイレスで海に注ぐラプラタ河の上流はパラグアイ河と呼ばれるのだが、そのパラグアイ河のかなり上流地帯に沿って世界一の大湿原が拡がっている。

日本の本州より広い面積が河と沼と湿地で埋まり、信じられないほど多数の魚類や鳥類がそこに棲息しているのだ。獣やワニなども多い。

信じられないといえば、此処は南米大陸のほぼ中央に位置しながら、標高は海抜五十メートルそこそこなのだ。丘のような高い処でも百メートルを越えない。地図で測ると河口から直線距離で約二千キロある。蛇行する流れに忠実に測ったらその数倍はある遠い遠い距

離を、たった五十メートルくらいの差で一体どうやって流れるのか不思議なくらいである。それでいながら、河の中ほどの流れはかなり速い。

河の中にポツンとカヌーを浮かべていると、下流の方が高くなっている様に見える場所もある。〃水は低きに沿って流れる〃という諺はここでは実感としては肯定し難い。上流から押されて運動の慣性を得た水が、河という移動体になって平らな陸地を動いている、という印象だ。事実、雨がやむとかえって水が増えたりするところがある。上から押す力が弱まるので、水がズッコケて停滞するらしい。

パンタナルは人間が定着して生業を営むのをいまだに拒否し続けている。昔はインヂオが処々に少数ながら住んでいたことは出土する土器で知られるが、現在でも比較的高い土地が牧場として利用されているにすぎない。アマゾン河やナイル河の下流地帯のように定期的な氾濫が沃土をもたらすこともない。雨の降りはじめに濁るだけで、ほとんど水は澄んでいる。

草や枯葉などが水中で腐敗し堆積して、農耕にはきわめて不向きなピート層を形成している。自然の状態のときは目立たないが、ひとたび木を伐って整地でもすれば、陽が当ると鍬も立たないほどカチンカチンに固まってしまう。だからパソタナルに点々と住む人々は、猫の額ほどの自家用菜園を持っているにすぎない。

牧場はあちこちにあるが、木を伐った土地に牛を放

してあるというだけのことである。セスナ機で上空を飛んでも無人の湿原がどこまでも広がっているという印象しか受けない。牛の群を機上から見かけるのは稀なくらいだ。しかし、毎年、氾濫期には約二万頭の牛が溺死するので、パンタナル全体では数十万頭の牛が放たれているにちがいない。

南半球の晩春（十月末）になると、雨期が始まる。暖い雨が降り続き、本流のパラグアイ河をはじめ、タクァリ河・クヤバ河などの数十の支流はみるみる増水し、パンタナルは平均三メートル水位があがり一面の海になる。やや高い台地だけが冠水せずに島になって散在する。複雑な多島海のような景観を想像したくなるが、水につかった森も多いから遠目には陸と水の区別はつき難い。残った台地には、そこが牧場であれば水に追われた牛が集まってくる。逃げ場を失って孤立して、多くの牛が溺死するのはその頃だ。夥しい水草が停滞した水面にギッシリと浮かび、紫色の花を一斉に咲かせる。

それは美しい眺めではあるが、あまりに水草が多いと、美しいと思うより恐怖にかられる。本来は河である場所の上を舟を走らせていても、行手も後も一面の緑で方向感覚がすぐ失われてしまう。例えばタクァリ河は乾期でも河幅百メートルはある一大支流だが、雨期になると合流点付近は何キロにもわたる幅の水草でおおわれて、どこが本流への出口だかまったく分らなく

なってしまう。それらの水草は金魚鉢に入れる茎がぷくんと脹れたホテイアオイで、ブラジルではアガペーという名だが、自然の器の大きさに似合った成長をしていて、水面に直立した茎と葉の高さは五十センチから優に一メートル近くものびているので、船外機付きのボートでは視界さえ奪われそうになる。

そうやって水が増えると、浅場に様々な魚の大群が押しかけて一斉に産卵する。産卵期の乗っ込み現象はピラセーマと呼ばれるが、三日三晩河が鳴いてうるさくて寝られなかったなどというピラセーマ期の話（魚の大群のウキブクロから発する音）は老人の昔話としてブラジル中に残ってはいるが、パンタナルではまだ現実の話である。

浅場には草の実や昆虫やプランクトンが満ち、孵化した稚魚のエサは無限にある。しかも、草の薬や水草の根におおわれた数センチの浅場だから安全この上ない。

雨は二月に終るが、五月頃にならなければ膨大な量の水は引かない。稚魚の群は半年近くものびのびと成長する。水が引くにつれてすべての魚たちは河や沼へ戻ってくるが、四月頃にこういう水路の落ち口を観察すると、目をこすりたくなるほどの魚の群が移動している。

河や沼にはフィッシュ・イーター（魚を喰う魚）の大魚や水禽類がウヨウヨしているが、連中がいくら喰っても喰い尽せないほどデキ（当歳子）の小魚が泳いでい

るのだ。……そして、半年たつとまた雨期がくる。新しく稚魚が生まれ、育つ。

パンタナルの周辺には三つの町がある。地図を見ると左側の、ボリビヤ国境近くにコルンバ。右側の台地にコッシン。上方にクヤバがある。ここは南マットグロッソ（大森林）州の首都だ。クヤバ市からは北方にテーブル状の高い台地が隆起しているのが望見される。その台地の向う側はもうアマゾンである。

一九三〇年代にパンクナルを横断した人類学者のレヴィ＝ストロースは、その著『悲しき南回帰線』の中で、ここを「水の砂漠」と呼んでいる。たしかに、粗放牧場以外には産業と呼べるものもなく、住人たちの生活は今日も貧しい。しかし、釣師の立場からはここは砂漠などではなく「水のオアシス」なのだ。日本の本州がすっぽり入る桁外れの大きさの自然の精妙な孵化場……太陽熱で湧き返っている、魚と水鳥のパラダイスへ一本の釣竿と共に迷い込むのだ。

パンタナルの魅力にとりつかれて、私は何度もそこへ旅行した。時には一人で、時には友人たちとテントをかついで……。竿が振りやすそうな中州に一人で上陸したことがあった。

私を連れて行ってくれた漁師のモーター船が去ってから気づいたのだが、中州一面はカモメに似た鳥の巣だった。足の踏み場もないほど月面のクレーター状の

窪みがあって、その一つ一つに卵があり、雛がいる。モーター船が去ると、上空で騒いでいた親鳥たちが一斉に攻撃を開始した。くちばしを突きだしながら急降下し、頭上一メートルくらいで反転する。ビュッ、ビュッと耳許で風を切る羽音に迫力があった。私は竿とタックル・ボックス(道具箱)を抱いて逃げ廻ったが、幸いなことに全部の鳥が一度に襲いかかるのではなく、私が立っている場所の近くに巣がある親鳥たちだけが攻撃するのだった。

私は中州の下の水際まで逃げていって、頭をかかえてうずくまりながら、不貞腐れて迎えのボートがくるまでの長い時間をじっと過した。私がちょっとでも立つと近くの鳥たちが一斉に騒ぎ始め、すぐ中州全体に叫び声が波及するからだった。たくさん釣ろうと欲張って「なるべく遅く、日没寸前に迎えに来てくれ」などと漁師に念を押したのが真実悔まれたが後の祭りというやつだった。よほど、対岸へ泳いでいって向うで釣ろうかと思ったが、この河には大ピラニャの群がいるのだ。向う側へ着くまえに、多分、骨だけになって河底に沈んでしまうだろう。今までの経験からそれは断言できる。私の体が沈んで、竿と道具箱だけがプカプカ浮いているのでは面白くない。

夕方、日が沈んで空に漂っていた黄色い光も消え、河面に青い闇が沈みはじめた頃、下流から船外機の爆音がかすかに響いてきたときは心の底からホッとした。

行くたびになにかしら、このような酷い出来事に遇う。しかし、それらもパンタナルの魅力の一つなのだ。この大自然の中で良い釣師になろうとすれば、釣りの技術だけでなく自然そのものに対する知識が豊富でなければならない。私は良き釣師になろうと努力してきた。

しかし、まだ「森を知る者（セルタニスタ）」には程遠い。知らない事の方がずっと多い。私はこれからも多くのことを知るだろう。それは都会を離れて大自然にキャンプする数週間ずつの間、生きるための必要な知識として少しずつ蓄積される。その知識の蓄積が完璧の域に近づいたとしたら、人ははじめて「森を知る者（セルタリスタ）」と呼ばれる資格を持つ。

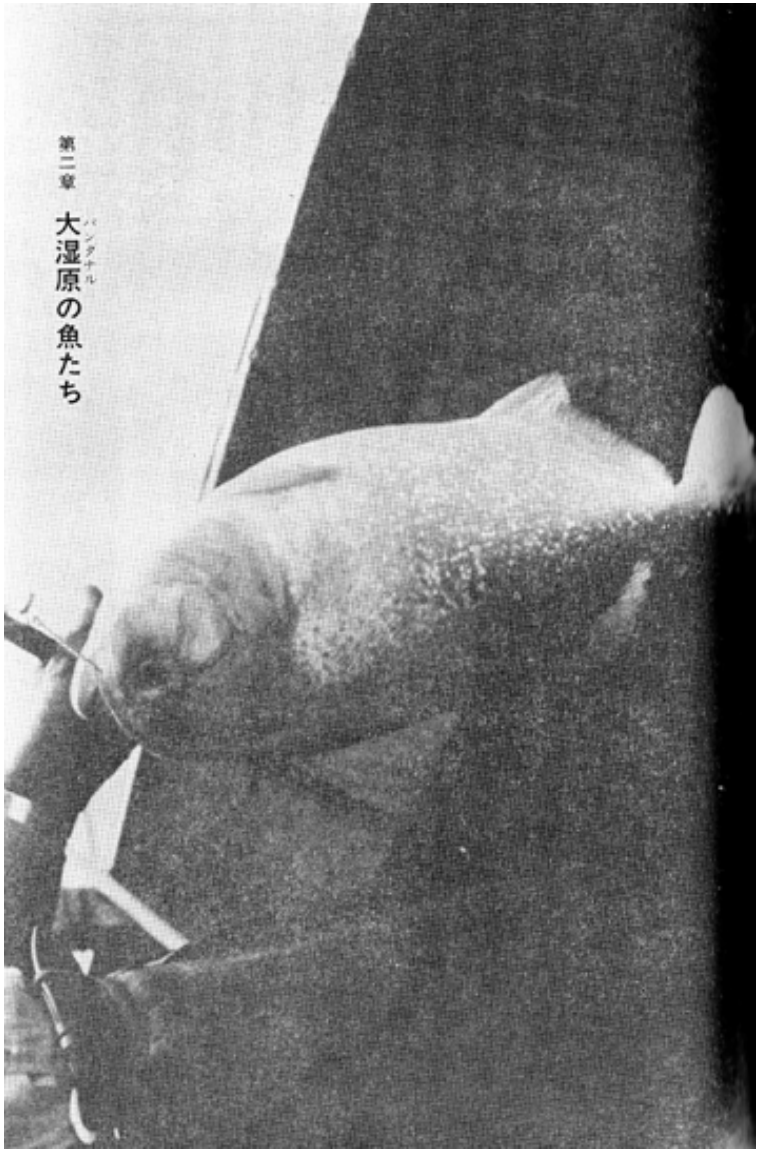
友人の狩猟家から或る「森を知る者」の話を聞いたことがある。狩猟家はその男を猟の案内に雇ったのだが、アマゾンの上流の森林で一匹の豹を十日かかって追いつめたということだ。追うといっても銃や食糧を背負った人間たちの一団の歩みの方が豹よりずっと速度が遅いのが当然だ。それにもかかわらず追われることに疲れ、いらだった豹は十日目に追跡者たちの前に姿を現わして挑戦してきたという。

コナン・ドイルの『失われた世界』の中にある台辞ではないが、「スコットランドとコンスタンチノーブルほどはなれた場所にいたとしても、どちらも同じブラジ

ルの大森林の中にいるんだぜ」という途方もない広がりの中で、足跡さえほとんど残さない一匹の豹を、夜営しながらゆっくりと、しかし確実に追いつめることのできる人間もいるのだ。

さて、私はこれからパンタナルの釣りの旅を語ろうと思う。

しかし、その前に、主役となる魚たちの幾種類かを紹介しておきたい。



第二章　大湿原（パンタナル）の魚たち

第二章　大湿原（パンタナル）の魚たち

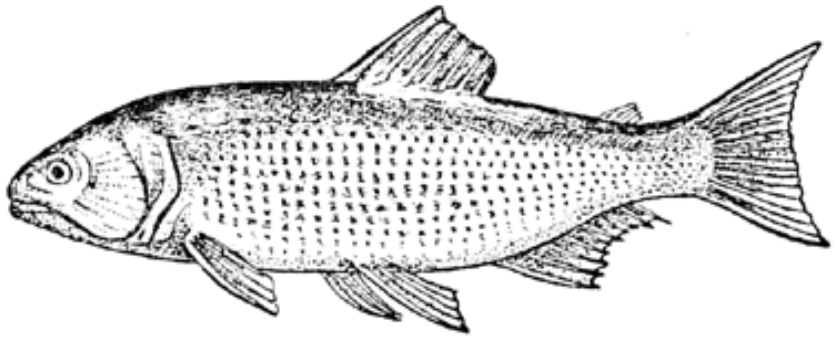
ドラード　ｄｏｕｒａｄｏ

全身「黄金色（ドラード）」に輝き、豪華でありながら性質は獰猛果敢、信じられないほどの剛力の持主である。まさしく「河の王」と呼ぶにふさわしい魚で、〝淡水の黄色い虎〟という異名もある。

ドラードはｃｈａｒａｃｉｄａｅ（カラシン科）の一属で、この科の魚は中南米に広く分布している。（中南米の有鱗淡水魚ではこの科に属する魚が一番多く、ピラニャもこの科に入る。日本で言えばコイ科のような位置にある）

ドラードのｓａｌｍｎｕｓ属には四種が含まれ、ペルー及びコロンビヤに一種、ブラジルのサソフランシスコ河系に一種、ラプラタ河系に一種、それに「タバラーナ」という小型魚がブラジルからベネズエラにかけて分布している。

パンタナルに棲息するドラード（Ｓ



ａｌｍｉｎｕｓ ｍａｘｉｌｌｏｓｕｓ）は勿論、ラプラタ河系のもので、体重三十キロ体長一メートルの記録があるが、五～十キロくらいのものが多い。最上流地帯から河口近くまで棲むが、降海性はない。肉は桃色で、極めて美味。脂肪に富んでい最も伝統的な釣法は太い延竿に竿一杯の長さのピアノ線を結び（今は三十号程度のナイロン糸が多い）、オモリなし、大きな鈎に三十センチほどの活きた小魚を背がけにして、小舟を流れと共に流しながら竿を下流へ出して、活餌が水面下五十センチのあたりを泳ぐように操作する。当りがあったら充分喰い込ませるのだが、ガリ、ガリ、ガリと手許に直接響く当りは魚信の常識を越えた感覚である。掛けてからしばらくは釣り手はただ竿にしがみ付いているのが精一杯で、その間はむしろ相棒の漕ぎ手の櫂さばきが中心になる。

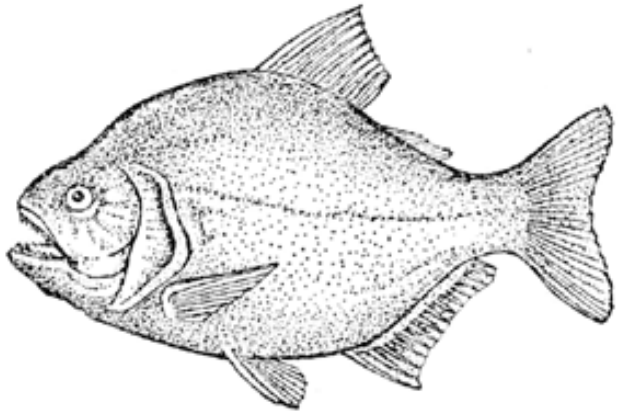
代表的なフィッシュ・イーターなので、小魚の形態や動きのきらめきを模したルアー（擬似餌）でよく釣れるが、ごつい一本鈎のついた大型スプーンで表層を曳くボート・トローリングが普通で、ルアー・キャスチングはまだ普及していない。しかし、ルアー・キャスチングの相手としてこれほどスリルのある魚は稀であろう。

ブラジルの民話に出てくるドラードは優しい心を持っているようである。捨て子を河に流すと、ドラードがその子を育てるという。夜、ドラードが跳ねる水音を開くと、河辺の住人は「ドラードが捨てられた子を護っ

てピラニャと闘っているのだ」と言う。

ピラニャ　ｐｉｒａｎｈａ

ピラニャの種類は多いが、パンタナルで普通に釣れるのは四種類いる。最も多いのは学名Ｐｙｇｏｃｅｎｔｒｕｓ ｐｉｒａｙａと呼ばれる最大三十五センチくらいに成長する中型のピラニャで、背は黄色味がかった灰色に銀砂子が散り、腹部は鮮やかな黄赤色。沼やわんどなどの止水に群棲している。それより小型の、せいぜい掌大のピラニャは全体に銀白色でかなり美しい。熱帯魚店の水槽で見かけるのは、大概これである。「白ピラニャ」と呼ばれる。やや流れの弱い流水部に多い。ずっと大型の五十センチにもなるお化けピラニャは、アマゾン河で「黒ピラニャ」と呼ばれるものと同種だが、アマゾンのものほど黒くなく柔らかい灰色である。かなり流れの強い処にも群棲し、力が強く兇暴この上ない。「ピラニャ・パクー」という種類は、四十センチくらい



の黒色のピラニャで、後述するパクーに外見が酷似していて大人しそうだが、いざ口を開くと例の凄い歯がズラッと並んでいて驚かされる。

すべてのピラニャは釣師の立場から見れば、外道としての条件を完璧に具えている。

一、数が多い。二、エサの取り方が早い。三、仕掛けを痛める。四、釣り味が悪い。五、釣り上げても危険この上ない。六、他魚を追ってしまう。七、食べて旨くない。八、憎らしい顔付きをしている……ｅｔｃ。

例えば、生きた二十センチくらいの小魚を背がけにして、ウキを付けて沼に投げ込んだとする。エサが生きているから当然ウキは微動し続けているのだが、沈むほどの変化もないままに二十秒くらいして上げると、頭と背骨だけになっている。小魚はまだ口やエラを動かしているのに、頭から下は骨しかない。（もう十秒おいたら頭もなくなる）ピラニャの危険性については多くの伝説的な話が伝わり、中には反対に「全然危険ではない。人を襲うなんてウソだ」と報告する人もいる。

私の観察が正しいとすれば、人里近くの、特にモーター船の往き来が多い水域のピラニャは人を襲うことはまずない。マナオスのアマゾン河の対岸に密林観光ルートがあり、そこは一見うっそうとした原始林の中の水路だが、土地の子と共に泳いだことがある。体にゴツゴツとピラニャが当り（竿を出したらピラニャの入れ喰いだった）ひどく気味悪い思いをしたが襲われな

かった。パンタナルのコルンバ市の河辺でも子供が泳いでいるし、女たちが膝まで入ってノンビリ洗濯したり、水浴びをしている。

しかし、いったん町の周辺を離れて、自然そのものの中に入るとピラニャの習性はガラリと変る。河辺にポツンとある一軒家の洗い場は、底が見えるせいぜい二十センチほどの浅場に作られている。それ以上深い処で洗いものなどすれば指を喰いちぎられるからだ。勿論、絶対に泳いだりしない。

ピラニャは群棲している魚である。思うに、人気の多い処や舟の往来の激しい処では、ピラニャの群棲密度が低いのだ。そして、その群棲密度がある一定以上に高まると、人間にとっても極めて危険な団体行動を示すようになる。

私が鈎にかけた十キロクラスのドラードや二十キロ以上のナマズが、黒ピラニャの群に襲われたことがあるが、アッと言う間の出来事だった。豪快に引きまくっていたドラードの動きが変だな？と思った瞬間、苦しそうに黄金色の巨体がもがきながら水上に身をおどらせた。

それと共に直径一メートル半ほどの黒い水柱が周囲にドッと立ったのだった。何十匹かの巨大な黒ピラニャだった。ドラードは水に潜った。早く寄せようと夢中で竿をあおると、銀色の三十グラムのトビーをくあえたドラードの頭だけが、突きとばされたようにポー

ンと水上に飛んだ。それが着水すると、再びグイグイ引かれ、すぐ糸が噛み切られて、水は静まってしまった。その間、たった十秒そこそこの出来事だった。

ナマズを掛けたときは、ドーンという鈍い当りの重厚さで二十キロクラスだと見当がついたのだが、数分引き込みに堪えているうちに妙なショックが小刻みに伝わり始め、リールが巻けるようになった。ところが一巻きごとに竿に伝わる重量がどんどん減っていくのだ。結局、ボートのふちに浮かんだときは頭部の半分が残っているだけだったが、その頭が水中でパクパクと無残にあえいでいるので、思わず目をそむけた。

漁師が獲物のピンタードを卸している河辺に居合わせたことがあるが、不要な内臓を河に投げ棄てる瞬間、数人が一斉に飛び込んだかと思うほどの水音が立ち、黒ピラニャが襲いかかる。一キロか二キロの内臓のかたまりが水に着いた瞬間に消え失せてしまう。

魚がエサをあきる水音はガバッガバッと観察者をして快く興奮させる水音を立てるものだが、黒ピラニャの場合は角材で水面を思い切り叩いたような頬がゆがむほどの凄い音が一度湧き起こるだけで、観察者の心胆を寒からしめる。

それらの私の目撃したことから想像すると、大型の黒ピラニャの群に襲われたら、人間は五メートルと泳いで逃げられないだろう。石鯛くらいの魚が数十匹猛然と襲うのだから、ほとんど一瞬にして行動に必要な

筋肉が失われてしまうだろう。

ピラニャは動物質のエサなら何でも釣れる。ただし、共餌（ピラニャの肉片）では喰いが悪くなる。共喰いはあまり好まないようだ。ルアー釣りの対象としては、文字通り入れ喰いなので、短い時間なら非常に楽しめる。スピナー、プラグ、スプーンと、どんなルアーでも良いが黄と赤を特に好む。白と黒はずっと当りが少なくなる。

ピラニャは夜はあまり活動しない。網を張ったり置鈎を仕掛けたりする漁師が夜、仕事するのはそのためである。

夜網に巨大なスクリー（水蛇―アナコンダ）が掛かることがごく稀にある。漁師はカンテラの光を頼りに十メートルもある蛇をズタズタに切り、それをカヌーに積んで岸に埋める。肉を水中にすてるとピラニャが集まるからである（ただし、近年ブラジルでは淡水での網漁は職漁者も禁止されたので、これは何年か前の話である）。

ピラニャは釣糸を途中から噛み切るクセがある。漁師は「魚をいじった手でみち糸に触れてはいけない。匂いがついて、そこからピラニャに噛み切られる」と注意してくれる。確かにその通りだろう。

しかし、ルアー釣りをしてリーリングの最中にフッと軽くなることがある。ルアーから十メートルくらい

手許で切られたり、ルアーの近くで切られたり、切られる場所は一定していない。ただ理由もなく高価なルアーが忽然と消えてしまうのだからガッカリする。こういうことは静かで澄んだ湖沼ほどよく起こる。みち糸はリールに巻かれるのだから、釣った魚の匂いが付いているとは思えない。水中でのナイロン糸のきらめきがピラニャの行動を触発するようだ。不思議なことに無色透明のナイロンと七色迷彩のナイロンが最も被害をうける。

いろいろと試して、茶金色が比較的安全だ、というのが今のところ私の結論である。――浅い海中から上をみると、無色透明のナイロンはかえって光って良く見える――という潜水者の報告を読んだことがあるから、静かな湖沼でも同じようにピラニャの目につくのかもしれない。

ついでにこまごました事を記せば、やはり静かな沼の釣りでは、糸と水面との接点の小さな波紋にピラニャが飛びついて糸を切る。

チョウやトンボが尻をチョンチョンと水面につけて低く飛んでいるのを見かけることがあるが、小型の白ピラニャや中型の黄ピラニャたちの白い三角歯がそれを追って波紋の中心をパクッパクッと噛んでいるのだ。何も気づかずにそのままヒラヒラと高く舞い上がるチョウもいるが、何回目かに尻をつけたときに卒然と水中に消えてしまうチョウもいる。

ピラニャの歯の鋭さについては良く知られていて、いまさら述べる必要もないくらいだが、エンピツを黒ピラニャの口に入れたら音も立てずに切断した。切り口は刃物のようである。歯ではなく刃だ。ピラニャにお尻の肉をマッチ箱ほど噛み切られたドイツ人の体験談を聞いたが、ボートを岸に押し上げようと水に入ってやられたそうだ。肥ったドイツ人の尻など噛みにくい対象だと思うが、歯が少し内側に傾斜しているから押しながら二、三度噛み直すと充分にくい込むらしい。そして体をひねると、メスでえぐったようにスパッと切れる。

噛みつかれて肉を切りとられるまで一瞬の出来事で痛いとも感じなかったそうだ。ただ、〝ピラニャだ！〟と思ったらショックで虚脱状態になってしまって、体が動かず、仲間がボートに引っぱり上げてくれたという。

ピラニャの本当の凄さは、歯が鋭いだけでなく、頑丈で、しかもそれを動かす顎の力が魚体の大きさからは想像できないほど強力なことだろう。欧米や日本製のルアーに付いているマス頬やブラックバス相手の三本鈎など、クシャッと三本とも同時に潰して一本の針金のようにしてしまう。ドラードのような大魚ならともかく、たかだか三十センチくらいの魚では類を絶した顎の力であり、歯の丈夫さではないか。どのピラニャも

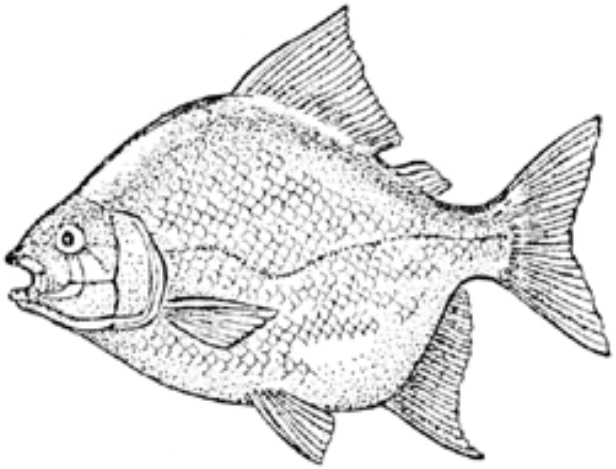
つやつやした素晴らしい歯並びの持主だ。ただし、老成魚になると、さすがに歯が抜けていて哀れさがある。

ピラニャがきわめて汚染に強いことも、最近知られるようになった。サンパウロ州のモジグアス河で製紙工場から大量の苛性ソーダが流出して、下流の魚の八十パーセントが死んだ事件が一九七六年に起きたが、ピラスヌンガ生物研究所の報告では、延長二百十八キロの河流を調査したところピラニャが最も大量に生き残っていたそうである。

南米も年々開発が進み、水質が汚染され、ダムが増え急流が少なくなってゆく。ピラニャの未来はバラ色に輝いているらしい。

パクー　pacu

パクーと名のつく魚は三十種ほどもあるらしいが、普通はパクー・グアスーを指す。体色は黒みがかり、偏平な魚体で鰭も後に寄っているので、一見した感じは石鯛に似ていなくもない。丸っこい臼歯が幾重にも重なって生えている様は特に似て



いる。雑食性だが歯が強いので、固い殻をかぶった木の実も平然と喰う。体重二十キロ、一メートル近くまで成長するが、よく釣れるのは三キロくらいのが多い。美味な魚なのでパクー釣り専門の漁師が多い。雑食性で何でも喰うので「河の豚（ポルコ・ド・リオ）」と異名されるが、釣りの場合の餌は牛の心臓、タニシ、ミミズなどで底釣りをする。

ピラニャが多い場所では動物質のエサが使えないのでマンジョカ（マニオク）芋の粉を練って、キンカンくらいに丸めて用いる。白いままよりもシロップなどで赤く染めた方がいい。

これは固い木の実のイミテーションなので、練餌の常識に反して、キャッチボールができるくらい固く練っていい。オモリなしのフカセ釣りで、木の実が自然に水中を流れるように操作する。

この釣りは岡っ張りをするにしても、舟で流すにしても、静謐を第一とする。木の実がポチャッと枝から落ちる要領で、団子の餌を心静かに投じる。ちっぽけな波紋はすぐに静まり、河はとうとうと流れている。小川ならいざ知らず、河幅二百メートルもの大河でいまの落下音を魚が聞きつけてくれたかどうか、何とも心もとない。心細くなってしまって何度もポチャポチャ団子で水面を叩く……。

しかし、これは不自然なのだ。さして風もないのに、そんなに連続して木の実が落ちるはずがない。パクー

はかえって警戒してしまうだろう。普段から注意深く、人間の住まぬ自然の中にどのくらいの量の音が存在しているか聞きとっておくと、疑似音を立てる頻度のリミットは自ずから分かる。都会の釣人は一体に音を立てすぎる。騒音の中に暮らしているし、一つのか細い落下音が魚たちにどんな意味を伝え、どんな反応を起こさせるか、まるで見当もつかないから無理もない。だが、鼓のようにたった一打ちか二打ちで実に利く音が、自然の中に存在している。辺境の住人たちは自然の中の音の意味を正確に聞き分ける。

パクーの一種に「パクー・ペーバ」という魚がいる。やはり偏平な魚体で、二十～三十センチくらいが普通の大きさだ。鱗が細かく銀色に輝いている(アマゾン河系にパクー・グァスーは棲息しないので、あの辺ではパクー・ペーバを単に「パクー」と呼ぶ)。

トウモロコシの実やミミズなどで良く釣れ、引きが強いので延竿に二号くらいの糸で釣ると面白いのだが、この魚は花を喰う。

岸辺によく咲く花は、カンバラといって、黄色い小さな花だ。春にさきがけて、大木に一面に花がつく。風が吹くとハラハラと花が散る……。水面に落ちた瞬間に飛びつくことはほとんどないが、ゆっくり数メートルほど流れるうちに、小さな波紋が起きて花が消える。

金鈎にその一センチはどのカンバラの花をつけて、

フワッと振り込む。流れていく花を目で追って、波紋と共に合わせる。次の瞬間、ものすごい引きが始まり、ハチの群が飛び交うような糸鳴りが左右に走る。やっと取り込んで魚をつかむと、興奮した魚の尻から黄色い絵具のような糞がこぼれる……。

これは私がたわむれに思いついて、試みた釣法だが、釣りとしては非常に優雅な感じがした。ただ、ウキをつけないと振り込むのがむずかしいので、フライの道具を使った方が良いと思う。毛鈎も小さな造花を作ったら面白いと思い、カンバラの花を写生しておいた。ごく小さなチューリップのような形の花である。

植物の中で最も栄養が蓄えられているのは種子だが、雑食性のパクー・ペーバが喰うところをみれば、花もかなり栄養があるにちがいない。試みに、カンバラの葉を水面に散らしてみたが魚が喰う様子はなかった。

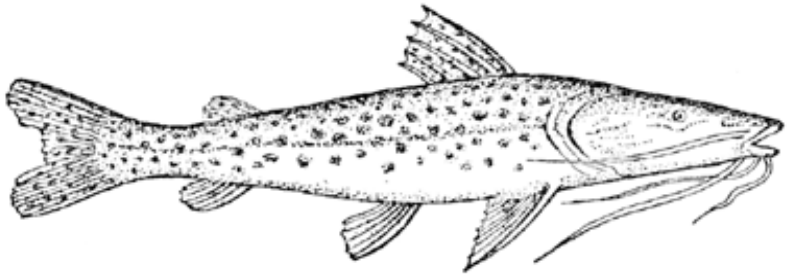
ただし、花の場合は羽虫のように、水面に落ちた瞬間に魚が飛びつくということは稀で、大半の花は魚に喰われぬまま流れ去ってしまう。九月頃になるとパンタナルでは河岸のいたるところに花をつけた木があるので、魚が必要とする以上の花が水面に散っているのだろう。そのかわり、花の木の下に群が集まっているから、釣りとしては三回流せば一回当る程度で、効率は悪くない。人間はなにを食べても同じ色にして排泄するが、魚はそうでもないらしく、こぼれる糞にも風情がある。

ピンタード　ｐｉｎｔａｄｏ

ブラジルの河魚の特長の一つは、無鱗魚（すなわちナマズ類）の数や種類が多いことである。その中で、美味な点や釣り味の良さで代表的なのが「ピンタード」（学名Ｐｓｅｕｄｏｐｌａｔｙｓ－ｔｏｍａ ｃｏｒｒｕｓｃａｎＳ）である。

全身灰色に黒い点が散っていて「斑のある」という名もそこに由来している。口は平たく突出して、歯やウロコそないが全体の恰好はパイクを彷彿させる。

どのくらいまで成長するのか、確実なデーターがないが、優に三十キロを越すやつを見たことがある。ナマズ類としては中型のクラスである。釣りとしては二～七キロくらいの型が多い。ピンタードは小骨がないので、フォークとナイフで食事をするブラジル人に最も好まれる魚だ。スープ煮にしてもフライにしても旨い。



一体に、西欧式のテーブルマナーは魚を食べるのには不便この上ない。ニワトリのように手でつかむことは魚の場合は許されないから、小骨の多い魚になると絶望的である。

ナイフとフォークで細い三叉骨をよけていると面倒で、途中でいやになる。さらに悪いことに、一度口に入れたものをまた出すのは非礼の最たるものだから（ブドウの種などは例外だが）、うっかり小骨を口に入れてしまうと誰でも目を白黒させる。噛みくだけるかどうか舌先で一応は当ってみて、いよいよ駄目となるとナフキンなどでさり気なく口を隠して骨を出す。海魚ではサメ類、河魚ではナマズ類の売れ行きが抜群なのは小骨がないからだ。

しかし、ピンタードは小骨云々を別にしても、美味な魚である。

パンタナルで漁師が獲って商売になる魚は、ドラード、パクー、ピンタードの三種にかぎられている。その他の魚はまず獲ろうとしない。

ピンタードは活魚か魚の切身で、底釣りをする。中くらいの流速の泥底を好むが、小魚を追って湖沼にも入っている。ナマズ類の中では例外的に敏捷で、中層を流しているルアーにもよく飛びつくし、鈎に掛かってからのファイトも縦横に走り素晴らしいものだ。漁師は夜に置鈎を仕掛けてとるが、昼間でもなかなかに釣れる。

以上で、釣りの対象として代表的な四つの属の魚について述べたが、パンタナルには無数の魚類が棲息する。どんなに少なく見つもっても千種はいるだろう。釣

鈎に掛かる魚を指折っただけで、たちまち百種を越すのだから。

釣りをする者の立場からは、それらの一つ一つに愛着があり、詳細に語りたいのだが、ここでは不可能である。しかし、釣りの旅の話を進めるうちに、幾種類もの魚について触れることができると思う。

第三章

大湿原（パンタナル）の旅

犬魚の強襲

初めてパンタナルへ行ったときのことだ。

朝、目覚めてテントから這いだすと、赤い朝日が昇るところだった。熟れすぎたトマトのような色をしている。乾期の中央ブラジルは開拓や落雷のためにいつもどこかで山が燃えていて、花曇りのような日々が続く。セスナ機で八百メートルも上昇するとカンカン照りの青空なのに、下界のモヤに突っ込んで着陸すると光は溢れているのに影がないのだった。

顔を洗ってコーヒーを飲むと、私は仲間より一足早く、漁師のエジソンと共にモーター船に乗った。ボートは水草の中を離れて流れの中心へ向かう。

岸でコーヒーをすすりながら手を振っているのはサンパウロ人文科学研究所のメンバーが中心だが、キャンプをしている総勢九人のうち、釣りをするのは三人で、野花の写真を撮りに一人、あとの五人は漁師や道案内や炊事係というノンビリしたグループだった。

ボートは二百メートルほど遡行して、パラグアイ河本流とパラグアイ・ミリン河との合流点に停った。広々とした三角形の水面だった。かなり澄んだ本流の水と紅茶色に黒ずんだ支流の水がぶつかる処は、小さな渦が不規則に並んで踊っていて深そうだった。

私の竿はアブ社の硬めのリール竿で、ブレットン社の中型スピニングリールを付けている。道具箱をかき

廻して、銀色をした十八グラムのスプーンを糸の先につけた。この擬似餌は日本製で「キング・バイト」と名付けられているが、開高健氏からの贈物だった。

軽く投げる。

モヤが漂う水面に落ちたスプーンはヒラヒラと身をよじらせながら沈む。小さな銀色が数回きらめいたとき、その十数倍の巨きな白い光が下を走った。糸がグーンと延び、竿が曲がった。

次の瞬間、ドバドバッ！という感じで太刀魚に似た魚が垂直に空中に飛びだした。空間に延びきると、鉛の棒が融けるように複雑に変型し身をくねらせる。まるで力一杯ほうり投げられたように、スプーンが牙だらけの魚の口から離れ、横へ飛ぶ。それは鈍い朝日を反射しながら十メートルほど投げられて水に落ちた。魚は素早く潜ってしまった。

「フーッ……！」

一瞬の緊張がとけて、私は溜息をついた。ペイシェ・カショーロ（犬魚）の大物がいきなりきたのだった。七十センチは軽く越していた。鱗が細かく、体表はねばねばしている。口を開けると犬魚の名の通り凄い歯が並んでいるが、下顎の二本の牙は特に長く鋭い。上顎に牙を納める穴が開いている。岸辺で水を呑む牛の舌を喰いちぎったりする。獲物を襲うときの果敢さはピラニヤ以上だといえる。

外れたルアーを回収しようとしてリールを巻きかけ

ると、再び竿先がひったくられるようにのめった。強く張った糸の角度が浮上して、別の犬魚が軽快に跳躍した。その口にちゃんとルアーを銜えている。急いで竿を立てたが遅かった。振りほどかれたルアーはボートめがけて飛んできて、舷側近くに落ちた。

糸がゆるんでいるので、スプーンはキラキラ光りながら沈んでゆく。暗い水底から白い光が矢のように上昇し、沈んでゆくスプーンの寸前で拒否するように身をひるがえした。続いて交差した二筋の光芒が突進してきた。

どちらかが喰った。再び糸が延びる。竿を立てるとくわえ方が浅かったらしく、一暴れで手応えが消えた。ルアーを急いで巻き上げる間にも、幾筋かの太い光が水中で綾織模様を織った。やっと手に戻った金属のスプーンの表面は、もうギザギザの石でこすったように荒れている。

「何という、魚の群……」

ポルトガル語で呟きながら、私は呆れてエジソンを見た。

櫂を立ててボートの位置を保ちながら、彼は「シン」とうなずいて、

「我々はやつらのちょうど真上にいる」

と低く言った。

擬似餌というものは、サジの形をしたスプーンにしろ、小魚を模したプラグにしろ、所詮ニセモノだから、

活きて泳いでいるように操作をしないと魚が喰わないとされている。

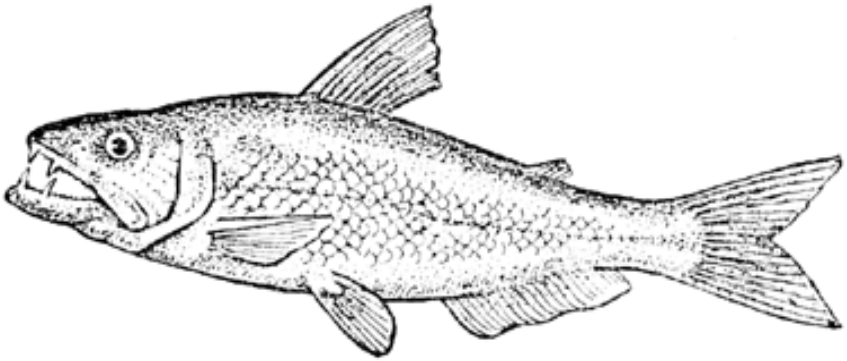
その常識を破って、ここでは魚たちが勝手にルアーをくわえては投げ飛ばすらしい。面白がってキャッチボールをしているようだ。

この約六十メートル四方の水域に一体どれくらいの犬魚がいるのだろうか？　牛の舌を噛み切り、スプーンの金属をギザギザにしてしまう凄い連中の大群の上に、私たちは小舟を浮かべているわけだ。

（とにかく、釣ってやろう）

リールのドラッグ装置をゆるめて、軽く引くと糸が滑りだすようにした。

面構えに似ず案外に口腔の肉が柔らかい犬魚には、この竿の穂先が硬すぎるのだ。タヒチの悪魔の踊りさながらに牙をむいて痙攣的に体を振る。その複雑絶妙なアクションに硬い穂先はフォローできず、どうしても糸がゆるむ瞬間がある。激しく揺れるスプーンの重みが加わり、鈎がすっぽぬけてしまう。空中で魚の口のスプーンが踊り子の装身具のように金属音を立てるのだ。ドラッグをゆるめておけば、



ペイシェ・カショーロ

穂先の硬さはかなりカバーできる。私は再び投げた。
一、二、三、四……口の中で数える。このスプーンは三つで一メートル沈む。
六まで数えたとき、糸がスルスルと延びはじめた。銀白色の魚体が斜めにのびのびと水面を飛んだ。抛物線の頂点で不意に体を震わせながら着水して潜る。鈎は外れない。すぐまた小さく跳ねた。……外れない。
その直後、彼は螺旋状に身をくねらせながら垂直に飛びだした。あたかも透明な蜃気楼の鐘楼に高々と駆け昇るようである。全身を現わし、銀色のゼラチンのようにくねり揺れながら横に移動し、いきなり叩きつけるようにトンボ返りを打って水に潜った。
その瞬間、糸が弛んでしまった。華麗な動きに見とれて手許がおろそかになった。
しかし、……もう次の魚が掛かっていた。様々な姿態で跳ねる。そのたびにジリジリと微かな音を立ててドラッグが滑り、糸がでる。
朝もやの水面に細く突き刺さっていた茶金色のナイロン糸の先がだんだんボートに近寄り、玉網に最初の一匹を潜り込ませて、私はホッと息をついた。
暴れる魚を生簀に入れ、手を洗ってからルアーを換えた。
エンジンの音が響いて、振りむくと一隻のボートが上流へ向かっている。斎藤博士と河合技師がトローリ

ング竿を立てて厳めしく坐り、漁師のジョンが船外機の舵をにぎっている。

河合さんは土木技師だが日系人で最初にブラジルの大学を卒業した人、斎藤さんはサンパウロ大学コミュニケーション学科の教授だ。二キロほど上流の島の肩にある瀬を目指しているらしい。手を振りながらボートは木陰に隠れた。

釣場に向かう舟の人影を望見すると、一様に肩が張っているので可笑しい。帰りは寝そべっていたりするのだけど。

モーターの音が遠ざかり、三筋ほどの波が寄せて岸辺の草に吸い込まれると、入れちがいに夥しい空カンがゆっくりと流れてきた。一リットル入りの食用油の空カンだった。カンの群の最後に、小さなカヌーが一隻ついている。上流の一軒家の漁師の夫婦が乗っていた。

「お早よう（ボン・ヂア）」

「ボン・ヂーア」

悠長な、歌うような発音で応えてカヌーは流れて行く。

五メートルほどの間隔で水面に散る数十の空カンは、さながら家畜の群のようである。カンには二〜三メートルの糸がついていて、鈎にはマンジョカ（マニオク）芋の団子が吊してある。パクーを釣っているのだ。

魚が掛かるとカンが子馬のようにピョコピョコ上下

するから、サンパウロ州ではこの漁法を「仔馬（カバリーニョ）」と呼んでいる。ただし、多獲するという理由で禁止されている。底が平坦な河なら糸を長くして、ミミズをたっぷり付けて底すれすれに仕掛けを流せば、流域のナマズ類を総ざらいできる。このマットグロッソ州では魚の濃さがちがうから、禁止されていないようだ。確かに、この辺のパクーなら漠然と流すより、積極的に寄せ餌で集めて一本釣りで誘いをかけた方がたくさん釣れる。

エジソンに聞いてみると、この辺では単に「流し（ロダーダ）」と呼ぶそうだ。ナマズはこの釣法ではやらず、パクーだけだと教えてくれた。たしかに、二十キロ、三十キロのナマズでは食用油の空カンでは無理だろう。

鶏の鳴き声が朝の河面を伝わって手にとるように聞こえる。漁師の一軒家まで一キロ半くらいあるが、静かな水面は音を遠くまで伝える。

「フフフ……」

流れてゆくカヌーで漁師の妻が低く笑う声が聞こえる。黒人の女のふくよかな声は、水の艶を吸って睦み言のように響く。

その声を聞きながら、私はルアーを投げた。

二四目……三匹目……四匹、五匹……。あまりバラさず、次々に釣れる。

たちまち汗だくになった。二匹だけ食用に生簀に入れて、あとは放すしかないが、魚がルアーに飽きる様子

は全然ない。
私はだんだん焦りを感じた。狙っている本命のドラードがまだ一匹も掛からないからだ。
それにしても、普通はニセの餌であるルアーを投げ続けると、魚はそれを見破りソッポを向くようになるものだが、ここの犬魚たちは執拗に追い続けている。群がとてつもなく大きいらしい。多少ヘンでも他の魚にとられぬうちに一応くわえてみよう、というところらしい。こんなに犬魚がいる理由の一つは、パンタナルの漁師がたった三種類の魚しか獲らないからだ。パクー、ドラード、ピンタード以外は商業価値がないから、見むきもしない。アマチュアの数は知れたものだ。
櫂をゆっくり動かしているエジソンは、私が釣るたびに微笑し頷いてくれるが、本当は全然感心していないのだ。犬魚など彼等にとってビタ一文の値打ちもないのだから。その上、犬魚は小骨が多い。でも、塩にして焼くと、カマスやサヨリに近い自身の味でなかなかに旨い。
……だんだん手が痺れてきた。三十キロ、いや五十キロ近くの重量を釣っただろうか。汗が目にしみる。竿をおいて、川の水で顔を洗い、ついでに髪まで濡らした。ひどく気持ちがいい。一休みしようと、私は煙草に火を点けた。

黄金の魚

突然、エジソンが鋭い声で、

「あそこだ！」

と叫んだ。

振りむくと、両河が合わさる岸辺の浅そうな水草の中で水しぶきが上がっている。ガバッと黄金色の光が輝いた。ドラードが小魚を追い廻しているのだ。

遠い。六十メートル……もっと、七十メートルくらいか。タックル・ボックスに飛びついて一番重い四十グラムの「サラー」に換え、ドラッグを締めるなり力一杯投げた。

ギリギリにとどいた。

＜理想的にはもう少し向うに落ちると良かったが……＞

と思いながら、根掛かりしないようにすぐリールを巻く。糸ふけがとれると、グーッと糸が張っていた。

一瞬、魚か根掛かりか分からない。竿をあおると、シーソーのように反対に持ち込まれた。

＜きたっ！＞

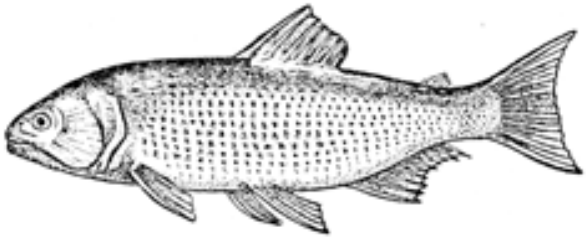
水面すれすれでくわえたらしく、いきなり巨体が跳躍した。素晴らしいドラードだ。たっぷり十キロはある。金色の光が河面にサッと広がる。ドッと水柱があがった。

ドラードは跳躍のときすごく多量の飛沫をあげる。魚体が厚く、尾の力が強いからだと思うが、水を噴き上げながら躍り上がる感じだ。犬魚の軽快で躁然たる跳躍と趣を異にし、スピード感にあふれながらあくまで重厚だった。光線が斜めに入る早朝や夕方など、広がった飛沫の一つ一つに黄金色が眩く宿り、きらめくのだった。

「ドラードだ！（オ・ドラード）」

思わず口走ったきり、腕が硬直し心臓が早鐘のように鳴り始めた。

周囲の風景がぼんやりと暗くなり、魚だけがキラキラと光っている……それは不思議な感覚だった。すでに十数匹の犬魚を釣っている。腕が痛くさえなり始めている。それなのに、たった一匹のドラードが飛んだ瞬間、何かまったく違う新しい感覚が突き上げてきたのだった。



こんな感情が昔あった、と思った。

顔にニキビがたくさんあった頃、大勢の女学生の中でたった一人のお目当てのセーラー服が視界に入った瞬間、サッと顔に血がのぼり周りの少女たちや家並がボンヤリとかすんでしまった。隣の少女と楽しそうに喋りながら去って行く彼女をなす術もなく見守りながら、心はあてのない喜びに満たされていたのだった。

魅せられたまま、私は見ていた。もう一度、ドラード

は斜めに低く飛んだ。それきりだった。糸が弛んでいた。

急いでリールを巻き、すっかり熱くなって、呼び戻すようにルアーを何度もそっちへ投げた。木魂は響かない。河面はシンと静まっていた。一度、数匹の小魚がルアーの着水に驚いて跳ねただけだった。

横目でみると、エジソンは黙ってニヤニヤ笑っている。私は肩をすくめて、投げるのをやめた。水滴をしたたらせた四十グラムの重さを掌にとったとき、目がクラクラするほどの無念がこみ上げてきた。

……ずっと後のことだが、私は開高さんたちとここから二百キロほど上流でドラード釣りをした。開高さんを現地の船頭に委せ、私は菊谷というフリーライターの人と一緒にボートに乗った。

彼の竿に初めてドラードが来たとき、実に不思議な光景が展開されたのだった。ボートのすぐそばでスプーンに飛びついた魚は、二度続けざまに水面で暴れた。釣り手に飛沫がかかるほどの近距離だから、迫力があった。

それはいいのだが、私が横から見ていた菊谷さんの姿は、アルカイック期の彫像のように硬直したまま動かなかったのだ。

魚は鈎を外し、チラと尾鰭を見せたのが最後だった。

「どうしたの？　菊谷さん」

飛沫が収まってから訊ねると、

彼は空中から魂を返してもらったばかりのように、ぼんやりこちらを向いて、
「いや、あまり突然で……驚いちゃったんだ。こんな近くで掛かるとは思っていなかったよ。もう手許にルアーが見えたのに、いきなり来たんだ。アッアッと思ったけど、どうしても体が利かないんだ」
喋っているうちに、少しずつ口情しそうな表情が増した。
「でも、魚を掛けてから不動の姿勢というのはマズイんじゃないの」
と私はからかった。
彼がリールを巻くと、太い鈎が真っ直ぐに延ばされていた。

エジソンのニヤニヤ笑いを想い出すまでもなく、私も菊谷さんと同じような状態だったにちがいない。魚が遠くで跳ねた情景がスローモーションカメラのようにひどくゆっくりした動きで網膜に焼きついているだけで、こちらがどう対処したかという記憶は剥落している。多分、何もしなかったのだ。だから記憶がないのだ。
吸いかけのまま船底に転がした煙草をとって、あらためて吸っているうちに、私は気をとりなおした。何としてもドラードを一匹揚げなければ。

私は河面を見廻した。
ボートの周辺の水域に犬魚の大群が泳ぎ廻っていることは間違いないが、ドラードもいるはずだ。タナがちがうのかもしれないと思った。もっと深く沈めてみよう。
途中で犬魚にとられないように遠くに投げて、重いルアーを充分に沈めてから引いてみた。
そうやって三度目のリーリング中、手許に寄せていた糸がゆっくり向うに持っていかれた。魚が来ている！　力一杯合わせた。ひったくられるような引きが応える。深く水面に突き刺さっていた糸がゆっくり浮上して、三十メートル先で飛んだ。
「今度はドラードだ。外すな！」
エジソンが声援する。
再び、竿を持つ手首が硬くなる。なんとかとりたい、逃したくない、という気だけが黒い蝙蝠傘のようにかぶさって動作を束縛する。魚は水面を叩くように反転した。ガバガバと水音が暴れる。すごい剛力だ。グスグスッという感じでスプーンが外れた。
「逃がした……」
うめきながら巻くと、鈎が延びていた。四十グラムの「サラー」に付いている三本鈎はかなり太いが、その二本が延びている。
深くスプーンを沈めても、かなり犬魚がくる。
陽が高くなって、九時頃、三匹目のドラードが掛かっ

た。私はドラードの動きにどうにか対応できるようになっていた。ドラッグ装置はさっきよりわずかゆるめて、鈎を延ばされないようにした。固い口に鈎を掛けるときだけ、リールの糸巻きに手を添えて糸が滑り出さぬようにして竿を立てる。

一回目の跳躍、……鈎はついている。七キロくらいの奴だ。

二回目、本気で怒ったように高く高く飛ぶ。黄金色の魚体が一メートルも飛ぶ。今まではここで外れた。それをどうやら持ちこたえた。いけそうだと思う。

三回目……魚の動きがハッキリ分析できるようになった。はたから見ればヘッピリ腰で焦った姿勢にちがいなかろうが、本人は余裕をいくらか感じている。ただ、まだ余裕の量が少なくて外見までは行き渡らない。

それきり、飛ばずに深く潜った。どんどん糸がでる。かなりの時間をかけて魚の姿が見えるところまで寄せた。が、そのまま動かなくなった。ボートはいつの間にか流れの中央にいる。魚は上流へ頭を向け、どっしりと泳いでいる。この魚はどんなに弱っても下流へ逃げないのだ。

「もう少し……」

玉網を構えながらエジソンがうながす。

「よし」

竿を立てると、嫌って潜る。数回それを繰り返して、弧を描くように舷側に寄ったとき、エジソンの玉網が

流れ藻のように吸いついた。
玉網を受けとってスプーンを外そうとすると酷く暴れた。柄がこわれそうだった。鈎が延び、網にからまった。
私は汗をかいていた。
ここは赤道直下のアマゾンよりかえって暑く、室内温度が四十度を越すことさえある。それに加えて、一面の水の世界だ。湿度も高い。しかし、そのときの汗は言うまでもなく、ドラードとの闘いの緊張のためだった。
両手で魚を持った。ずっしりと重い。
「いいドラードだ」
櫂をあやつってボートの位置を戻しながらエジソンは賞めてくれた。
「OK。キャンプへ戻ろう」
生簀へ入れて、私が言うと、彼は頷いて船外機を降したが、始動させず待っている。
その視線を追うと、本流に空カンの群が現われた。夫婦者の漁師が二流し目をしているのだ。仕掛けの群が流れ去るまでモーターを始動させない。雑食性のパクーは騒音を嫌うのだ。
私たちの見ている前で、一つのカンが急にピョコピョコ動き始めた。本当に仔馬がはねているようだ。カヌーの二人は漁師だから、アマチュアのように＜釣れたあ＞などという表情はしないが、ごく僅かに満足そ

うな表情で櫂を持つ手に力を込める。流れて行く空カンの間を縫って動くカンに近づくと、黒い偏平な魚体をカヌーに投げ込んだ。

エサの団子をつけ終ったカヌーはゆっくり後退して、再びカンの群の後についた。トモに坐った夫の方が無言でこちらに手を挙げて二人は降っていった。

この辺では、〝カン流し〟は漁師のクズだそうだ。ノンビリして資本も要らぬが、魚獲量の少ない漁法に甘んじているのはプロとしては下の方だろう。モーター舟を持たないからコルンバ市の仲買人の処にさえ魚を運べず、中間の運び屋に買い叩かれる。

だが、一流の漁師であるエジソンの表情には貧しい夫婦への軽蔑はみじんもみられない。

ただ、相手の漁を邪魔しないように、注意深く間合いを計っていただけだった。エジソンは第二次大戦のときイタリア戦線で戦ったそうだ。すると、五十歳前後だろうか。髪には白髪が混じっている。痩形の、緊った横顔を見せて、遠ざかるカンの群を眺めていた。草食性（雑食性）の魚がどれほど音に敏感か教えられる。

私は生簀のいたを開けた。二匹の犬魚と一匹のドラードで生簀が一杯すぎるので、犬魚を二匹とも放した。？というように細長い身をくねらせてから、彼等は潜っていった。

生簀に手を入れてドラードの腹をかかえる。太腿ほ

どの太さと重さがあった。どっしりとしている。私は飽きずに魚を眺めていた。

河エイのポカン釣り

ボートを炊事場の下につけると、

「どうだった？」

留守番役の中川さんが木陰からノッソリ立ち上がって訊ねた。

生簀に両手を入れて、暴れるドラードを差し上げると、

「まあまあの大きさだ」

と彼は鷹揚にうなずいた。

「おう、釣ったな、釣ったな」

野花の写真を撮っていた古田土さんが、ホーチミンヒゲを振りふり駆けつけて、写真を写してくれた。それが前出の写真である（三四頁）。

「メシはどうだい」

言われて、腹ペコなのに気づいた。

「できてるよ。僕たちはもう食べた」

中川さんはガソリン

ポストの経営者だが、今回は車を提供して運転もしている。我々は敬意を表して〝車長〟（しゃちょう）と呼んでいる。車長は釣りをしないので、炊事係まで買ってでてくれた。持つべきものは友である。

「では早速……」

アルミ皿を片手に何気なく鍋の蓋を取った瞬間、ウッと息が詰まった。

ゾウの排泄物のような物がある。

食物のはずだ、という前提のもとにしばらく観察していると、昨日の昼のヤキメシと夜のライスカレーの残りにネギと玉子を加えて加熱したものではないか？という見当がついた。

全体としては惨憺たる色彩効果をもっている。

……仕方がない。箸の上げ下げまで美人の奥さん任せの中川さんの料理だ。私たちに存分に釣りをさせようという友情だけで胸が一杯だ。感謝の念と共にアルミ皿にそれを移し、スプーンで口に押し込んだが、頬張った瞬間、＜これからあと数日の食事は一体どうなる！＞という深刻な恐怖に襲われたことも事実だった。

目分量で、餓死しないだけの量を嚥下すると、私は皿を洗い、釣具をテントに立てかけてから水を浴びにいった。（これ以後の食事はさほど酷くはなかった。食物が余るとそれを混ぜる癖が彼にあることを発見して、私たちは余ったものは撒き餌に使うようにしたのだ）

小さな砂浜が露出している方へ歩いて行くと、古田土(こだと)さんが三脚をすえて一心になにか狙っている。望遠レンズの向うを見ると、二羽のジョン・デ・バーロ(粘土のジョン)が巣を造っていた。ふっくらした茶色の羽が愛らしい小鳥だ。キビキビした動作をする。

その名のように、粘土で木の股や枝に丸いきれいな巣をかける。その出入口は雨が降り込まない方向を必ず向いているので、ジョン・デ・バーロの巣を見ればその地方の風雨の方角が分かる。年によっては出入口の方向を変えるので、天候の予知能力があるらしい。土地の人々は、ジョン・デ・バーロの新しい巣をみれば今年の天候がほぼ分かると言う。

この鳥はいつも番いで仲良く行動しているが、嫉妬心が強い。メスが浮気をするとオスは彼女を巣に追い込んで入口を塗りこめてしまう。入口が閉じられた古い巣がときどきあって、毀すと小鳥のミイラが入っているのでそう信じられている。ミイラは必ずメスである。

……オスが浮気をした場合はどうなるのだろう？　私は多くの人々に訊ねたが、誰も知らないらしい。男たちはエヘヘと笑うだけだし、女たちは「そりゃ、メスは怒らなければなりません」と断言するが、どちらも質問の答えにはなっていない。

古田土さんがファインダーを覗いている二羽の小鳥は新婚ほやほやらしく、人間の私の目にも仲睦まじく

イソイソ働いているのが分かる。小鳥でも仲の良いのは気持ちがいい。

自然界の〝弱肉強食〟や〝生存競争〟は真実であるが、それをあまり強調する見方は全体の調和を欠くようで私は好まない。

私たちが自然に惹かれる第一の理由は、この広々とした調和感覚でないだろうか。生態学がポピラーになって、私たちも〈棲み分け〉とか〈極相〉というような概念を持つようになった。しかし、それはあくまで自然の一部にすぎず、調和の大部分を直覚的にとらえ、その中に身を置くことに喜びを感じるのだ。

放流された魚、監理された釣場がまだ存在しないブラジルでは、釣りに人為的なルールはない。その代り、自然のルールが厳存する。自然の声を聴くこと、それに従うこと……それがルールだ。

盛んにシャッターを押している古田土さんのそばを離れて、私は河へ入った。

水浴びに適した砂底の河岸には、河エイがひそんでいると思わなければならない。尾に危険な毒針がある。鋭利な鳶口の形をした針で、うっかりエイの体を踏みつけると、目にもとまらぬ速さで尾が反転しビシッと毒針を叩き込まれる。死にはしないが、三日三晩は七転八倒の苦しみを味わう。どんな剛毅な男でも泣くという。刺された傷あとをいくつか見たが、銀貨くらいの丸

さで肉が陥没しているのが普通だった。ゴム長の上から刺された人もいた。高熱のためウワ言をいい、病院にかつぎ込まれて一週間入院したそうだ。

老成した大型エイは毒針が落ちているから安心だが、週刊誌大までのヤングが危険なのだ。そのくらいまでは外敵も多いから攻撃的なのだろう。

この辺の牧場の牛もよく知っていて、流れに入るようなことはせず、岸辺から首をのばして水を呑む。外から買い入れた牛などはそれを知らないから、エイにやられてビッコになったりするそうだ。暴れ牛を追うとき、乾燥したエイの尾を突きつけると大人しくなると牧夫は言う。

さて……。エイに刺されないためには、摺り足でそろそろと水に入るのだ。こうすると、エイも警告をうけて移動するようだ。あまり遅い必要はないが、あまり速く進むと、追い立てる前にエイを踏む可能性がある。能の歩みそっくりに、スッと足を滑らせパタッと砂ぼこりを立てて停める。これが有効な警告なのだ。馴れると、慎重に、かつ、のびのびと進めるようになる。ちょうど、ワキが橋懸りの中央をすぎ舞台に近づいたときくらいの速度が良い。

……そうやって、儀式めいた足どりで、私は膝まで水に入った。

体を洗う。気持ちが良い。汗をすっかり流したので、今までうるさくつきまとっていたアブもいなくなった。

小魚たちがチョンチョンとスネをつついている。
髪を洗ってブルッと一振りして輝く河面を眺めると、水温になじんだ五体からこのまま流れに泳ぎだしたい衝動が突き上げてくる。
しかし、流れの中にはピラニヤがいる。
＜血が流れなければピラニャは喰いつかない＞という説があるが、それは俗説にすぎない。
アマゾン支流のアラグアイヤ河で水浴中にチンチンを喰われた男もいる。女性なら生理という事もあろうが、男だったのだ。
何がピラニヤの気に入らなかったのか？
それとも、それは水中で不審な、ピラニヤの興味をそそるような動きを示したのだろうか？
その男は新婚早々ご難にあったので、無残な話だと思ったが、今も夫婦仲はいいという。全部喰われなかったのが不幸中の幸いだったと、この話を私にしてくれた人は語った。
ひと泳ぎしたいのは山々だが、私もピラニヤを挑発するような行為は厳につつしまなければならない。インヂオは素裸だからペニスケースをつける。私は水泳パンツをはいている。
が、無差別攻撃に遇ったら、一枚の布など無いも同然だろう。
腰まで入って、すぐに膝までの処に引き返した。坐ってもヘソまでしか水はこない。寝そべって全身を水に

浸した。
熱した身体が涼気に洗われる。バタ足をしようかと思ったが、挑発行為の一種だとピラニヤに感ちがいされるといけないのでやめた。水音を立てると肉食魚の注意を惹くことは、何度も観察した。竿先でバシャバシャ水をかきまぜると、二十メートルくらい離れた所でボンヤリしているトライーラ（雷魚に似た魚）が、そっちを向く。水音を立て続けるとその魚はかなりのスピードで泳ぎ寄ってくる。
竿先でさえ二十メートル先の魚の注意を惹くのだから、バタ足だと五十メートルくらい先まで聞こえるのではないだろうか。仕方なくじっとしていたが、膝までの水では立ったり寝そべったりしてもすぐあきてしまう。
この河にもトライーラは棲息する。
〝そうだ！　昼食まではまだ時間があるから、トライーラのポカン釣りでもしよう〟と思い立った。
「ポカン釣り」は餌を水面に躍らせて杭や水草の陰にひそむ肉食魚を誘う釣法だが、世界的に行われる土着の釣りである。ブラジル海岸地帯のバナナ園などでも、裸の子供たちが短い竹竿で、崩れた排水溝の水草の間にポチャポチャ餌を躍らせてナマズやトライーラを釣っている。古典的な餌は活きたカエルと世界共通の相場が決まっているが、勿論、ミミズ、魚、牛肉などでも良い。

私は小魚を釣って、それを餌にすることにした。
振りだし竿に細い糸をつけ、袖型の金鈎を結んだ。中川さんが腕まくりして昼食の準備をしている横を通って、ボートをもやってあるカンバラの木の下に行った。振り仰ぐと黄色い花盛りだ。
風が吹くとハラハラと散り、水面で小舟のようにツーと走る。
岸辺に散り敷いている花の一つを拾って、金鈎に刺す。木の下は澱みになっている。流れと澱みの接線にうまく振り込んでしばらく待っていると、ツンと花が消え、キュッと竿先がしめ込まれる。
最初に掛かったのはパクー・ペーバだった。小型ジェット機みたいに走り、糸が楽器のように鳴る。次に掛かったのはアパイヤリだった。熱帯魚店でオスカーという名で売っているが、褐色でハタに似た魚だ。肉食魚なのだが、花も喰うとは知らなかった。
それから、ランバリが釣れた。小鮒のような小型で柔らかい魚なので活餌に適する。ランバリを二匹釣って、ポカン釣りの餌ができたので、漁師の延竿を借りてさっきの砂浜へ戻った。
焼けた砂の上を素足で歩き、浮草が密生している隙間へ小魚をそっと降し、水面でポチャポチャさせる。竿先で水面をかき廻して、魚が餌を追って暴れる擬音を出すのも効果がある。
一分間ほどやって当りがない場合は、エサを水底ま

で沈め上下させる。それから五メートルほど移動して、同じことを繰り返す。

一日中やるほどの釣りではないが、素朴な興趣がある。青い花をつけてホテイアオイが浮いているのどかな河岸の風景が、竿を持って忍び寄ると一変して、鋭い歯の兇暴な魚たちの隠れ家として目に映る。

三ヵ所ほど移ったとき、ガバッと来た。黒い尾が水草を叩いた。一瞬ゆるめてから大合わせ、が定法だが、日中で喰いが浅いらしくエサをちぎられただけでスッポ抜けてしまった。

すぐ餌を降して追い喰いを待ったが、それきりだった。

（残念、残念……）

呟きながら移動する。

この暑いのに、アリがせっせと動き廻っている。足の裏だけでも暑いのに、砂上に密着しているも同然のアリはすごく暑いだろう。踏まないように歩いて、餌を付け換えた。

しばらく表面を叩いてから、定法通り餌を沈める。昼は彼等の動きは不活発だから底で喰うことの方が多い。ナマズもトライーラも夜行性だから小さな目をしている。昼間だって彼等の目は物憂く光ってはいるだろうが、周囲の状況を把握するには聴覚と嗅覚だけで充分だから、目は開店休業に近いだろう。水底に沈めた餌を小突く。深さはせいぜい七十センチくらいか。

と、その浅場に剛力の主がひそんでいた。
いきなり竿をひったくられるようなショックが来た。そのまま沖へ一直線にのされた。普通ならここで他愛なく糸が切れるのだが、漁師の頑丈一点張りの道具の有難さ、ズルズル砂の上を引きずられてから、こちらから水に駆け込んで体勢を整え竿を立てた。
剛力の主は真っ直ぐに沖へ向かって引き込む。凄い力だ。これはエイだ！　鈎掛かりしてからの闘争ぶりは海のエイとまったく同じである。まず沖へのす。次に水上にグライダーのように飛び、三角とも四角とも分からぬ軌道を走り廻り、最後は水底にピタッと貼りついて動かなくなる。
もっとも、これは糸を長くだしてやりとりした場合だ。今は延竿だから、やりとりの余裕はない。ありたけの力で引っ張りっこをして強引に岸へ曳き上げてしまった。

河エイのポカン釣り

河エイとしては大きい。身が厚いから三キロくらいあるだろう。尾が切れて毒針を持たない老成魚だった。波打っている茶色の背に赤い斑点が毒キノコのように輝いている。ショウユに少量のサトウを加えて煮付けると旨いが、今日はドラードがあるので写真だけ写して急いで浮草の下へ滑り込ませた。うっかり中川さん

に見つかると「それも食おう」と言うに決まっている。ドラードとごった煮にされる不安がある。

午睡の夢

上流からボートが帰って来たので、エイ一匹の釣果でポカン釣りを切り上げた。カンバラの木の下に戻ると、大型スプーンのトローリングで四匹のドラードが揚がり、舟底に横たわっていた。エジソンがそれを開き、厚塩を振って木陰に吊した。

待っていた人、帰って来た人、全員が花の木陰に円座しアルミコップに氷を入れ、ウイスキーのビンが廻される。〃帰ってきた舟の喜び……〃というサンバの一小節が聞こえそうだった。虻や蝶も賑やかにお相伴する。蝶は紫色に輝くモルフォ蝶だった。日盛りを飛ぶと金属板のように光線を反射する。森の中では花の木の周りが動物たちの社交場なのだ。

二人の漁師を仲間外れにしないように、会話の大半はポルトガル語だが、釣り談議が弾むことは日本語もポルトガル語も変りないのだった。

陽光の中を酔いが明るく廻り、昼食を済ますとそれぞれテントに潜り込んで、キャンプはシーンとした。

メインの六人用テントが枝振りの良い木の下に張ってあるが、中は蒸し暑いので、それぞれこの地方独特の

一人用カヤ風テントに潜り込んだ。白木綿の目の粗い布を細長い四角形に縫っただけの簡単なものだが、夜露も充分にしのげるし、日中も涼しいものだ。

ハーンドンの『アマゾン探検記』に「インディアン達は小屋のまわりに月光の下で彼らの数だけの墓石のようにきらめく狭い蚊帳の中で眠った」（泉靖一訳、河出書房）という記述があるが、多分これと同じものだろう。

四角い布の中に閉じ籠もり、羊膜に包まれたようにちぢまっているとすぐウトウトしてくる。甲虫の飛ぶ音、鳥のさえずり、魚の跳ねる水音……それらが日中らしく間遠くのどかに聞こえるだけである。しかし、私はこの白い小さな空間にドラードを釣った満足感を持ち込みすぎたようだ。強烈な引き込み、輝く水しぶきがカヤの中で私を包んでいる。＜一日……二日＞とサンパウロ市を出発してからここに辿りつくまでの日数を胸の中で指折り数えてみた……。

サンパウロ市のルス駅を早朝に発つ汽車に乗り、牧場、コーヒー園、綿畑などの風景の中を一日走り続け、日が暮れて州境近いドラセーナ市に着いた。ここで中川さんの家に泊った。

翌朝、ワゴンに乗りパラナ河を越えてマットグロッソ州に入った。サンパウロ州ほど拓けていない。真っ直ぐなハイウェイがゆるやかな起伏の中を坦々と延びて

いる。カンポグランデ市を過ぎ、午後遅く小野田さんの牧場に寄ってお茶をごちそうになり、再び夕暮れの中を走りアキダウアナでドライブインに泊った。

あの辺はサバンナ地帯がどこまでも続いている。乾期だから野火の煙があちこちで上がっていたが、日が暮れると赤い炎が架空の町の灯のように一斉に輝き始めた。

一面の炎が猛々しく燃え盛っている所もあれば、燠になった木の幹だけが赤く身をくねらせている所もある。狐火（きつねび）のように点々と赤い灯が並んでいるのは、半ば焼け落ちた雑木林の幹の先だけがまだ燃えているのだった。奇怪な夜景に旅の疲れも忘れて瞳をこらしたのだった。

レヴィ＝ストロースもパンタナルへ行くためにこの辺を通ったが、サバンナ地帯（セラード）の風景を次のように書きとめている。

「パラナ河を渡ると、そこからがマット・グロッソ地方だ。パラナ河は河幅が広いので、すでに雨期に入っていたにもかかわらず、まだ所々に河床が現われていた。そのあたりから、奥地旅行の数年の間にわたしとは切っても切れなくなった、なつかしいが、また堪えがたい風景が拡がり始める。パラナ河からアマゾン流域までの間の風景はいかにも中央ブラジルらしい特徴を表わしているからだ。起伏のない丘陵やゆるい波状の丘陵、そして遥かな地平線まで、汽車が通るとちりぢりに散っ

てゆく瘤牛のいる茨の原野がつづく。多くの旅行者がマット・グロッソを〈大森林〉と訳しているのは誤解である。森という名詞は女性名詞でマッタになる。それとは逆に、男性名詞のマットは南米的風景になくてはならない一面をよく表わしている。マット・グロッソとは正確に言えば〈茨の広い荒野〉なのだ。これほど、この野性的で寂しい地方にふさわしい名はまたとない。しかしその単調さの中にも、どこか壮大な、人を夢中にさせる何かがある。

……中略……

ときおり、丘陵がきれて、木や草の生えた谷間に代った。そこだけが軽やかな空の下で、救われた気がする景色だった。カンポ・グランデとアキダウアナの間にはそれよりも深い断層があって、マラカジュー山脈の燃え上がるような断層をのぞかせていた。その峡谷のコリエンテスには、ダイヤモンド採集家の中心地〈ガリンポ〉がかくまわれている。そこから風景はすっかり変る。アキダウワナを過ぎるとすぐにパンタナル――。パラグアイ河中流域一帯に拡がる世界一の湿原帯――に入る」（レヴィ＝ストロース『悲しき南回帰線』室淳介訳講談社文庫）

この風景の面影は今でもほぼ残っていて、ひねこびた灌木のサバンナが続いている。地味が悪いので開拓者たちの群はここを素通りしてしまったのだ。

しかし、こんもりと茂っているのが女性名詞で茨が男性名詞だというのは、半分は彼の冗談だろう。文法的にはその通りでマットはヤブや草原を指すが、普通ブラジル人はさほど区別はせずに、我々が「ヤマ」と呼ぶように、森でもヤブでも手つかずの所をマットと呼ぶからだ。ちょっと言いがかりをつけて、その説明をしながら荒涼としたセラード地帯の感じを的確に表現した技巧的な文章だと思う。でも、これはいかにもヨーロッパ人的な冗談だ。この辺の土着の女たちは決して大森林風に堂々と茂ってなどいず、サバンナ風のせいぜいウズラがやっと身を隠せるほどの小藪を持っているにすぎないのだから。

「しかし、その単調さの中にも、どこか壮大な、人を夢中にさせる何かがある」という一行は、人と風景をごちゃまぜにして小野田牧場の印象にそのまま当てはまる。私たちが寄ったときは木を伐った直後で、見渡すかぎり倒木が散乱している中に小屋がポツンと建つ光景は、開拓の若々しい息吹きというよりは、何か見るものを呆然とさせる投げやりで殺伐な重苦しさがあった。日本から携行した資金もどんどん減り、彼自身も牧場が果して成功するか失敗するか見当がつかないでいた。開拓という第一歩から踏みだすには自分は年をとりすぎているとも言った。しかし、そういう苦境の中でも背筋をのはして前を見詰めている印象が好ましかった。

農機具のことで中川さんが相談に乗っただけの寄り道だったから、私たちは十五分くらいで暇乞いをした。
走れるだけ走って走行距離を稼いで、その夜は街道沿いのガソリンポストにあるドライブインに泊った。
給油器の向うに長屋が一棟あって、「アキダウワナ・パレスホテル」と、こちらの顔が赤くなるような看板が掲げてある。入ってみると、ベッドがあるだけで、宗教的な感じさえする粗末な小屋だった。
夜明けに、あばずれ女らしい挑発的なしわがれた笑い声がして、目が覚めてしまった。外へ出てみると、軒先のオウムだった。どんな女か？　という好奇心につられて早起きしたので、鼻白んで、
「うるさい！」
と怒鳴ったら、
籠のオウムはこちらを見て、
「ヒューッ」
と口笛の真似をした。
腰に手を当てた女が半身にこちらを見てるような口笛だった。堅気の家のオウムはもう少し品が良いものだが……。
コーヒーを飲んですぐ出発したので、午前九時頃にパンタナルの下辺りに入った。アキダウワナの先のミランダ町からコルンバ市へ通じる道が、いまのところパンタナル唯一の道らしい道なのだ。ブラジル国花のイペーの自然林が十キロほど続く。今が花盛りだった。

遠目には黄色い桜のように見える。チューブから直接塗ったような濃い黄色だ。

道は湿地帯の中に盛り土をして真っ直ぐに延びている。処々に太い土管を埋めてあるが、増水期の水量はその程度の排水量では支えられないらしく、あちこちで崩れた道を修理していた。やっと数日前に復旧工事が一応済んで車が通り始めたという。あと三ヵ月もして十一月の末になればまた水没するのだから、この道を通れる期間は一年のうちでもごく短期間にすぎない。交通量も少なく、二時間に一台くらい対向車とすれちがう程度である。道の両側にはワニがずらっと並んで甲羅干しをしている。路肩はワニにとって居心地の良い場所らしい。各種の水鳥も群棲していて、ピンクや白の翼がゆるやかに飛び交う様が目を慰めてくれる。トカーノ(巨嘴鳥)が二羽、我々の車と平行して数キロものあいだもつれながら飛んでいた。体と同じくらい長いピンクの嘴を持った鳥である。

夜中までにコルンバ市に着こうとガタガタ道を飛ばしていると、日が暮れてポルトエスペランサの渡しにあと数キロという所で、ガタンというショックと共に車体がかたむいて停ってしまった。

後輪のボルトがゆるんでタイヤが飛んでしまったのだ。タイヤは転がって沼の中に落ちている。明るくならなければ修理不能ということで、そのまま夜営することにした。夜営といっても一筋の道が沼に囲まれてい

るだけだから、道の上に寝るしかないのだった。
車の中に二人寝られるが、窓を閉めると蒸し風呂のようで五分とはいられない。窓を開けると蚊の猛襲だ。
皆は仕方なく道の上にテントを張り始めたが、私は路肩のすそにどうやら身を横たえられるだけの場所を探して蚊帳（かや）をはった。この道を通る事はトラックだけだ。夜はほとんど通らないが、トラックが通るギリギリの所にテントを張って寝るのでは安眠できない気がした。
轢（ひ）かれても文句は言えないし、第一、寝ている所をトラックに轢かれたら文句を言える状態でいられるか、どうか……？
沼は真っ暗である。その上を何万匹というホタルが飛び交っている。一匹、一匹はゆっくり舞っているのに、何万という群になると全体が狂ったように動いて見える。それが沼に映るから、目まぐるしさは倍増される。頭部で発光する、コメツキ虫のような大きなホタルである。十匹ほど布につつんで棒に結べば、充分に足許を照らすことができる光量を持つ。
両側に支柱を立てて蚊帳をはり、ビニールを地に敷いて私は中に潜り込んだ。
じっと横になって眠ろうとすると、想像できないほどの多種多様な物音が身近に湧き起こって眠りを妨げた。なにか小動物が必死に逃げているような、せわしない物音……、耳をすませても追う音は聞こえない。する

と、追うのは夜活動する毒ヘビだろうか？
グハハ、グハハという正体不明のうめき声。驚いて目を開けたが、蚊帳の白い布がボンヤリと夜風にゆれ、その向うにホタルの青い光がにじんでいるだけだ。思いなおして目をつぶると、耳許で女の溜息のようなものが聞こえる。いいかげん不気味になっていたところに、いきなり、人が飛び込んだほどの水音が近くでしたので飛び上がってしまった。
ワニだ！
この辺にいるのはジャカレ・チンガというおとなしい種類なのだが、おとなしいといっても昼間こちらが近づけば向うがノソノソ水中へ逃げるというだけの話で、あくまで野生の動物だから寝ている私の足くらいくわえても不思議はない。三メートルくらいの奴にくわえられたらとても勝ち目はない。アマゾンで同じ種類のワニを竹竿でつついたことがあるが、ワニは怒ってフーッと息を吹いて威嚇した。ネコが怒ったときにするのと同じ音だが、ワニの方がずっと迫力があって、不意をつかれた私は驚いて竹竿を落としそうになったほどだ。
ワニかトラックか……、どちらが安全か……、二者択一をせまられた私は仕方なくトラックを選んだ。
深夜の運転手がちゃんと目をさましているかどうか疑わしい。それに、ライトが故障していても交通巡査が

絶無の地方だから無燈火でも平気で走る。河合さんがポルトベーリョからクヤバ行きのワゴンに乗ったとき、ライトが切れたので修理をするに必要だろうと思って懐中電燈を貸したら、運転手は「有難う」と言ってそれを車の前部にくくり付けて走りだしたそうだ。そういう地方なのだ。

しかし、この際、あれこれ言っていられない。オウムのおかげで早起きしてしまったので、立っていると体が揺れてくるほどの睡魔におそわれている。

乾燥した土ぼこりが五センチも積った路上に蚊帳を張って、潜り込んだらそのまま前後不覚になった。……ただ、夜中に二度ほどトラックが通ったのを覚えている。路上にへんなものがあるので徐行していたらしいが、身体にかぶさるようなエンジン音が聞こえ、車輪の響きで身体が揺れた。

朝おきると、みんな土ぼこりで、花から出て来た蜜蜂のように黄色くなっていた。あれは今まで体験した最低の夜営だった。

そうやって、パラグアイ河を渡りボリビヤ国境のコルンバ市に着き、友人の戸見沢さんを訪ね舟の手配を頼み、食糧を買い込み、河を降り午後遅くこのキャンプ地点に着いたのだった。丸四日かかった。そして、五日目の朝、念願のドラードと対画したのだった。私は旅の一つ一つを想いだしながら、ツタンカーメン王のように黄金の輝きに包まれ満足して眠った。

なぜ？と鳴く魚

二時間くらい眠ったらしい。熟睡のあとの目覚めは素早くやって来て、手品師のようにヒョイと眠りを隠してしまう。

外へ出ると、申し合わせたように皆も起き始めていた。それぞれが違う職業を持っているのに、野外生活が幾日か続くと同じリズムで行動するようになる。水浴びをしてから河の水で紅茶を淹れて飲んだ。まだ暑いので四時半出漁ということにする。

木の下で念入りに仕掛けを点検して太陽が傾くのを待った。剛力の魚が相手だから、仕掛けの消耗が激しい。ナイロン糸とルアーの間につけるワイヤーリーダーがキンクを起こして、縮れが直らないものはすてる。ナイロン糸のキズも点検して、キズがあればそこから切りすてる。ルアーの鈎は特に酷い。折れたのは勿論だが、延びかけているのも取り換える。

小魚の形を模したルアーをプラグと呼ぶのだが、バルサ材でできたラパラ社のプラグを犬魚の群に投げたら、ヤクザ一家に独りで殴り込みをかけたチンピラさながらに、すごく可愛がられてガタガタになって戻ってきた。ほとんど原型をとどめず、木が喰いちぎられてオモリが露出している。一発でこうなるのではたまら

ないので、プラグは使わないことにした。
……ようやく光線が斜めになって、私たちは腰をあげた。午前中と同じように私はエジソンと組んだ。河を少し降り、細い水路に入った。三十メートルほども薄暗い樹のトンネルを進むと、行手が展けて沼が明るく静まっていた。水辺に寝そべっていた数頭のカピバラが、ゆっくりとヤブの中へ姿を消した。齧歯目（けつしもく）としては地上最大である。後姿は茶色いブタのようだが、前から眺めると顔をあげて鼻をヒクヒクさせる様子などはやはりウサギ、リスなどにそっくりだ。
カピバラについてはチャールズ・ダーウィンが『ビーグル号航海記』の中で詳述しているので引用しよう。

「齧歯類では世界最大のヒドロケールス・カピバラ（みずぶた）はこの地方に普通のものである。モンテビデオで私が射ったものは、体重が九八ポンドあった。体長は吻（くちさき）の尖端から切株めいた尾まで、三フィート二インチあり、腹囲は三フィート八インチあった。この獣は塩水のラプラタ河口の島々にも往々いるが、淡水の湖や川の岸には更に多く棲んでいる。マルドナドの近くでは、一般に三―四頭で群棲している。昼間は水中植物の間にひそんでいたり、または草原の草を公然と食べている（＊）。ある距離から見た歩き方と体の色とは、ぶたに似ている。しかし、尻で座って、片方の眼でじっと眺めるところは、同類の『てんじくね

ずみ』や『うさぎ』の様子をあらわしていた。頭を正面から、あるいは横から見たところは、顎が深いためにまったくこっけいな様子である。マルドナドでは、この動物は非常に人間に馴れている。しのび足で四頭の老獣に、三ヤード以内に近づいたこともある。このものおじしないことは、ジャガーが幾年か前から附近にいなくなったことと、ゴウチョが狩の獲物として価値を認めないことによって説明されると思う。（中略）この獣を多数殺すのは雑作ないが、皮は大した役に立たず、肉もよいものではない。パラナ河の島々には特に多く棲んでジャガーの常食となっている」

＊原註、カピバラの胃や十二指腸の中には、解剖によると、淡黄色の液が多量にあったが、繊維はほとんど一本もなかった。オーウェン氏はこの動物の食道の一部は、鳥の羽根より大きなものは通さぬような構造になっているのを教えてくれた。おそらく幅の広い歯と、強い顎とによって、食べた水草をよくすりつぶすのに適応しているにちがいない。（島地威雄訳岩波文庫）

ダーウィンも誌（しる）しているように、カピバラは皮も肉も大して役立たない。他の動物――例えばシカやアメリカヒョウ――に比べてカピバラがパンタナルにたくさん生き残っているのもその為である。水辺を好む動物なので釣人には馴染深い。その表情をダー

ウィンは「顎が深いために全くこっけいな様子である」と表現しているが、まったくひょうきんで愛らしい。動作もウサギやリスに共通したイソイソした感じがある。モーターボートで通るとカピバラは驚いて水中に潜ったり茂みに駆け込んだりするが、カヌーでひっそりと近づくとさほど逃げないものである。そういうときは、自分がいかにも自然にとけ込んだようで軽い自己満足を覚えるほどだ。

初心者の狩猟家で、ただ生き物に弾丸を命中させたいためにカピバラやワニを射つ者がいる。そんな現場を見ると怒りを感じるとともに、自然と人間のバランスが変化した現在では狩猟というスポーツはもはや成立しないはずだがと思えるのだ。

カピバラの肉はまったく食用にならないわけではなく、土着の人はときどき食うが、殺したらその場で内臓を出してしまわないと肉全体が臭くなって食えない。引用したダーウィンの註の処に「カピバラの胃や十二指腸の中には、解剖によると、淡黄色の液が多量にあった」とあるが、多分、その淡黄色の液に悪臭が含まれているのだろう。

カピバラの不幸は、水ぶたという訳名でも分かるように、後姿がブタそっくりなことであろう。ブタを食い馴れている人間の目には、カピバラの後姿はいかにも旨そうに映じる。肉の味を知らなければズドンと射って焼いて食いたいという誘惑を強く感じる。私も原住

民の家でその肉の一片を口に入れるまでは、カピバラの丸焼きを食べたいと思い続けていたのだった。
しかし、一度食べてその不味さに呆れてからは、二度と食いたいと思わない。いつまでも水辺の良いお友だちでいたいと思う。ずっと昔、そういう女友だちがいたのだった。

沼の水は躍っていた。止水を好む魚たちが群れている。すぐそばを世界的な規模の大河がとうとうと流れているのに、何を好んでこんな狭い沼にひしめき合っているのか？　世をすねた偏屈者、アウトサイダーたちの集まりかとおかしくなる。
ホテイアオイやヒシモの陰にはトライーラがいる。底にはナマズが目を光らせているだろう。中層を遊泳しているのは、体が偏平で強い流れを好まぬ赤ピラニヤ、アパイアリなどの魚だ。浅場には胎生メダカのグッピー、小型の熱帯魚たち。それに、ブラジルの肉食魚の主食になるランバリも群れている。ランバリは形がタナゴに似た小魚だが、河口から源流まで、沼にも滝にも、都会のドブ川にすら遍在する魚で、だからこそ「お天道さまと米のメシ」がついてまわるようにブラジルの肉食魚もどこにでも棲めるのである。ランバリは人間が食べても旨い。唐揚げが良い。特に、産卵期前に中流を遡るランバリと、冬期に源流で苔を主食にしているランバリが絶品だ。前者は品の良い脂がのっている

し、後者は苔のかおりを馥郁（ふくいく）と放つ。ただし、茶色い苔についているランバリは泥くさく、緑色の苔についているものでなければならない。源流でも、淵やトロ場の石には茶色い苔が発生し、瀬やヒラキの石には鮮やかな緑色の苔が付着する。キラッキラッと腹を返しながら苔をはんでいる魚影に毛鈎を流してやるとツンと小気味よく当りがある。

……沼にボートを漂わせながら、私は五目釣りを楽しんだ。振りだし竿のウキ釣りとリール竿のぶっ込み釣りの両方を試みたが、間断なく当りがあるので両方同時には使えない。黄色いウキは水面に着くとゼンマイ仕掛けの兵隊サンのようにピョンピョン動きまわる。竿を立てるとなかなかの手応えで魚が抵抗する。その魚を釣り上げて再びウキを投じると、今度は小舟のように走り始めた。子供のころ夜店で買ってもらった、カーバイドの小片を付けて水に浮かべるとぐるぐる廻るセルロイドの小舟のようである。釣り上げてみると尾の赤い小魚が、口一杯に餌を頬張ってカーバイドの役割りをさせられていた。

ウキ釣りもぶっ込み釣りも獲物は二十センチどまりの小魚である。釣りの楽しみは魚の大小とは無関係、とばかりに釣りまくっていたが、そのうちに物足りなくなってきた。この辺が対象魚を定めない五目釣りの限界でもあるようだ。何でもきた魚を釣る気安さがある

かわりに、刺激が薄らぐともっと強い刺激が欲しくなる。

私はもっと大きな魚を釣ろうと、大きな餌をつけて同じ処に投げ続けた。すぐ小魚が餌をとってしまう。しかし、より大きな魚がだんだん誘われて近づいているはずだ。

やがて、思った通り、重い引き込みがあった。かなり奮闘してリールを巻き、やっと上がってきたのは七十センチほどのグロテスクなナマズである。ひどく恐ろしい怪奇的なお化けネズミのような顔をして、肌は青黒い。身体はチョウザメに酷似し、カン切りの爪のようなものが側線に沿ってズラッと並んでいる。手を触れるとその爪が急激に閉じられる。指先でも挟まれたら怪我をするにちがいない。背鰭と胸鰭の第一棘は匕首（あいくち）のように直立している。

先端は鋭く、途中は逆さ針がおどろおどろしく密生している。口に歯こそないが、粗いヤスリのようなものが上下についている。

とにかく、釣り上げたが手でつかむところがないやっかいな、そして醜悪なナマズだった。

ナマズは舟底で、お腹を押しまくられているママ人形みたいに、騒々しく鳴いた。そいつは、はっきりした発音で、「パラ・ケ！？（なぜ）　パラ・ケ！？（なぜ）」と喋るように鳴いたのだった。

私は一瞬耳を疑ったが、ナマズは間違えようのない

ハッキリした発音で、私を睨みながら、「なぜ！　なぜ！」とわめき続けた。
「なぜ？と訊かれても、困るんだよ……」
私が言うと、エジソンは大笑いした。
釣りあげた魚に人間の言葉で、なぜ？と問われてまともに返事のできる釣師がいるだろうか？＜遊びですよ＞などというのもかえって照れくさい気がする。
結局、私はムニャムニャ不得要領の言いわけをしながら、ペンチで鈎を外し、ナマズを水に戻した。歯や棘の鋭い魚を水に戻すときは、刺激しないようにそっと持ち上げ、水面近くでパッと両手を引くようにしている。そろそろと手を離したりすると、逃げられると気づいた魚が暴れたり噛みついたりして怪我をすることがある。
……ナマズの青黒い魚体が水中に消えると、「パラ・ケ！？」という声も消えた。
このナマズはクジューバという。アマゾン河ではコヨコヨとかレベッカと呼ぶ地方もある。私は随分とこの魚を釣ったことがある。そのたびに彼等は騒々しく意味不明瞭なワメキ声をだすのだが、こんなハッキリした発音をした奴は初めてだった。ママ人形が「ママ」と言うくらいの明確さと可憐さで、しかしどこか機械的な感じで「パラ・ケ（なぜ）」と繰り返し続けたのだった。

ミミズの値打ち

またクジューバが釣れて「なぜ？　なぜ！」とワメかれるとてこずるので、ブッ込みの竿はあげてウキ釣りの竿を再びだした。

魚の切身をつけて釣りながら、エジソンに、

「パンタナルで一番いい餌はなんだろう」

と私は訊ねた。

釣りをやる者には常識だが、同じ魚種でもその土地土地で餌がちがうものだ。特効薬のようにバツグンに効く餌もある。

彼の返事は、

「ミミズ（ミニョッカ）さ」

だった。

「ミミズ？」

オウム返しに言ったが、あまりに平凡でつまらない返事で、私は不服だった。淡水の釣りにミミズを使うのは世界共通だが、ハヤにチョロ虫、コイにイモのようにミミズに勝る餌がそれぞれ存在し、それを使うところに面白さがあるのだ。

私がそう言うと、エジソンは、

「いや、やはりミミズさ」

と笑った。

「パンタナルは湿地だろう。雨期になると三メートルほ

ど増水し、ほとんどの場所が冠水する」
「……？」
「ミミズはそういう処には棲んでいないんだよ。此処の魚にとっては凄い貴重品さ」
私は思わず唸った。
「ミミズをみたらどんな魚も気違いのように飛びつくのさ。ピンタードも、パクーも、いや、ドラードでさえ一発だ」
「なるほど……」
私は感心して何度も頷いた。
「じゃ、今度来るときはたくさんミミズを持って来よう」
「それが案外むずかしい」
彼は首を振った。
暑い道中を幾日も車に揺られてくるので、保存が面倒なのだそうだ。たしかにそうだが少しくらい持ってくれは良かったと悔んだ。驚異的に効く餌を試みるのも釣りの楽しみの一つなのだから。
それにしても、ミミズがパンタナルの万能なる「機械仕掛けの神」だとは気づかなかった。
絶対数が少なければ相対的な価値が上がって貴重品になるのは、まあ当然の事で魚の気持ちは良く分かる。サンパウロ市に住んでいる私などにはカツオブシがすごい貴重品だ、という事もある。だから、ダイコンオロシのような安い物の味を引き立てるために、カツオブ

シをパラパラ振りかけるセンスが今ではもう理解できない。
　梅干なども同じように高価なものだ。先日も本を読んでいたら「梅干婆！」という表現があって、老人を敬っているのかと一瞬錯覚したが、＜いや、これは悪態をつく言葉だった＞と想い直したのだった。外国住いの者にとって、ウメボシはキャビア並みの輝きを持つイメージを与える単語である。さらに、サンパウロの輸入品店で売っているのは安物ばかりだから、良い梅干は伝手（つて）を求めて日本から持って来てもらわなければならない。そういう苦労をしている者が「梅干婆」という単語をみると、婆さまに後光が射しているような感じで伏し拝みたくなる。
　パンタナルの魚たちにとっても、ミミズがやはりそうなのだろうと納得したのだった。
（後日、ミミズを試みたがアッという間にエサをとられて、よほどＴＰＯを選ばなければ単なる魚へのサーヴィスという感じだった）

　……沼の上に黄色い光線が澱みはじめた。
　そろそろ帰る時間だと思って何気なく頭をめぐらせた私は、背後に不思議なものを見て目を見張った。
　沼の岸の低い灌木の上に、灰色の巨大な軍艦が浮かんでいたのだ。それは奇怪な幻のようだった。
「軍艦……！」

絶句したきり、私は呆然とした。
艦はゆっくり動いていた。
すぐに事態はのみ込めた。艦は本流を遡上しているのだ。それが私たちの低い視点からは森の中を進んでいるように見える。コルンバ市のやや下流にラダリオという軍港があってフリゲート艦が碇泊していた。平和な、忘れられたような軍港だが、たまに軍艦が動いても不思議はない。海なら小さな艦だろうが森の中で眺めるとそれは巨大に見えた。デッキに人影も見えず、灰色の船は遠ざかり森の中に没していった。
大陸の真中のこんな山奥に軍港があるのは珍しいが、パラグアイ河はブラジルとボリビヤ及びパラグアイの国境線を形成して国境守備隊が駐屯しているのだった。隣国のボリビヤはかつて領土を失い、現在海岸線を持たないから海軍は河にしか存在しない。
海のないボリビヤの海軍省は盛んに小話の種にされる。例えば……某独裁国の要人がボリビヤへ行って「貴国は海がないのに海軍省があるのですか」と嘲笑したら、「おたくのお国でも、法がないのに司法省があるではありませんか」と返事をされた、という話。
ラダリオのブラジル海軍の主な仕事は、密輸や密漁に睨みを利かせることだろう。エジソンが言うには、機関銃を向けた砲艦に乗りつけられて密漁現場を押さえられると、どんな図太い漁師でもちぢみ上がるそうだ。
マットグロッソ州は貧しく人口稀薄な州だが、自然

保護の規制が厳しく、好感がもてる。
例えば、アマチュアは州外には一人二十キロ以上の魚を持ちだせない。もっとも、監視員が釣人のライセンスを調べる、というようなキメの細かい行政は無理だが、アマチュアが何トンもの魚を乱獲して港で捕まったなどという話をときどき耳にする。

蚊の大群に囲まれる

そろそろ蚊が出てきた。
竿をあげて水路をくぐると、パラグアイ河は赤く染って、夕なぎの小波一つない河面（かわも）をドラードがあちこちでもじっていた。背中の半分ほどをヌラリと現わす、大胆なモジリだった。
スロットルに力を籠めかけたエジソンに、
「一匹だけ釣らせてくれ」
と言い、微速前進で遡行してもらった。
流れに逆らってジリジリと移動するほどの速さである。岸の草を一本一本数えられる、絶妙のスピードだった。ジョンソン社のシルバーミノー二十一グラムを付けて舟尾から流す。
穂先が水の抵抗をうけて曲がり、クックックッとルアーの泳ぎを伝えている。

十メートルも進まないうちに、いきなり竿がグーッと曲がった。思い切り合わせる。魚がのびのびと跳ねた。うこんが悲痛な赤に染って重々しくきらめく。

エンジンを停めたボートは流れ、河辺の草に吸い寄せられた。魚形をした夕日の赤が再び跳躍した。夥しい飛沫（しぶき）が夕暮れの河面に散り、一つ一つが蚊と化して私たちを包んだ。

一回、二回、魚が躍るたびに蚊の群は等比級数の正確さで増大した。

あわただしく、やや強引なランデングをして、魚を自由にすると、エジソンが待ちかねたようにエンジンを前進に切り換えた。本当は今が絶好の『夕まずめ』なのだ。あちこちの水面でドラードの巨体が見え隠れしている。魚を驚かさないようにボートを流しながら、モジリを狙ってキャスティングすれば理想的な釣りができる。しかし、今のうちに体を洗い夕食を済ませないと、蚊で身動きがとれなくなることも昨夜身にしみた。

弓の航跡を描いてボートをキャンプ場に着けると、中川さんが、

「少し遅いぞ」

と言った。

全員、夕食を頬張っている。焚火の廻りに立ったまま落着きなく体を動かして食事している様は、川から夕焼けを背景に見上げるとあたかも狂人の群のようである。私たちも大急ぎで水をあび、食事を始めた。

パチパチと火が燃える音……しかし、それより大きくウワーンという音響が立ちこめている。蚊の大群がキャンプをおおい尽しているのだった。皆の体に、ズボンといわずシャツといわず、ビッシリと蚊がとまっている。やや細めの精悍な感じの胴を高々と立てて、一本の針のようになる特徴のあるとまり方は、言われなくてもそれがマラリヤを感染させるアノフレス蚊だと分かる。

ただし、この辺のアノフレス蚊は現在はマラリヤ原虫のプラズモジオを持っていないそうだ。そう言われても、あまり気持ちの良いものではない。かつてマラリヤで苦しんだ河合さんなどは顔をしかめている。

あまりのかゆさに煙の中に立つとさすがに顔面や首筋の蚊は逃げてゆくが、背中や足許は相変らず攻撃をうけている。煙で涙を流しながら退くと、涙の上からさすのだ。厚手のズボンやシャツの上からも刺すので、絶えず身体を動かし、左右の手で露出部を叩いていないと我慢できない。

「酷（ひど）い！」

と誰かが叫び、

「アハハ」

と私は笑った直後、たくさんの蚊を吸い込んでむせた。

こうなるとメシの味もなにもあったものではない。夢中でかきこんで、

「明日、洗う」
と皿を投げすてて、メインテントへ逃げ込んだ。
テントの中に入るとホッとした。少し蚊がまざれ込んでいるが大したことはない。
「いやー酷かったなあ」
などと言いながら、ランプの赤い光の中でウイスキーがまわされる。キャンプの夜の楽しい語らい、昼間の武勇伝に花が咲く……と思って飲み始めたのだが、また予想が狂った。
密閉したテントの中はさながら蒸し風呂のように暑いのだ。みんな上半身裸になったが、額にも腕にも胸にも玉のような汗が噴きだして流れる。パンタナルは海抜が低いので酷暑の日々が多く、土地の人は慣れているが、それでも室内温度が四十度を越すとさすがに「今日は暑い」と言うそうである。
夜のことだから、テントの中はまさか四十度はないが、風が通らないから体温とほぼ等しい暑さであることは間違いない。
サウナ風呂で酒を飲むようなもので、三十分もたたないうちに心臓の鼓動が切迫し、目が廻ってきた。他の人も同じようにグロッキーになった。私はほうほうの態でテントを這いだし、自分の蚊帳（かや）にころがり込んだ。
肩で息をしながら、ロウソクに火を点し、まざれ込んだ蚊を叩き潰し、ほっとして横になった。この風変りな

蚊帳ともテントともつかぬ白木綿の囲いは、少し風を通すので涼しい。
キャンプの夜の団欒（だんらん）もメチャクチャである。
グァーンという音響が白木綿の囲いを包んでいる。不規則なブソブソいう音は布にぶつかって怒りくるっている第一線の蚊の群のものだ。
「ひどい蚊だなあ……」
私は呆れはてて、となりの蚊帳の戸見沢さんに声をかけた。
「いまは乾期だから少ないですよ」
パンタナルの住人は呑気（のんき）な返事をした。彼はコルンバに住んでいるのだ。
「本当に多いときはね、夕方など蚊で人の姿が見えなくなりますよ。蚊柱のようになってね、人の形をした蚊が歩いているようです」
さっき、外で息をしたら蚊が喉に入ったくらいだから、雨期の後はすごいだろう。戸見沢さんの話は本当にちがいない。
「すると、蚊の群がオッパイの形に突き出ていたら、ああ女が歩いているな、と分かる」
冗談を言うと、彼の笑い声が聞こえ、
「まあそんなもんです。一番蚊の多い時期には監理人一人残してコルンバへ全員避難する牧場もあります。……何しろ、ニワトリがトサカから血を吸われて、夜中

に貧血のために止り木からバタッと落ちるのです」
と言った。
「バタッと……。ひどいなあ」
私は二の句がつげない。
パンタナルの野生動物はワニにしろ水鳥にしろ、あまり蚊に刺されない構造になっているが、家畜たちは可哀想だ。蚊のためにウマが夜中に飛び廻るという。
「日本から野鳥の声を録音しに来た人がいて、ボクが案内したんですが」
と彼は続けた。
「蚊の音に驚いて、一生懸命録音してましたよ」
「入りましたか？」
「ええ、よく入ってました」
テープレコーダーに入るほどの音響にとり囲まれているのだ。
向うのメインテントから声がする。
「オシッコに行きたいが、この蚊では怖くて出られないね」
「そのウイスキーの空ビンにおやりなさいよ」
(翌日、このウイスキー？をジョンが飲みそうになって大騒ぎになった)
この先どうなるかと思ったが、三日目からは蚊の群とかち合わぬ生活のパターンが確立した。午後五時頃には全員が夕食も後片付けも済まし、蚊が出る頃は悠々とテントに潜り込むようになったのだった。

一度、ナマズの大物を狙って夜釣りにでたが、かゆくて釣りどころではなかった。

伝承の午後

午後の日ざしが弱まるまでの一刻が、木陰で語らいをする時間になった。

私たちは二人の漁師や戸見沢さんにパンタナルの話を聞いた。

漁師たちの言い伝えや体験談……。怪異の話が第一にでてくる。

すでに書いたように、漁師たちは夜網に掛かった巨大なスクリー（大水蛇）の胴を、乏しいカンテラの火を頼りにズクズタに切りさいてカヌーに積み込み、岸に埋める作業を独りでやるくらい剛胆なのだが、そんな彼等でも恐れる怪異がパンタナルに棲んでいるらしい。

一つは、ミニョコン（大ミミズ）と呼ばれる怪物である。そいつはカヌーの胴ほどの太さを持ち、全体に黒ビロードのような色と艶がある。背中をうねらせて水面を泳ぐ不気味さは、見た者の大半が腰を抜かすという。

〝水の黒人〟と呼ばれる一種の水中人間もいるらしい。何か悪意を持つ存在であるようだが、どんな様子をして何をするのか誰も知らない。そこが妖怪の妖怪たるゆえんで、だからこそ一層怖いのだという。そう言われ

るとなるほどと頷（うなず）くが、頷いたあとで再び首を傾げたくなる。

そういう伝説的な怪物だけでなく、実在の野獣もパンタナルにいる。それはオンサ（アメリカ豹）である。

オンサは南アメリカで唯一の猛獣らしい猛獣である。動物園でみると、インドの虎よりも凄味がある。体も大きい。奸知に長（た）けていて、自分の居処をさとられないために遠近を鳴き分けるといわれる。

火など少しも恐れず、焚火のそばを悠々と通って行くそうだ。呆然として失禁する場合がよくある。石鹸で体を洗っていると「オンサに逢ったか」と漁師仲間で冗談を言うのはそのためだそうだ。

私は野生のオンサに二度逢ったことがあるが、自分では気づかなかった。二度とも山道を歩いていて、後から来た土地の男に注意されたのだった。森の中で真正面からバッタリ会うようなことはなくて、私のような都会の人間が何も知らずに汗を流して歩いて行くのを、茂みの中からオンサが見守っているらしい。相手は野生動物だから、それが当然だろう。

最初の山道はサンパウロ州の海岸山脈の中だったのだが、オンサだけでなく、猛毒で知られるジャラクス蛇の横も知らずに通ったらしい。しかも、二メートル以上ある奴だったそうだ。何しろ、森に埋まりかけた細径をバックパッカーの大荷物を負い、磯竿を持って歩いて

いたので、汗はタラタラ目はクラクラで足許しか見なかった。
ジャラクス蛇の毒は血液を破壊するので、噛まれると皮下出血斑が現われ、身体中の穴から出血して死んでしまう。毒蛇研究所の医師の話では、噛まれると激痛が伴うので二メートルくらいのに攻撃されるとショック死する場合が多いそうだ。
そんな蛇の横を知らぬが仏で平気で通ったのだが、枯葉模様をしているので視線の一隅に入ったくらいでは気づきにくい。もっとも、他の多くの毒蛇と同じように、ジャラクスも夜活動して昼は不活発なので、こちらから刺激しないかぎり狂暴性は発揮しないそうだ。

コルンバ市に住む漁師たちの主な漁場は、約四百キロ遡上した（直線で百キロ）広い湖沼地帯である。中でもグアイウバ湖は二十五キロの幅があるから、アンデスおろしの冷たい南風が吹くと大荒れになることがある。
吹き溜りになる北西側の岸は浅いそうだ。水深一メートル半くらいの所に突風で生じた高波が押し寄せると、波と波の間は底が露出する。舟はガタンと地底につき、そこに高波がかぶさってくる。
ジョンの舟も数年前に転覆して十四歳だった息子を死なせている。木陰で、彼はその話を我々にした。目を宙にすえて、唄うように一種の抑揚をつけてよどみな

く語る。他の地方で聴いた伝承文学の「語り」と同一の調子だった。戦いや予言者たちのことだけでなく、息子の遭難という個人的なこともそういうスタイルで父から子へ語りつがれるのだと私は実際に知った。

ジョンの話の要点。

「強い風が吹きだしたが、その日にかぎって大漁だった。皆は網を放置したまま避難したが、自分の舟のエンジンは強力だったので逃げる間があると思って、息子と二人で急いで網をあげた。いよいよエンジンをかけようとしたが、揺れがひどくどうしても点火しない。そのうちに舟が転覆し、自分は水中に投げだされた。暗くなり、風も波も激しいのでたちまち舟の行方も分からなくなった。私は九死に一生を得て、岸に泳ぎつくことができた。そして、一昼夜、寒さにふるえながら森をさ迷った。そして、ようやく自分を探している仲間たちと会った。彼等は朝になって岸の水草の中に吹きよせられていた私の舟を見つけたのだが、息子は舟底にうつ伏せになって死んでいた。私は死んだ息子を毛布にくるみ仲間の舟でコルンバに戻った」

私たちははじめ、この地方の物語りを彼が話しだしたのかと思ったのだった。それほど彼の口調は自分に無関係な物語りのようだった。

話が終って、斎藤さんが、

「それはあんたの息子か？」
と念を押した。
「ええ、私の息子です」
ジョンは唄うように答えた。
「悲しい話だな」
やり切れないように斎藤さんが首を振った。手に持ったウイスキーのコップのやり場がない表情だった。
「ええ、悲しい話です」
彼は同じ口調で言った。
それからガラッと口調が変って、いつもの喋り方になって雑談を始めた。一座の呪縛(じゅばく)がとけた。人々はほっとしたように、再びくつろいだ姿勢になった。言葉のトーンの不思議さ……金縛りにあったような午後の一刻だった。

コルンバにて

五日目にテントをたたみ、コルンバの町へ戻った。ドラード釣りに専念したので充分に堪能した。腕も多少はあがったようだ。エジソンに多くのことを教えてもらった。無口な男だが、ポツリと言うことに無駄がなかった。
コルンバ市は人口五万、マットグロッソ州第三の都会だ。パンタナル牧場群の中心地として栄えている。川

を遡上して戻ってくると、急に崖があり、その上に町並が広がっている。ヤシの並木が美しい町だ。
船着場に連絡船がついている。平らな舟で甲板に牛を積み、上部に乗客が乗るような構造になっているのが珍しい。
船着場の沖には二十隻ほどのカヌーが並んでパクーを釣っている。職漁師たちのカヌーだ。手釣りで、たえず糸を上下させて魚を誘っている。まき餌が利いている場所らしく、時々、黒い魚体が揚がるのが望見できた。
私は戸見沢さんに町を案内してもらった。

船着場の下流にプライヤ　ベルメーリャという所がある。赤い砂浜という意味だ。そこはコルンバの恥部だ、と戸見沢さんが言う。漁師相手の女が住んでいる所だそうだ。連れて行ってもらうと、二十軒ほどの粗末な小屋があった。
「ここは女のケンカが多い」
立ち停って、彼は言う。
「ケンカが始まると、男たちはみんな見物ですよ。なにしろ太股やオッパイ丸出しになるんだから……。刃物を持ちだしたりすると、仕方なくとめるわけです」
「ぜひ、それを見たい。ここで待ちましょう」
私は熱心に言った。
「そう都合よくあるわけはない。待っていてもダメで

す」
　と戸見沢さんは冷たい。
「あんただけいつも目の保養をするのはケシカランですよ」
「ボクはここに住んでますからねえ」
　地元の利を誇るように、彼は微笑した。
　戸見沢さんは友人と雑貨店を経営しているが、五十歳で独身である。奥さんにはとっくに死に別れ、子供たちはサンパウロで成人しているが、パンタナルが好きなので独りでコルンバに住んでいる。金のない女たちがツケで品物を持っていってもうるさく言わないので、この辺の女たちに人気がある。
「レストランに皆が集まる約束の時間まで、あと一時間ありますね。小さなこの町のあらかたはもう見てしまったので、ここに坐って戸見沢さんの話をもっと聞かせてください」
　私はそう言って、集落が見下せる坂道の舗道に腰をおろした。
　戸見沢さんはそれが癖で、石畳の間に生えている雑草をむしりながら話し始めた。
「漁師たちの漁場までは二日くらいの船旅です。一船が二〜五トン獲るまでは帰らないから、連絡の舟がいて必要な品を補給する。ふつう、米五キロ、サトウ五キロ、油二リットル、小麦粉一キロ、縫糸など、そのくらいの単位で補給を頼む。タバコとマッチとコーヒーは頼ま

れなくても連絡舟に積んであるんです」
　サトウの消費が多いと思った。コーヒーをうんと甘くして飲むのだが、暑いところなので糖分を要求するのだろう。アマゾンなどの漁師は米をほとんど食わないが、ここではかなり消費する。米を主食にするのはブラジル人には割に新しい習慣で、日本移民の影響が大きい。
「獲る魚は主にピンタードです。体表の黒い模様が流れているのは六、七キロになる。丸い斑点のは五十キロ以上に成長する。親船一隻に十人の漁師が乗り、十隻のカヌーを曳いて行くのが普通です。漁場では一人一人がカヌーで仕事をする。徹底的に個人プレーだから、連中は誇り高いですよ。重労働だが金も入る。陸へ上がるとパッと使って、禁漁期には一文なしでみじめなものですよ。網を売ったり、細君が売春したり」
　漁師気質（かたぎ）は海も河も似ているらしい。
「どんな網を使うのですか？」
「一枚の長さ六十メートル、高さ二メートルです。目は二十センチ」
「二十センチ？」
　私はちょっと驚いた。淡水用としては想像できないほど目が粗い。普通の湖だったら二十センチの網に掛かる魚はいないだろう。大鯉が通り抜ける目の粗さだ。
「それを仕掛けて、端に棒を立てて空カンを吊しておく。魚が掛かるとカンが鳴るから、すぐ魚を外しに行

く。ピラニヤと競争だから、ぐずぐずしていられないのです」
「でも、彼等は主に夜仕事をするのでしょう」
「ええ、でもね、夜ピラニヤは活動しないと言われているけど、まったく活動を停止するわけではないんです。一晩に四つや五つはピラニヤに大穴を開けられる。昼はだから網の修理が大変です。棒に吊すカンは焚火で焼いておいた方が良い音がして、遠くまで響きます」
　そのことは私も知っていた。置鈎にするとき、岸の枝に糸を結び、焼いた空カンをつけておくのである。中に小石を吊して鈴のようにしても良いが、それより空カンを二個吊しておく方が簡単である。
　戸見沢さんは眼下のパラグアイ河の流れのようにゆっくり話す。たちまち四十分がすぎた。河は広々と流れている。三十年ほど前まではブエノスアイレスからの船便が主な交通手段だった。一八五四年のパラグアイとの戦争では、ここが主戦場の一つになった。
　コルンバはパラグアイ軍に占領され、はるか上流のクヤバからジョン・アントニオ将軍に率いられた義勇軍が河を下って奪回作戦に成功したのだ。その日がコルンバの祭日になっている。
　……夕暮れが近づいた。町には蚊がいないので助かる。女のケンカはついに見られなかった。小屋の前で赤いスカートの女が楽しそうに他の女とお喋りしている。小屋の屋根からは白い炊煙が立ち昇り、横に崩れてバ

ナナの木にまといついている。平和だった。
「こんど私の家にゆっくり泊りなさい。そうすれば一度くらいハデなのが見られます」
と戸見沢さんは親切に言ってくれた。

レストランは魚料理専門店だった。
皆が集まった。魚が新しいのでどれも旨い。大河の魚は泥くささがまったくなく、運動量が多いので身がしまっている。ピンタードもパクーもほど良く脂がのっている。
一般に、パンタナルの魚に脂がのるのは驚異的で、それほど栄養のある食生活を彼等はしているらしい。不便な所の住人は春に遡上するランバリをすくって、石油カンで焚いて一年分の灯油をとるといわれる。タナゴほどの小魚から灯油がとれるのである。この辺の古い教会や民家の壁も、魚の脂と砂利をつき固めて築いたものだ。
キャンプの後半は氷がなくなり、生ぬるい河水ばかり飲んでいたので、冷たいビールが実に旨い。パクーの唐揚げを片手につかんでむしゃぶりつきながらビールを飲んだ。
酔いが廻る。みんな賑やかになって、漁師も教授も肩を叩いて大騒ぎのパーティになった。このお別れの夕食が、第一回目のパンタナルの旅の最後の想い出となった。

第四章　たった一人の河

人を引き込む魚

パンタナルの周辺にある三つの町のうちの一つはコッシンである。東側の山すそにあり、町の横をタクアリ河が流れている。コッシンからは河が山に向かい急流になるので、産卵期前の魚の溜り場として名高い。

コッシンは小さな町である。

山本熊夫さんはこの町に住む数少ない日本人の一人だが、釣りが好きでここに住みついてしまったのだ。鉄工場を経営して資産を残し、今は初老の夫婦二人で河辺に静かに暮らしている。数年前、遊びに来た甥が溺死してから釣りを絶った。それまでは猛烈な釣りをして暮らした人だ。道路が良くなって釣客が訪れるようになる前の、コッシンの黄金時代を充分に楽しんだ人だ。今でこそ魚も小さくなったが、以前は人を引きずり込む大魚がこの辺にたくさんいたそうだ。

どのくらいの大きさの魚なら人を引き込むかハッキリしたデータなどは無いが、一例をあげると、サンパウロ州チエテ河で二十八キロのナマズが体重七十キロの釣人を引き込んだ事件があった。釣れないのでみち糸を足に巻いて寝ていたそうだが、目撃者によるとあっという間にズルズルと岸を曳かれ激流に落ちたという。大騒ぎになり、死体をあげ、足に結んだ糸の先のナマズ（ピンタード）をあげたそうだ。

山本さんは三回、魚に引き込まれた経験がある。土地の釣法はボートからの手釣りだが、太いナイロン糸は狭い舟の中ではからみやすい。ナイフを持っていても、エサ切りなどに使って手のとどかないところにうっかり置いたりする。

「よく今まで生きていますね」

私は化物をみるように山本さんを眺めた。短く刈った頭髪はほとんど白いが、ガッシリした体格で長身の

人だ。
「初めてのときは驚いたな。もうダメだと思った」
と山本さんは言った。
「でもね、魚に引き込まれてこちらの体が水の中に潜ってしまうと、魚はさほど強く引かないものです。それで、水中で体にからんだナイロン糸をほどくことができました。一回目のときは舟を転覆させてしまったが、二回目からはこれはいかんと思うとこちらから飛び込んだ」
「フーン。さぞ大きい魚でしょうねえ」
「まあ、三十キロほどだった」
「引きで分かりましたか？」
「いや、ちゃんと釣り上げて量りましたよ」
「え……？」
「糸をほどいたら、その糸を持ってボートに戻って、また釣るわけです。せっかく掛かった魚を逃がすのはもったいないですから」
「ウーン」
呆れた人だ。こういう人の鈎に掛かった魚は不運というしかない。
まだ彼が釣りをやめない間に一度一緒に河に出たが、職漁風の、荒っぽいが的確な釣りだった。アマチュア釣師など来ない時代に職漁師に混じって腕を磨いた人だから当然だろう。

流し釣り

コッシンで山本さんが推薦するマヌエルという漁師について、私はドラードの伝統的な釣法の「ロダーダ」を習った。活餌をつけた延竿をかまえ荒瀬に舟を流す豪快な釣りである。

かつてポルトガル人やスペイン人たちが黄金を求めて南米の奥地に迷い込んだように、ドラードの黄金色の輝きに魅せられた私は一年に何回かパンタナルにドラードを求めて旅をするようになっていた。そして、ドラードのすべての釣法を一応は試みてみょうと思い決めていたのだった。

マヌエルは五十歳くらいの、色の浅黒い痩せ型の男だった。山本さんが「コッシン第一の漁師」と推奨するだけあって、身のこなしにも目配りにもキビキビした感じがある。

私は、「よろしく」と一礼して釣道具を持ってボートに乗ったが、彼は愛想笑いもせずにすぐボートを出した。

まず活餌用のピヤバを獲らなければならない。マヌエルは小さな流れ込みにボートを入れ、エサトリ用の小投網を打ったが、入るのはクリンバタという鯉に似た魚ばかりである。これは大きすぎる。

私がグラスの振り出し竿をだして、

「釣ろう」
と言うと、彼は、
「ピヤバは口が小さくてすばしこいから、そう簡単に釣れない」
と注意した。
それを聞き流して素早く仕掛けをつくり、立て続けに四匹釣ると、マヌエルは目を丸くして呆気にとられたようだった。大都会の周辺ですれっからしの魚を相手にしている釣人には朝飯前の釣技だが、パンタナルの漁師には私が名人に見えたらしい。
「よし、おれは本気になってあんたにロダーダを教えてやろう」
彼は白い歯をだして笑うと、打ちとけた様子でそう言った。
エンジンをふかし、急瀬を遡る。ボートはゆれ、跳ね上がり、体を低くして舷側をつかんでいないとはね飛ばされそうだ。滝のような流れを、石をよけてジグザグに進む。しぶきをあびてシャツもズボンもずぶ濡れだ。
幾つかの急瀬を遡ると、マヌエルは竹の延竿を私に渡した。ズシリと重い一本竿だ。五メートルの長さで、穂先がうんと詰めてあり物干竿のような感じだ。竿一杯の長さに太いピアノ線がついていて、マスタッドの大鈎が結んである。
教えられるままに、二十五センチほどの大きさのピヤバを背掛けにして下流へ向けて竿をだす。トモのマ

ヌエルは櫂をあやつって舟を流れよりやや遅く流れるように保っている。ピヤバはみち糸一杯の下手を泳いでいる。

だんだんに理解できたが、この釣りは釣り手と漕ぎ手の連帯プレーである。どのポイントにエサを誘導するか二人の呼吸が合っていないと釣りにならない。

ドラードは急瀬を好む魚だが、流れの真中に泳いでいるわけではなく、石の陰や巻き返しにひそんでいる。瀬を遡ってヘトヘトになったピヤバに襲いかかるキャッチ・ポイントは決まっている。

水面下五十センチを保つように泳がせているピヤバの誘導は、アユの友釣りと同じように竿を立てたりねかせたりする操作で行うが、なにしろ急瀬をもまれて矢のように下っているから、一瞬のうちにポイントから外れてしまう。

「あそこだ！」

「……」

「次は右手の石の横だ！」

「……」

マヌエルの短い指示が次々に飛んでくるが、揺れる不安定なボートの上で磯竿はどの剛竿の先に三十センチ近くの活餌がついた仕掛けが、初めからそう自由に扱えやしない。持っているだけで精一杯の感じだった。

「魚が浮いてる！　もっと沈ませて」

「……」

「沈ませすぎると石に掛かるぞ！　もっとのびのび泳がせろ」
三つ目の急瀬を下り、舟の動揺がおさまったとき、強烈な当りがあった。太い竿先がいきなり曲がり、ゴツゴツと震動が手に響く。
私は振りむいた。
エサが大きいから早合わせは禁物、と言われていたからだった。
「まだ」
彼は竿先を見ながら首を振った。
グングンと竿が曲がる。初めからワイヤーが延びているから送り込む余裕などまったくない。
「よし！」
声が掛かったので、私は大合わせに合わせた。
ピアノ線と硬い竿を伝わって、魚の暴れるのがじかに体に響く。コンクリートに穴をあける機械を持っているような感じだった。
ダッと魚が跳躍する。ボートの底にへばりついて竿を握っている私よりずっと高く魚が跳ぶ。まさに一対一の力くらべだ。
ようやく取り込んだときは全身汗みどろになって、肩で息をしていた。
マヌエルは微笑してうなずいてくれた。
翌日……私は竿を出さずに、マヌエルの案内で一日

中、河を上下した。
「ロダーダ」は予想にたがわず豪快で興味深い釣法だが、もっと繊細な用具に馴れてしまった自分の体のどこかで反撥するのだ。絶対に切れないみち糸というのは、感覚的に受け入れがたい。とにかく、急瀬で根がかりしても優に舟を引き止めることができるのだ。
それにもかかわらず、ロダーダの魅力は最高だ。ジェットコースターのように急瀬をくだる爽快さ！ポイントが次々に目の前に現われ、後へ飛び去って行く。実に目まぐるしく千変万化するのだ。
竿を出さずに教えを受けながら河を下っているだけで、昨日の三匹の手応えが甦えるのだった。
「奴は腹に脂がたまりやすいんだ。激流を泳いで脂をおとさないと卵巣が発達しない。ピヤバが大好物の餌さ。ピヤバは岸辺を泳いでいるが、急瀬だけは真中しか通る所がない。その瀬頭まで遡ったら、すぐ斜めに横切って岸辺へ行こうとする。ヘトヘトさ。ドラードはあの巻き返しにひそんでいて、ここでピヤバに襲いかかる。あの巻き返しには大型なら一匹、中型なら二匹のドラードがいるよ」
マヌエルの教示をうけて、私は後々も徹底的にピヤバの習性を研究するようになり、ドラードをルアーで釣る技術をかなり会得できた。
マス釣りの経験者なら、魚が棲家でエサを狙っているオブザベーション・ポイントと、流れにでてそれを捕

捉するキャッチ・ポイントが存在することは常識であるが、動きの少ないフライやニンフとちがって敏速なピヤバが餌の場合は、理論は同じだが応用面ではずいぶんとちがうものである。

……時々、舟を停めてもらってピヤウ・アスーを釣った。振りだしのグラス竿で、二キロクラスの魚が入れ喰いになる。コッシン周辺はみんなが狙うドラードとピンタードこそ場荒れして少なくなったが、他の魚ならいくらでも釣れるのだった。

生簀に入れて楽しみ、生簀が一杯になると逃がしていたが、不注意で三匹が腹を返してしまった。その魚を持ち帰り、岸で空カンにミミズを持っていた少年に、

「そのミミズと魚と取り換えてくれ」

と冗談半分に言ったら、

「いやだ」

と断わられた。

ミミズなら売れるが魚は売れない、と言うのである。仕方なく、魚をやったが、彼は有難くもなさそうに、

「ありがとう」

と言った。

原始的な釣りを試みる

翌日、私は一人でタクシーに乗ってさらに上流へ向

かった。
タックル・ボックスを見て、運転手が、
「ダイヤを探す機械か？」
と訊ねた。
「釣り道具だ」
と答えると、彼は呆れたようだった。
この辺でいくらでも釣れるのに、わざわざ高いタクシー代を払って遠出する気がしれない、といいたげだった。これから行く所はダイヤの産地で、車で乗りつけるのは山師くらいのものだ。

正に運転手のいぶかる通りなのだが、私はドラードの数多い釣法のうちで、最も原始的でスリルにあふれた釣法をどうしても試みるつもりなのだ。
ドラードはラプラタの河口近くから、これから行く源流近い所までに分布している魚だから、その釣法も数多い。
色々な釣法を訪ね歩き、実際に見た。
大滝の下に立ち、飛沫をあびながら、鈎にさしたカエルを流す釣りもみた。生きたネズミをつけて、対岸に当っている流れの中心へ投げる釣人もみた。リールを使わず、糸の先のネズミを頭上でクルクル廻してポーンと投げる。第一回目の投擲（とうてき）で可哀想なネズミはすでに目を廻し、投げては手（た）ぐっているうちにほとんど皮だけになってしまう。それを糸で鈎に

しっかり結び、ビシャビシャ、ポーンと投げる。
これなどは最も汚らしくて、最悪の釣法だ。好奇心旺盛のつもりだが、さすがに試みる気になれなかった。頭上で振りまわすときネズミの飛沫が掛からないように離れて見学した。
見ている間には釣れなかったが、たとえ釣れたとしても、ネズミの皮を口一杯に頬張っている魚ではどうも？　という気がする。
話に聞いただけで、まだ実際に見たことがないのは「テレーナ」という釣法だ。
これは職漁師の釣りだが、釣り手と漕ぎ手の二人でカヌーに乗り、急流にイカリで停める。エサに特色があって、フェロンという小ナマズを使う。日本のギギに似た魚で、グッグッと盛んに鳴く。この鳴き声でドラードをおびき寄せるのだ。
漁師は鈎の背で小ナマズの腹をこすって、鳴きが良いかどうか調べる。鳴きの悪いのは使えない。死なないようにチョン掛けにしてオモリをつけて底を流す。小ナマズは水底でグッグッと鳴いている。その声を聞きつけて、ドラードが飛んでくるという。
漁師は時々、糸に耳を当てて水底でちゃんと鳴いているかどうか確かめる。鳴きやんでいると小突いて鳴かせるようにする。
私も音と魚との関係についてはかなり関心を払っているつもりだが、活餌そのものに集魚音の役を積極的

にさせる釣りは珍しい。糸に耳を当てて鳴き具合を聞いている釣りなど、ほかに聞いたことがない。

このテレーナもいつか試みたいが、その朝、一種悲壮な覚悟で上流へ向かった釣りはまったく違うのだった。

名がないので、仮に「泳ぎ釣り」とでもしておこう。竿を抱えて自分が流れを降りながらドラードを釣るのである。

これは日本人移民の釣り好きが発明した釣法らしい。二、三人の体験者に逢ったがすべて日系人だったし、ブラジル人に訊ねると、

「さあ？」

と首をかしげて、知らないと答える。

リールが無かった時代、まだ舟を手に入れる余裕のない移民たちが、黄金に輝いて跳ねるドラードを何とか釣りたい一心で編みだした体当り的な釣法だと思える。一種の気の短さも日本人的な発想だ。土着のブラジル人は釣る手段のない魚を無理に釣ろうとは決してしないものだから。

一九五〇年発行の『パウリスタ年鑑』（パウリスタ新聞社）に釣りの記事があるが、そこに泳ぎ釣りが紹介されているので、引用しょう。

「サン・ジョゼ河＝日系殖民地の裏を流れるサン・ジョゼ河は河幅せいぜい四、五十メートルの小川であるが、本流のパラナ河が近いのと森が深い関係で仲々に良い

漁場である。
岩盤におおあれた川底の故か、清冽な流れに膝まで入ってピラカンジューバの小物の瀬釣りは奥山の鮎や鱒の釣りを偲ばせる。深みではパクーの大物、夜であればナマズの大物も多い。
褌（ふんどし）一つで太竿を小脇に、槍をしごく身構えで立泳ぎのまま流れを下って行くとガブッとドラードがくる。そのままよく喰わせて、みち糸の針金と竿が一直線になった瞬間を見計らってエイッと気合諸共（もろとも）、竿を手許に引く。ドラードこそは精悍そのものの姿。金鱗を耀かせつつ水上高く飛跳すること数度なるはまさに古式の通り。しかも上述の技によって完全にハリに掛かったのだから金輪際（こんりんざい）外れっこない。どんなに引き廻されても竿にしがみついたまま、水を潜ぐって下流の足のつく浅瀬までたどりついたら、こ奴を引き上げるという猛烈な釣法をこの河で案出、これを実際に試みて百％との成果を確かめたのは、その昔和船に乗組んで土佐沖で鯨獲りをやっていたという宇賀老人なる勇ましい仁である」
知らない人が読むと張扇流の眉唾（まゆつば）物かと思いそうだが、この記事の寄稿者はコルンバへも同行した釣友の河合さんである。
彼は邦人初のブラジル大学出の土木技師として活躍していたが、第二次大戦中は奥さんの実家があったサンジョゼ河のほとりに逼塞（ひっそく）していた。その

ころ、実見した釣法であるという。
日本人が入植した土地でこんな釣法ができる条件を備えた河は少ないから、さほど各地で行われた痕跡はない。三十数年経った今では、そんな釣法を記憶している人にはめったに逢わない。そんな釣りがあったことすら忘れられた幻の釣りと言える。
それにしても、「河幅せいぜい四、五十メートルの小川」という表現には恐れ入る。河合さんの尺度もすっかり大陸的になったようだ。私にはかなりの河に思えるのだが……。

タクシーは赤い土埃をまき上げて、対向車のない田舎道を走る。
私は遥かなるラプラタ河の最末端の一支流、ジャウル河の近くで車をおりた。帰りはトラックでも拾うつもりだった。
五百メートルほど、かつて牧場だったらしい荒地の中を進むと、清冽な流れのほとりにでた。昨年、中川さんがダイヤの原石を買いに来たとき同行して、ここで釣ったことがある。
サンジョゼ河より一まわり小さい。この河なら泳ぎ釣りをしても安全と、かねてから目安をつけておいたのだ。
あまり狭い川では泳ぎ釣りをする意味がないし、かといって大河に飛び込んで魚に引き廻されたら不測の

事故をまねきかねない。この河の水量は私には理想的に思えた。

前に来たとき良く釣れた急瀬の下の河原に私は荷物を置いた。

まず活餌用のピヤバ釣りの仕掛けをつくる。

暑い……。炎天下にうずくまって仕掛け作りをすると、たちまち汗だくになった。

瀬頭の上の澱みで、生トウモロコシをエサにしてピヤバを二匹釣った。それをプラスチック・バケツに入れ、河原へ戻り、いよいよドラード用の仕掛けを作る。コッシンの雑貨店で買った頑丈な竹竿に十八号（〇・七ミリ）のナイロン糸を結び、先はワイヤーリーダーにして鈎をつけた。

シャツとズボンを脱ぎ、水泳パンツ姿になった。それから体操をした。

四辺に誰もいないからいいが、ずいぶん変な釣りだと体操をしながら自分で思う。頭と胸をぬらしてから、淵に入って少し泳いだ。

この急瀬の落ち込みは幅が五十メートルほどに広がった淵になっている。魚は濃い。釣る人が皆無だからだろう。以前ルアーを投げたときは手頃な河相だと気に入ったが、いざ自分で河に入って釣るとなると急に淵が広く深く感じられた。

ヤメようか？　とチラと逡巡が胸を横切る。しかし、せっかくここまで用意したのだ、と決行の決意を固め

る。下手（しもて）に太陽を眩しく反射してザラ瀬が流れている。そこは太腿までの深さだという事も、去年確かめてある。

ピヤバを背掛けにし、水中へ泳がせ、私は竿尻を持って大きく呼吸をして淵の中央目指して泳ぎだした。足だけ使って平泳ぎで進んだ。斜めに流されながら中央近く進んだとき、いきなり竿が生き物のように掌から飛びだしそうになった。ドキッとした。が、夢中で一呼吸の間合いを辛うじて計り、短刀で自分の胸を突くように両手に力を籠めて竿尻を引き戻した。

ガツン！と強烈に合った。が、次の瞬間、反射的に腕が伸ばされ身体が一直線になった。

水の抵抗を与えるために、私は胎児のように体を丸めた。しばらくそのままの姿勢で引かれていた。

予想通り、凄い引きだった。

鈎をきらった魚が跳ねた。見上げると、三キロ半くらいの大きさだ。さほど大きくないので余裕がでた。しかし、そのくらいの魚でも水中では五分と五分の感じだった。ただ、さすがに私の体を流れに逆らって曳くほどの力はない。夢中で竿を押さえているうちに、私たちはザラ瀬へ流された。

立ち上がったら、もうこちらの自由だった。私は竿をかついで岸へ進む。魚は暴れながらついてくる。

岸に引き上げ、急瀬の横へ戻り、魚をストリンガーに

通した。坐って、煙草に火をつける。
澄んだ水が目の前を流れている。
これを釣りと言うべきか、闘いと呼ぶべきか知らない。だが、かつて経験したことのないほどの凄い充実感があった。魚は岩の間で、ゆっくりと泳いでいる。さっき、水の中でこの魚の呼吸音を聞いたような錯覚すら、私は感じていた。
一種の放心状態で魚を眺めていた私の視覚の端で影が動いたような気がした。顔を挙げて上流を眺めると、河岸に上半身裸体の褐色の男が立ち停って、不審そうにこちらを見ていた。
その姿に見覚えがある。
手を振ると、いぶかしそうだった男は私を想いだしたらしく手を振って応えた。
私は立ち上がり、荷物の中から彼へのお土産に買ってきた牛肉とビスケットの袋をだした。魚をストリンガーから外した。口腔に少し傷をつけたが、この辺はピラニヤが棲息しないから心配はない。私一人の昼食用には大きすぎるし、煙草を吸いながらこの魚に感情移入をしすぎてしまった。

ダイヤ掘りの親方

「私を覚えているか？」

近づいて、そう言うと、彼は頷いて懐しそうに笑った。
彼はダイヤ掘りの人夫の親方だった。去年、中川さんは結婚二十五周年の記念に奥さんに贈るダイヤを探してここへ来たのだった。この河筋一帯はダイヤの産地だった。
気に入った原石を求め、それを自分の好みに磨かせるという、彼一流の凝りようだが、サンパウロ市で旅にでたくてウズウズしていた私たちはその旅に悪乗りして一緒にやって来たのだ。
釣りの相棒の河合さんの他に二人の風景画家が一緒だった。
昼間は中川さんがダイヤ探し、半田さんと増田さんは写生。河合さんと私は釣りに専念。
夜はキャンプ・ファイヤーを囲みながら全員で酒を飲む。そういう結構な旅だった。蚊もいなかった。
ここにキャンプしたとき、私は親方の厚情をうけた。素朴な人柄が胸に残っていた。
「生の牛肉だから、痛まないうちに食べてください」
と言って紙包みを出すと、
「ありがとう」
言葉少なに礼を言って彼は紙包みを受けとった。
「昼めしを一緒にやらんかね」
「どうもありがとう。弁当を持って来たので」
「食べたらいいが」

「カフェ（コーヒー）を一杯貰いたい」
彼は頷いて、先に立って歩きだした。
河が狭くなった処にカヌーがもやってある。対岸の高みに去年と同じように小屋が建っていた。風景画家が見たら描きたくてたまらなくなるような、背後の林と釣合った茅葺（かやぶ）きの、住居としてより風景として値打ちのある小屋だった。
カヌーに乗って渡るうちに、見覚えのある少年が小屋から顔をだした。親方は長男の少年と共にこの小屋に寝泊りして、時々コッシンの家族のところへ帰る生活をしている。
土に凹みをつけた段々を登って小屋に入ると、去年と同じように中は煤（すす）けていた。かまどには太い丸太が突っ込んであって、一日中くすぶっている。かまどには干肉が入ったフエジョン豆が煮えている。食事はそれを皿に盛ってマンジョカ（マニオク）芋の粉をかけて食べるだけの簡単なものだ。魚も塩スープにしたり、焼いたりして食べる。かまどの上には金網が渡してあるから、余分な肉や魚をそこへ置いておけば自然に燻製になるのだった。
かまどの厚い土の上にはコーヒーポットが置いてあった。親方は温かいコーヒーをコップにたっぷりついでくれた。
黒ザトウをとかしたお湯をコーヒー粉にそそいで淹れるやり方だから、ほろ苦さはけし飛んでドロッと甘

い。都会では飲めた代物ではないが、こんな所で飲むと案外旨（うま）い。かおりよりも、まず糖分を肉体が必要としているのだろう。

コーヒーを飲み終って、私は礼を言い、少年の頭をごしごし小突いてから外へ出た。少年が対岸まで送ってくれた。

岸を急瀬の所へ戻りながら、去年のことを思いだして独りで可笑しくなって笑った。思いだすたびに可笑しくなる小事件があったのだ。

カヌーが着く所に、去年、私たちはテントを張った。そこはダイヤを掘った跡で、ふるいで振るった小砂利が一面に敷きつめられていて快適な場所になっていた。この辺までくると夜も蚊がいずコルンバのような騒ぎはしなくて済んだ。

テントを設営しながら、私が夜釣りをすると言うと、画家の増田さんも、

「わしも久し振りに釣りをしてみようか。どうせ夜は絵をかけないし」

と言った。

やや離れた所でダイヤを掘っている親方の所へ、私たちは釣況を聞きに行った。増田さんは今は絵筆しか持たぬが、若い頃は淡水の小物釣りの名手だったそうだ。

「何を釣るんだね」

と親方は訊ねた。
「ピヤバ」
とすかさず増田さんが答えた。
ウグイに似た二十五～三十五センチの魚である。鈎がかりしてからのスピードがあり、糸がヒューヒュー鳴る爽快な釣りだが、口が小さく敏捷なのでマニア向きの対象魚だ。
「ピヤバなら沢山いるよ。この辺のピヤバはトモエで釣れる。仕事が終ったら投網でエサ用のピヤバをとってやろう」
と親方は親切に言ってくれた。
……夕食後、私たちは仕掛け作りを終え、竿を持って河岸に並んで腰をおろした。
対岸に懐中電燈の弱々しい光が点滅している。時々、バサッという水音が聞こえる。約束どおり、親方が投網でピヤバを獲っているのだ。
「釣りも久し振りだなあ」
増田さんが弾んだ声をだした。
「若い頃はよう釣ったもんよ。夢中でなあ」
「河合さんたちからも聞いてます。最近はやらないのですか？」
「写生にでるとき釣道具を持って歩いていたが、どっちつかずになってしまうので、やめたんだ」
この辺は標高も高く、蚊がいない。砂質土だからボウフラが発生する水溜りもないのだろう。冷気を伴った

夜風が肌に心地よかった。コトン、コトンとカヌーの胴に櫂が当って、やがてこちら岸の小砂利に乗り上げる音がした。
　親方の黒い影が近づき、
「プロント（はい）」
　とコーヒー袋を置き、
「アテ・アマニャン（また、明日）」
　と言って帰って行った。
「また、明日。どうも有難う」
　私は暗がりで濡れた麻袋に手をかけ、何気なく持とうとして目をむいた。すごく重いのだ。
「何だか変ですよ、増田さん。ちょっとライト」
　私が袋の口を開け、増田さんが中を照らすと、五十キロ入りの袋に半分ほども、三十センチを越す見事なピヤバが詰っていて、光を銀色に反照して身もだえしていた。
「ヒヤーッ！……これは、これは」
　増田さんが奇声をあげた。
「ウーン」
「……」
　二人とも見事なピヤバに圧倒されて唸っていたが、
「ちょっと、やり過ぎみたいだなあ」
　と私は言った。
「これから釣ろうと思う魚をこんなに持って来られたんじゃ、もう意欲が失われるな」

増田さんもガックリしたようだった。
涼みながらの釣りだから、釣れたところでせいぜい一人五匹か六匹……と思っていた。それなのにエサ用の同じ魚が約二十キログラムある。
「完全にもう、わしは釣る気なくしたよ。もう……」
増田さんが投げやりな口調で言った。
「僕も」
こちらも同じ気分だった。
「酒飲んで寝よう」
二人でせっかくのピヤバを河にあけて、テントに戻った。
ピヤバは夜になると流れのゆるい岸辺に寄ってくる。そこへ何回か投網を打てば荒されていないこの河なら造作なくとれるだろうが、それにしても釣ろうと思う魚をこうたくさん持って来られると、釣欲は見事にしぼんでしまうものだった。
「まったくやる気なくしたな、もう」
二人はボソボソ愚痴をこぼしながら、焚火をかき立てて酒をのんだ。ひさしぶりに釣りを楽しもうと思った増田さんは肩すかしを喰ったようなものだ。
他の三人は昼の疲れで早々と寝込んで、天下泰平なイビキが聞こえてくる。中川さんのイビキがやんで、ムニャムニャ言う声がした。大きなダイヤを買って奥さんに笑顔で迎えられている夢を見ているのだろう。
私たちの話声が途切れると四辺はシーンとして、虫

のすだく音ばかり……地上に多くの人間が住んでいるのが信じられないような、自然の中の夜だった。

急瀬のほとりに戻って、あのときのことがだんだん可笑しくなって、

「アハハハ」

と大声で笑った。

独りで旅をしていると人恋しくなって、友人がそばにいるような仕草（しぐさ）をすることがある。友人と話をしているように、私は独りで笑い転げた。

しばらくして笑いやみ、岸の岩に腰をおろして河を眺めた。プラスチック・バケツを水に潰けておいたので、もう一匹のピヤバはまだ生きがいい。もう一度泳ぎ釣りをしようかと思いながらボンヤリ淵を眺めた。小型のドラードが跳ねた。人が住まぬ土地を流れる河はのびのびした感じがする。

この近くには親方の小屋と、三人の手下の小屋があるだけだった。彼等は食うに必要な魚しか獲らない。素朴な人々だった。

ブラジルのダイヤ鉱床は、かつての鉱脈が散乱した漂砂鉱床というタイプで、歩どまりが悪い。大体の目安はあるが、ここを掘れば出るというほどハッキリしていないから大資本の投下はできない。数人の男たちが古い河床を掘ってふるいで土砂をふるってダイヤを探す。

学者の説明によると、含有率は一億分の一くらいだそうである。
ダイヤや砂金を探す男たちをガリンペイロという。彼等は荒くれ男だと都会の人々には思われていて、大粒のダイヤをめぐっての殺し合いなどがセンセーショナルな記事になって都会人の好奇心を満たしている。
しかし、ガリンペイロたちと接触してみると、彼等が一様に素朴でお人好しなのに驚かされる。気の荒いところなどは微塵（みじん）もない。たとえ数日でも彼等の生活を覗き見すれば、それが当然だと思える。一躍百万長者になれるようなダイヤを掘り当てるのは、富クジに当るようなものだ。普通は工業用にしか廻せない屑ダイヤしか出ない。たまに良いダイヤが出ても、仲間たちで配当を分配すれば結局のところ都会のサラリーマンよりずっと少ない収入にしかならないのだった。
炎天下でひどく単純な肉体労働をする。仕事が終っても数人の仲間以外には人っ子一人いない淋しい場所だ。夜になれば焚火の火が細く燃えているだけだ。そんな環境に、西部劇に出てくるような気の荒い男やズルい男が長い間、我慢できるはずがないのだった。
ここの親方はポンプとベルトコンベアを持っていて、三人の手下と共に仕事をしていた。
ホースで放水して崖をくずし、それをベルトコンベアに乗せて大きい石だけのぞき、最後は人力でふるいにかけてダイヤを探していた。

ズボンのポケットから皮袋をだし、最近とれた原石を十個はど見せてくれた。ガラスが融けたような粒だ。どれも小さくて、中川さんの気に入らなかった。
「磨いて二カラットになるくらいの石が欲しい」
と、そのとき、中川さんは言った。親方は、
「そんな大きい石は滅多に出ない」
と首を振ったが、コッシンの仲買人のところにあるはずだと教えてくれた。人の往来もない山奥にいながら、どこでどのくらいの石が出てどの仲買人が買った、というような仲間の情報に親方は詳しかった。

私たちはコッシンの仲買人の家へ行った。果して、彼はそのダイヤを持っていた。ダイヤに無縁な私でも、磨いて二カラットというのがかなり大きい石だと察しがつく。
ベランダで三十分以上、商取引の掛け引きがあった。中川さんが付けた値を仲買人はのめないと言い、
「他の小さいダイヤを二つ添えて、これこれの値ではどうか」
「いや、このダイヤだけでいい」
「これは右から左へ売れるのでねえ。そんな値ではとうてい話に乗れない」
二人とも初めはトンチンカンなことを言っている。そのうちに少しずつ歩み寄った。直接に値を言わず、紙片に書いて渡す。テーブルのこちら側で中川さんはそ

れを見て、数字を書き直して渡す。仲買人はむずかしい顔をする。
ようやく妥協したらしい。
中川さんが、
「OK」
と頷き、二人は立ち上がって握手をし、ボクサーがお互いの健闘をたたえるように肩を叩き合った。
中川さんは庭先の車へ行き、旅のあいだ中、荷台の換えタイヤのわきに転がしてあった汚い紙包みを持って来た。土埃を手で払ってビリッと紙を破くと手の切れるような高額紙幣の束が現われた。仲買人は平然と眺めていたが、私たちは、風景画家も釣人も、
「……!」
「……!」
全員、唖然（あぜん）とした。
だれ一人もそんなところに金があるとは気がつかなかった。
なるほど、これなら淋しい山径で強盗にあっても安全にちがいないと納得したが、実行はむずかしい。途中で停ってコーラを飲んでも、レストランに入っても、中川さんは紙包みに一瞥すら与えなかった。我々だと金包みを手許においておかないと心配でおちおち食事もできない。
「これは大いに学ぶべきです」
我々は言い合ったが、考えてみると風景画家も釣人

も大金を持って旅をする必要はなかったし、今後もなさそうだった。

〝河の王子〟を釣る

そんな一年前の出来事を思いだしながら、私は淵を眺めていた。

この淵のほとりに再び来た目的の一つは言うまでもなく泳ぎ釣りを体験したいためだったが、もう一つしたいことがあった。去年、この瀬の落ち込みでピラピタンガという魚の入れ喰いにあい、その釣興が忘れ難かったのだ。

泳ぎ釣りは一度で満足することにして、私はピヤバを放し、少し泳いだ。

岸へ戻り、持参のウルトラ・ライトロッドに小型両軸受けリールをセットした。赤いリールに青い六ポンドテストのナイロン糸を一杯に巻いてある。

ピラピタンガはドラードをそのまま小型にしたような魚だが、釣りの対象としてはずいぶんと趣を異にする。息づまるようなドラードとの対決とちがい、明るく軽快なゲームを展開する。跳躍力はドラードに劣らないが、軽々と一直線にポーンと飛ぶ。

かなり下流にまで棲息し、大河の方が大きく成長するが、こんな上流の澄んだ瀬に群れるピラピタンガの

釣りは、似た釣りとしては野生のニジマスだろう。ニジマスより引きがやや鋭角的でカクッカクッと段がついたような動きが伝わるが、あとはほとんど同じである。

活餌で勿論釣れるが、フライやルアーが面白い。だからブラジル人も、ピラピタンガのことを「トルッタ・ブラジレイラ（ブラジルの鱒）」と呼んだりする。大きさもニジマスとほぼ同じである。

ドラードを河のキングとすれば、ピラピタンガはジャックに当ると、私は思っている。

（女王はマトリンシャンというアマゾン河系の魚だが、この白銀色の魚については別の機会に述べよう）

私はメップスのスピナーをつけ、教科書通りに手近の瀬の白泡のきわから狙った。白泡の中へキャストし、こちらへ引きだし、沈めながら流し、手許へ巻きとる……その過程の中間で強い当りがあった。

潜水艦から発射されたミサイルのように黄金色の魚体がポーンと飛んだ。着水すると一呼吸もおかずグーンと走る。ここがスズキやドラードとちがう点で、去年は大型の道具しかなかったのでこのときにスピナーの鈎を延ばされてしまった。

今度はそんな心配はないが、一年振りだったので最初の一匹は鈎を外された。二匹目からは体全体がピラピタンガの動きに対応した。自分の体が、瀬や淵や魚に融けていくような、滅多に訪れない感覚に包まれていく。赤い小型リールはドラッグがないので、魚が強く引

くと親指でサミングするのだが、蚕のよう自分の指から自在に糸が出るようである。

手近の瀬を釣り終ったので、さらに向うの落ち込みに投げるためにスピナーからスプーンに換えた。私が偏愛する七グラムのスプーンである。

釣道具なら何でも好きだが、特に偏愛するものがある。例えば、グラスの振りだし竿なら二号の糸。周囲の風景を壊さずに、余情の一線をピタッと決める。魚が掛かってからの糸鳴りも、最も響きが良い。バイオリンのE線のように、心を締めつける音を立てる。

ルアーなら七グラムのスプーン。それもアブ社のものが特に美しい。七グラムのものにしかないカチッとした形態美をそなえている。

七グラムより大きいスプーンは同じ形態なのに膨張し水ましされた感があるし、小さいスプーンはチマチマしてしまう。アムレットやグリミーのように七グラムの製品しかないものもある。金属片を水中に投じた場合、七グラムという重量が最も水になじんだ動きが可能なのだろうか？　その大きさはペンダントなどの装身具にも似て、掌にのせて眺めているだけでうっとりとしてしまう。

私は黒い細い竿をしならせて、思う存分、ルアーを投げた。

もしかしたら、この急瀬と淵で釣った人間は私が初めてかもしれない、と思う。ずっと下流に村落があるが

ここまで釣りにくる必要はないし、ダイヤの親方は小屋の近くの木の枝に細引をしばりつけて、大きな鈎を河に投げ込んでおくだけだ。思いだすと、ピヤバを二匹くらい餌につける。ほとんどは餌とりの小魚につつかれてしまうが、一月（ひとつき）に一度や二度は大ナマズが掛かるそうだ。一匹の重量を仮に十五キロとすれば、そんなのが毎日釣れてもかえって始末に困るので、親方の一見投げやりな置き鈎のやり方は自然の調和にかなっている。

土着の住人は周囲の自然を、森や動物を荒すような事は決してしないものだ。「進歩」という名の両刃の剣が自然のバランスを破壊する。

陽が高いので、一通り探ると、さすがに当りは間遠くなった。石で囲った浅瀬の中に、二十匹ほどのピラピタンガが泳いでいる。

私は釣りをやめ、枯枝を集めて河原に火をおこした。浅瀬へ戻るとほとんどの魚は跳ねて逃亡していた。三十センチほどの二匹をとり、鱗をとり塩をして焼いた。ドラードほどの脂はないが、白身の美味な魚だ。パンをかじり、河の水をのみ、焼魚を食う。一生懸命に食った。

ふっと、こんな遠い所で俺は何をしているのだ、という想いが胸をかすめる。家から千三百キロほど離れた、小さな河のほとりにいる。排気ガスが充満した都会に

住んで、自然に憧れ、矢も盾もたまらなくなって独りで旅にでて心ゆくまで釣ったあと、いつも、終電車の赤ランプのように心を横切ってゆく想いだった。望みが叶ったあとの淋しさだった。

焼魚を食いながら、今度の旅も今日が最後だな、と思って私は河面（かわも）を眺めた。いつもこんなふうに釣りの独り旅は終るのだった。これからコッシンへ戻り、夕方の長距離バスに乗ろうと思った。

第五章　夕暮れの中のカヌー

クヤバにて

パンタナル周辺にあって、最も上流に位置する第三の町がクヤバ市である。ここはマットグロッソ州の首都である。（一九七九年からこの州は二分される）

ジェット機に乗るとサンパウロからブラジリヤ経由で四時間の旅だが、バスだと三十六時間かかる。ガタガタバスに乗りっぱなしなので、クヤバ市のバスターミナルに着くと体の関節がガクガクして、マリオネットのようにぎごちない動作で人々はバスから降りる。長い時間舟に乗っていた後にも似て、踏みしめる足に力が入らず、大地がフワフワして頼りない。

商人などでさらに奥地へ向かってバスを乗り継ぐ人もいて、

「もう二十四時間乗らないと、目的の町に着けない」

とさすがにうんざりした声をだす。

ここまでは舗装道路だったが、これからは土の悪路で、出発の用意をして接続客を待っているバスも、ペンキははげ落ち、廃車寸前のポンコツなのだ。

私の知人がこの辺のバスに乗り、足が疲れたので靴をぬいでいたら、片方の靴が床の穴から落ちてしまった。彼はカンカンになってバス会社の営業所へ文句を言いに行き、弁償しろと言ったら、相手は案外簡単に非を認めたが「なくなったのは片方だから、片方だけ弁償

する」と言ったそうである。まるで笑い話のようだが、実際の話である。

もっともセスナ機の便が多いので、立派な靴をはいているような人はたいがいセスナ機を利用する。タクシーと同じで、行く先を言えばすぐ飛んでくれる。どんな農場でも飛行場がある。ただし、立木がない草原というだけのことで、人が歩くと転んでしまう凸凹の飛行場だ。パイロットが行ったことのない場所でも大体の見当で出発するのも、地上のタクシーと似ているが、飛行機の上でパイロットが地上を見下しながら、

「さあて、道を間違えたかな。さっきの道を曲がるのだったかな」

などと言っているのを聞くのはあまり気持ちの良いものではない。めったにないが、ガソリン切れで不時着することも時としてある。

クヤバ市の北の方に、テーブル状の山脈が連なっている。そこがラプラタ河とアマゾン河の分水嶺だ。山頂の高原の向う側はアマゾンの大森林が広がっている。

現在のクヤバ市は高層ビルも多い近代都市だが、河沿いの盆地の底にある町だから蒸し暑いことでも有名だ。鄙(ひな)びた集落のときはしのぎやすかっただろうが、ビルが建ちアスファルトの舗装がされると街全体が巨大な溶鉱炉と化してしまう。昼下がりに外にでると、頭上にそそぐ太陽の直射と足許の照り返しで、街の光景がグアーンと音を発しているような錯覚すらお

ぼえる。この殺人的な暑さは、アマゾン河中流のマナオス市でもそうだが、ビルとアスファルトで街を埋め尽す温帯型の近代都市は熱帯にはきわめて不向きである。すべてのホテルとオフィスは一年中クーラーをつけっ放しにしている。

クヤバ市の家屋の値打ちは、どのくらい風が通るかということで決まる。ビルを建てようとすると住民パワーの反対が強いが、勿論日照権などではなく、風通しが悪くなるからだ。

白昼は窓の板戸をピタリと閉ざし、夜に窓を開放して家を冷やす。風通しが悪くなったら、ベッドの上で三転四転しても暑苦しくてとても寝られるものではない。アマゾン河口のベレン市などもそうだが、町の発展につれて風通しの問題は住民の深刻な問題になっている。

クヤバ市は十八世紀の中頃に、金探しの基地だった。陸路はないに等しく、ブエノス・アイレスからラプラタ河→パラグアイ河→クヤバ河と遡行する船便が主な交通路だった。

一九三八年に此処を通過したレヴィ＝ストロースは『悲しき南回帰線』の中で、当時のクヤバを描写している。

「クヤバには旅行者の目を惹くものはほとんどない。河に洗われている石段、そしてその上には古い造船所の跡らしいものが見える。そこから両側に田舎風の家の

立ち並んだ二キロの道が、亭々と聳えるポプラ並木の二本の小道の間に建つ白色とばら色の教会の広場までつづいている。左側には司教館、右側には州役所、大通りの一隅には肥っちょのレバノン人が経営する、その頃は唯一軒だった宿屋がある」（室淳介訳　講談社文庫）

たった四十年ほど前で、州都に宿屋が一軒だけだったというのだから、クヤバだけでなく、マットグロッソ州全体がいかに秘境だったかが分かるであろう。

この「河に洗われている石段」があった辺りには、現在立派な橋がかかり、魚料理の水上レストランが浮いている。

釣りが好きな人は料理を食べながら釣糸を垂れる。私も何度かルアーを投げたことがあるが、必ず何匹か釣れた。

レヴィ＝ストロースは次のようにも記している。

「クヤバの周囲の原野が所々、戦場に似たところがあるからといって驚いてはいけない。茨に蔽われた小丘こそ昔のゴールドラッシュの跡なのだ。今日なお、クヤバの人は畑を耕しているときに金鉱を見つけることがある。砂金くらいなら珍しくない。クヤバでは乞食は金鉱掘りなのだ。低地にある町を流れている河床で、彼らが仕事をしている姿をまず見かけないことは珍しい。一日働けばどうにか食べるだけのものは稼げる。だから商人たちは今でも、一すくいの砂金を米や肉と交換で

きるように小さな秤を使っている。大雨が降った直後、窪に水が勢よく流れだすと、子供たちは手に手に新しい蝋の玉を持って急ぐ。そしてその蝋の玉を流れに沈めて、それに小さな光るものが附着するのを待っている」

今でもセスナ機で三十分も飛べば、砂金やダイヤを掘っている現場に行くことができるが、クヤバ市の周辺では砂金を発見するのはむずかしい。レヴィ＝ストロースは、乞食が一日砂金を探せばどうやら食うだけは稼げると記しているが、現在の物価で言うと二グラムくらいの砂金に相当する。二グラムの砂金を手に入れれば、どうやら食物と油くらいは買えるが、高層ビルの街の周りで毎日二グラムの砂金が探せるわけはなく、現代の乞食は公園に坐って片手を差しだす世界共通の稼ぎ方をしている。

本格的に砂金を掘っている山奥のガリンペイロたちでも、手下は親方に食と住をみてもらって一日砂金三グラムの給料が普通だから、さほど歩の良い仕事ではない。親方たちから砂金を買い集める仲買人クラスから上が「金」で儲けることができるシステムになっている。

金で儲けるにも、やはり金（かね）が要るらしい。

ガリンペイロ相手の女たちがいるが、六グラムが相場になっている。たった四十分ほどの付き合いで男の二日分だから、女の方がずっと歩が良い気がする。

クヤバは魚の豊富な所だが、旅行者は街のどこにも魚屋がないので不思議に思う。魚は週二回の朝市で、生産者から直接に売られるのだ。

朝市に行くと、まるで丸太のように活きの良いピソタード、ドラード、パクーがゴロゴロ転がっていて、その壮観に目を見張る。

漁師たちはクヤバ河の沿岸に住んでいて、毎日釣りをしている。釣った魚は生簀に入れて市がある日まで生かしておくが、魚体が大きいのでなまなかの生簀ではかえって殺してしまう。それでこの地方独特の容器を作りだした。それは竹の唐丸籠（とうまるかご）とそっくりのもので、大きさは高さが約四メートル直径が三メートルもある。

それを岸の、底が平らな砂で流れのゆるい水深一メートルほどの所へ沈めておく。充分な高さがあるので魚は飛びだせない。さして重いものではないから取扱いも楽である。

街から離れて、漁師たちが住む河岸へ行くと、巨大な鳥籠を逆さまにしたような生簀があちこちの砂地の岸にあって、独特の詩情をかもしだしている。

籠には綱がついていてかなり離れた岸の木などに結んである。河が増水した場合、籠が沈み始めると流水の抵抗で押し流されて弧を描きながら浅い方へ寄ってくる。実に簡単だが合理的な仕掛けだ。しかし、二十キロ三十キロの大ナマズが獲れて、消費地が近い所でない

とこんな生簀も無用の長物だろう。クヤバ市から三十キロも離れると、漁師も住んでいないし、生簀もない。

クヤバの住人で私が最も親しい人は、岡村正という測量技師だ。岡村さんは日本人会長をしたり、二世の息子さんはクヤバ市議会に立候補したりしていて、すっかりこの地に根を下した一家である。

クヤバを基点にパンタナルに侵入するとき、独り旅だと岡村さんの家にとめてもらう。

岡村さんは最近、余技に絵を描きだしたが、ノートルダムを模したクヤバの古い教会を丹念に写生しているかと思うと、突如として五重塔にゲイシャの絵をかく。私が呆れると、彼は、

「どの画題が売れるか、苦労して模索中だ」

と言う。

「だって、アマチュアだから売れなくてもいいでしょう」

売るにはまだほど遠い絵なのだ。

「いや、そうはいかん」

と岡村さんは首を振る。

その説明によると、クヤバには数人の画家(勿論アマチュア)がいるが、個展をすると一応売れるそうだ。自分のが売れなかったら沽券(こけん)にかかわるそうだ。

「ところが、息子たちがプレゼントにわしの絵を知人に

やるものだから、展覧会用の絵がたまらなくて弱ってる。息子たちに文句を言うと、喜ばれるからいいでしょうと言うが、今度からはプレゼント用と売絵用と二種類描くことにした」

とも言った。

人生の楽しみ方にはいろいろあるものだ、と私は感心した。

私が学生時代に得た知識を基にして判断すると、こういう創作態度で絵が進歩するはずはないのだが、岡村さんの絵は目にみえて良くなるので不思議で仕方ない。

その岡村さんと一緒に、ピラニヤ釣りに行ったことがある。パンタナルにピラニヤは付きもので、外道として必ず釣れる魚だが、ピラニヤだけを釣りに遠出したのは後にも先にもその一回だけだった。

ポコネのピラニヤ釣り

地図を広げるとアマゾンとラプラタの分水嶺があり、その下にクヤバ市の丸印がある。さらに視線を下にずらせると大湿原を示す点々が現われ始め、広がってゆく。平原と大湿原の境目に小さな小さな丸印があって「ポコネ」と書いてある。

岡村さんのフォルクスワーゲンを私が運転して、あ

る朝、二人は出発した。切り通しの多い赤土の丘陵地帯を、かなりのスピードで飛ばす。バックミラーをのぞくと、まき上がった土埃しか見えない。

この小型車を私はめったに運転したことがない。ハンドルはヒョイと切れるし、ブレーキは踏み込むとガクンと停る。ずいぶん勝手がちがうが対向車がないから、馴れない車でも心配はない。

ポコネの前で、カンガッソという集落を過ぎた。集落の中央に共同井戸がある。ゴッホの絵にあるような、跳ねつるべのついた古い石組の井戸だった。

褐色の肌のほっそりした姿態の少女が水をくんでいた。大きな素焼きの水ガメを頭にのせて歩きだす。両手を挙げて頭上の水がめを支え、背筋をのばしているから、熟れかかった大きめの乳房が粗末な木綿のTシャツを押しあげてくっきりと盛り上がり、水ガメを中心に乳房から腰へと陽炎（かげろう）のように体がくねる。〝ふるいつきたくなる〟という古めかしい形容句を想いだしたほど魅力的な姿であり動きだった。

私はとっさにギアをニュートラルにして、ブレーキをちょっとふみ、惰性で車を転がしながら、その美しさに見とれた。

「早く行きましょう」

横で岡村さんが言った。どうもお年寄りは気が短くていけない。

カンガッソを過ぎ、湿地帯特有の丈が低くて幹が粉

をふいたように白っぽい森の中の道を進むとポコネだった。
一見して古い町だと分かる。教会を中心に虫歯のような家がポツポツ建っている。敷石や横木などは城に使うほど頑丈だった。昔の集落は要塞としての用途も考えられて作られたものもあるそうだから、ポコネもそうかもしれない。教会の塔が物見櫓（ものみやぐら）になり、周囲の民家の外側に向いた窓が銃眼になるのだ。
入ると出口が見える、小さな町だった。角々に数人ずつの男が立ってボンヤリと私たちの車を眺めている。生産活動をしているらしい様子はなかった。
「ここは三十年前とちっとも変らねえ」
と岡村さんが言った。
マットグロッソ州に最初の足跡を記したのは、バンデランテスと総称される金探しのポルトガル人と土人の混成探検隊だった。数百人で一隊をなす大がかりな探検隊が次々に入った。
ポコネの住民は、その子孫である。
次にやって来たのはトルコ人やシリヤ人などの中近東の商人たちだ。彼等はあくどい商売をして土着の人間からしぼったが、その反面、どんな不便な所へも入って商売をしたので地域の発展をうながした。
「ところがよ、このポコネはさすがのトルコ人も入れねえ」

と岡村さんは言う。
「外から商売人がやって来て店を開ける。町の連中は何も言わねえ。二、三日してクワを買いに二人ばかり来る。数日すると五人ほどクワを買いにくる。これは売れるとクヤバに行って大量に仕入れてくると、次の日から誰もクワなんか買いに来ない。そんな事ばかりやられるから、外来の商人は逃げだしちゃう。そんな排他的な町なんだ。外の連中とあまりつき合わないから、人種のタイプまでポコネ独特になっちまった」
一瞬の間に通りすぎてしまったから、よく分からないが町はほとんど活動していないようだった。三十年前と変らずちっとも発展しない代りに、昔のようにノンビリして誰も働かなくてもいいように見えた。ま、全然働かないわけではなかろうが、一日に二、三時間の労働でいいはずだと見当をつけた。
クヤバのように大発展するかわりに、住みにくくなり社会問題が増えている都会と、八十キロ離れた森の中で眠っている町とどちらがいいか……うかつには判断できないが、私の好みから言えば、ポコネの人間の方が利口だ。病院だの学校はクヤバのを利用して、税金も払わず犯罪もなく森の中の小さな町に住む。近代文明のドレイになるのはクヤバの人間にまかせればいい。
岡村さんの現在の仕事は、市が作る低所得者向け住宅の造成だが、
「ビンボウ人の家を市が作るから、まわりの地方から人

が集まってますますビンボウ人が増えるんだ」
と自分の仕事にきわめて否定的である。
熱帯の場合、都会以外には貧乏人は存在しない。金のない人はいるが、みじめな人はいない。束縛されずに誰でも自給自足の生活ができるのだから。
しかし、そうは言っても、資本の前には一人一人の森の住人は無力だ。道路ができ、農場主に土地を買い占められたら、下男になるか都会へ出てくるかしかない。ポコネのように意図せずに排他的な気風のために独立を保っていられる町は珍しい例だろう。この町から先が大湿原でどんづまりだという地理的な条件に助けられているにちがいない。ゴールドラッシュが消え、砦（とりで）の意味もなく、水路も利用されなくなったいま、ポコネは忘れられた町である。

町をすぎてしばらく進むと、行手にゲートがあった。「ここからパンタナル横断道路」と書いてある。動物の密猟を取締る森林保安官の詰所がある。銃器をチェックするのだが、私が停る前に保安官は手を振って「行って良し」というゼスチュアをした。私たちは密猟者タイプではなかったようだ。
この道はクヤバとコルンバをつなぐ目的で建設されているが難工事で、できているのは途中までで細々と工事が続けられている。せっかく作っても雨期になるとズタズタに寸断される。沼の上に道を作っているか

ら、いくらバラスを投入しても、工事のトラックが通るだけで道が痛んでしまう。それを直すために砂利トラが通り、道が痛み、砂利トラが入り……と永遠にイタチごっこなので当事者は呆れて、仕事をしてるようなしてないような振りをしている。

ゲートを過ぎてから、スピードメーターを百キロに合わせて、ちょうど一時間走った。もう周囲はほとんど沼である。道路の路肩にはワニがズラッと並んで甲羅干しをしている。アキダウワナからコルンバに行く道でもそうだった。自然の沼の岸は深い草におおわれているから、人工の路肩はワニにとってお気に入りの場所らしい。

このワニはジャカレ・チンガ（小さなワニ）と呼ばれる種類だが、それでも三メートルくらいにはなる。おとなしい。こちらが岸から近づくとノソノソときわめて緩慢な動作で水に入るのでノロマかと思うが、砂浜などに上がっている奴に舟で川の上から近づくと人が駆けるくらいの速さで走って川に飛び込む。英名をクロコダイルという。夜、懐中電燈を当てると瞳が其赤に燃えるように輝く。きわめて強い光で、美しい。群に光を当てると、街の灯のように見える。

昼間は十匹くらいしか見かけなかった岸辺に、夜になって何気なく光を当てると、ホテイアオイの葉の一つ一つのかげにギッシリと赤い光が点り、息をのむ。

英名でアリゲーターと呼ばれるジャカレー・アスー

（大きいワニ）は、狂暴で家畜を襲うためと皮が高価に売れるために獲り尽されて、パンタナルにはほとんどいない。私はパンタナルでは一度も野生のジャカレー・アスーを見たことはない。光を当てると目が青く光るのですぐ分かる。動物園で五メートルくらいのジャカレー・アスーを見ると、カヌーが沈んでいるようで不気味である。

一時間走った所に、木の橋があった。橋の下には三十メートルほどの幅の、河とも沼ともつかない水路がある。そこで釣ることにして、車をとめた。

橋のたもとに木が二本立っていて、道路工事の砂利トラが三台停っていた。中をのぞくと運転手が昼寝をしている。「パンタナル横断道路」は沼の中に盛土した部分がほとんどだから、道端に木があるのは珍しいのだ。せまい木陰に雨やどりするように、大きなトラックが体をよせあって烈しい日光をさけているのだった。パンタナルの午前十時……ワニは日向にでたがり、人は目陰にもぐり込む。

車をおりて橋の上から水路を見ると、ホテイアオイがぎっしり浮かんだ水はわずかに流れている気配があった。この辺は平行して流れるクヤバ河とパラグアイ河に挟まれた地帯だった。両河は百キロくらい離れているが、多くの水路でつながっている。この水路もその一つだろう。クヤバ河から支流のフラート河へ入っ

たらいつのまにか。パラグアイ河へ出て驚いたことがある。乾期には葉脈のように水路が走り、雨期には一枚の葉のように青い水が満ちる。
「もっと先に行くと、大きな沼がある。そこでたくさん釣ったことがある」
と岡村さんは言ったが、ここも良さそうだし、景色も良いので、ちょっと試すことにした。
小竿にスピニングリールをつけ、ニッケルのスピナーをとめて投げてみた。
「ポチャン」
と十メートルほどスピナーが飛び、ゆっくりとリールを巻き始めると、すぐグ、グッと掛かった。
「いますよ」
言いながら橋の上を見上げると、
「ほう、もう釣れたんか」
ルアーをやらない岡村さんは感心してくれた。
ルアー釣りは仕度が早い。リールの糸にはスナップが結んであるから、リールを竿につけスナップをガイドに通し、スピナーをつけ、竿をのはす……それだけの動作に一分も要しないだろう。
「じゃ、ここで釣ろう」
人が釣るとじっとしていられない、釣人共通の焦慮に囚(とら)われたらしく、岡村さんも急いで釣道具をだした。
スピニソグ・リールを使い、中通しナツメオモリの

ぶっ込み仕掛けだ。ハリスはワイヤーで、エサは手当りしだい現場で調達する。第一号のピラニヤがこま切れにされて、エサになった。

岡村さんが水路の向う側、私がこちら側に陣どって釣り始めた。

私はタックル・ボックスをひろげ、手持のスピナーをあれこれ選ぶ。ルアー釣りの楽しみの一つだ。ちょうど、化粧台の前に坐った女性がどのクリームをつけどの香水をふろうかと、自分の顔は棚あげにして心を楽しく迷わせるように、釣師も自分の技術は棚上げにして、やれ金色だ銀色だと迷うのである。本当は全部一緒につけたいのだ。

二匹釣るごとにスピナーを替えたが、オリムピック社のペプス・ニッケルが抜群の効果があった。投げて、ヒラヒラと沈むうちにグーンと糸が張り、魚の引きが伝わってくる。高価な銀メッキよりもキンキラキンのニッケルメッキの方が、ピラニヤのお気に召すらしい。

色彩は赤と黄を好む。黒や白は追いが悪い。メップスのブラック・フリューリーなどは私が好きなスピナーだが、ピラニヤは好まないらしい。

二匹釣ると小休止をして、水鳥やワニを眺めて時間をつぶす。こうやって釣るとあきがこない。

水路には夥しい水草が繁茂している。ほとんどが浮草でヒシモのような小型のものもあるが、大半はアガペー（ホテイアオイ）である。ホテイアオイはこの辺か

らアマゾンにかけてが原産地だけあって、実に勢いが良い。ホテイアオイも幾種類かあるらしい。大ざっぱに分けると、金魚鉢に入っているような茎がプクンとふくらんだ丸っこい感じの種類と、茎がほとんど直立して葉も大きいセイタカホテイアオイとでも名付けたい種類がある。

水中を浮遊するラン藻の類はほとんどない。水は朽葉から溶けた色素などで薄い茶色だが、透明度はかなり高い。こんな点が都会近くのクリークとは違う。都会近くの水は富栄養化しているから、アオミドロのようなもので緑色を呈し、スピナーの鈎にもからまってくる。

パンタナルの沼や水路には、底に根を生やし水上に葉をだす挺水植物や、水中に繁る沈水植物はほとんど見られない。場所によって流れの底にフサモやマツモの群生が見られる程度だ。

水位が三メートル以上も変化し、澄んだり濁ったりし、乾期にはうっかりすると干上がってしまうパンタナルには、これらの植物は適応しにくいのだろう。

ホテイアオイはこちら岸から向う岸へといつも風のままにまに吹き流されながら、群を形成している。乾期になって水が減り水面の面積が少なくなると、群の密度は高まり、干上がるときはギッシリ密着した状態になる。根や下葉が地上をおおいつくし、地表の水分の蒸発を防ぐから、そのままの水なし状態で数ヵ月は持ちこ

たえる。それに反し、バラバラのまま干上がったホテイアオイはカラカラになって転がっている。

小型のヒシモなどの浮草は、いくら密着しても水分保持ができるほどの厚味はないが、それらは決して独自の群生はせずホテイアオイの間に分散しているので、干上がったときも一緒に生き延びることができる。

そのような適性のためであろうか。ホテイアオイの群落はどんなに発達しても水面積の四割以上を占めることはないようである。少なくとも、私は見たことがない（干上がりかかった沼は別である）。乾期に入ってもなるべく後まで水上に浮かべる方が良い。そのためには個体数が少ないほど好都合だが、いよいよ干上がったら群が大きいほど長期間生き延びられる。そのかね合いが平常水面積の三～四割という率なのではないか。

他にも理由があるかも知れないが、いずれにしてもパンタナルの沼や水路では水面の六割が常に空いている。

これが釣師には有難い。

もし、ハスやヨシなどの挺水植物が未開の沼にビッシリ茂っていたら、とても釣りなどできないだろう。この太陽と水の豊富さを考えたら、水辺にさえ近づけないはずだ。農園の中にある溜池のリリーパッドのようなわけにはいかない。

向う側で釣っている岡村さんが、

「アレレッ！」
と奇声を発した。
竿が曲がり、糸が切れた直後で、ナイロン糸が頼りなく風にゆれている。
「どうしました？」
「ワニにちぎられた」
岡村さんは口惜しそうな声をだした。
ワニでは仕方ない。
私も虎の子のペプスニッケルを一つ、ワニに背がかりさせてしまって取られた。ウルトラ・ライトの竿に二号の糸ではまるでお話にならない。どんどん糸を持って行くので、こちらから糸を引いて切るしか方法はない。
「なんか、でかい魚を釣ろうと思って大きなエサをつけたら、ワニにやられた」
岡村さんはブツブツ言いながら仕掛けをつくり直している。
遠くの岸で甲羅を干しているワニもいるが、目だけ出して浮いているのもいる。人間が来たので迷惑そうな様子を露骨に見せている。パンツ一つで寝そべっていたところに客が来たようなもので、しかもその客が長っ尻だから困っているのだ。この辺のワニが人を嫌うのは、砂利トラの運転手が石をぶつけるかららしい。来る道すがらも、オシッコをしていた運転手が用が終ると石を拾って、ワニに命中させていた。つまらないイ

タズラをするものだ。
……白いモンシロチョウがたくさん飛んでいる。水面に飛ぶチョウは、なぜかチョンチョンと尻を水面につけるくせがある。トンボはそうやって卵を産むのだと子供のとき聞かされたが、まさかチョウが水中に産卵するはずはない。
チョウのあとにピラニヤの白い歯が航跡のように輝いて、一瞬に消える。ほとんどのチョウは何も気づかないように高く飛び去ってしまうが、時々はすっと水中に没してしまう。
「あ、やられた！」
と思いながら私は見ていた。
こんな場所のピラニヤは手を洗っていても襲いかかるから危険である。水面の波紋に興味をそそられて、私はサーフェス・プラグを使うことにした。
手製のバス用プラグがたくさんある。ときどき行っていたサンパウロ市の近くの湖のブラックバスが、アフリカ産草食魚のチラピヤのために絶滅したので（卵と稚魚を喰われたため）使いみちがなくなったのだ。
出来の悪いのを選んでスナップに付け、ポーンと投げる。着水した瞬間に飛びつくか、アクションを与えはじめるとすかさず飛びつくかである。二匹くらい釣ると、バルサ材が露出し、バラバラになる。鈎だけ回収すれば原価はタダに等しいから、鷹揚な気分でピラニヤがプラグを襲って破壊するさまを眺めて楽しんだ。

釣れたピラニヤは素手で持ち、素手で鈎を外す。かなり注意力の集中を要する作業だ。
無傷で放してやると、どんな魚も生々と泳ぎ去る。その感じが好きだ。ヨロヨロと泳ぎ去るのを見るのは好まない。だから釣り上げるときも、逃げる時の余力があるうちにランディング可能な太さの糸を使う。
必要以上に細い糸を用い、魚がクタクタになるまであやすのを楽しむ釣り方は、衰弱した精神の所産のような気がしてならない。私も二号の糸でドラードに挑戦したことがあるが、糸を切られないようにダニのようにくっついているだけで、最後はさすがのドラードもヒラを打って浮かび上がった。自分も魚もみじめに感じた。暴れながらタモに収まり、放せば舷側をけって泳ぎ去るくらいが良い。
四個ほど手製のプラグを破壊されたので、今度はピラニヤ以外の魚を狙ってみた。
アブの七グラムのスプーンで、黒いアムレットをつける。正確には黒と金筋のゼブラ模様だが、これだとほとんどピラニヤは来ない。
投げて底まで沈め、ゆっくり曳いてくると三十センチほどのトライーラが喰いついた。小型だがなかなかの引きである。三匹釣ったが、どれも尾鰭がボロボロでこの辺の水中の闘争の激しさを教えられた。
「アルモッソ（昼食）せんかね」
岡村さんが声をかけたのをしおに、私は竿をおいて

車に戻った。

ソーセージを厚く切ってフランスパンにはさんで食うだけだが、実に旨かった。排気ガスのない所ではすべての食物の味は三十パーセントくらい上昇するようだ。その上に、景色が良くて体を充分に動かした後なら、どんなものでも旨い。舌だけでなく、体全体が「うまい」と叫ぶ。都会の食物が「味覚」なら、釣師が野外で食う味は「体覚」？だろうか……。

コーヒーをのみながら、パンとソーセージを身動きできなくなるほど食った。

「あんた、魚どこに入れとるね？」

と岡村さんが訊ねた。

「逃がしてます」

「そりゃ、もったいない。ピラニヤは唐揚げにすると旨い。帰ったら早速、唐揚げにしてごちそうします」

「じゃあ、とっておこう」

車のトランクから、岡村さんはコーヒー袋を出して渡した。ピラニヤの入れものはこれにかぎる。ストリンガーには通せないし、網では喰いちぎられてしまう。

……釣りをしていると、時間がたつのが早い。ポツポツとピラニヤを水中のコーヒー袋に入れているうちに、陽が傾いた。

私たちは帰ることにした。

ポコネの近くに、荒れ果てた大邸宅が見えた。街道か

ら三百メートルくらい奥に、背後に森をひかえて草原の中にそびえている。「風と共に去りぬ」という映画に出てきたような農園主の邸宅だった。二階にバルコニーがついている。夕暮れの空を負って荒寥としたシルエットが浮かんでいた。
「この持主の家族は死に絶えて、長い間だれも住んでいない。旅人は誰でも勝手に泊っていいことになっとるが、誰も気味悪がって泊るものはおらん。出るんですよ、夜中に」
「なにが出るんだろう」
「お化けですよ」
　まるでオバケがこの世に一種類しかいないように、岡村さんは断固と言った。
「お化けといっても、どんな？」
「どんなお化けと言われても、よく知らんが……」
　彼はこまったように首をかしげたが、
「とにかく、必ず何か出るそうだ」
　と断言した。
「フーン」
「それで気味悪がって、泊るものは誰もおらんのだ」
　私は車をとめて、無人の館を眺めた。街道から建物までは草におおわれた道の跡がある。
「泊ってみようかな」
　好奇心を刺激されて、私は何気なくそう言った。
　それを聞くと、助手席に深々と坐っていた岡村さん

がモゾモゾと動いて、
「実はわしも泊りたくてしょうがなかったんだ」
と言った。
「しかし、独りではねえ。あんたが一緒なら心強い。今晩泊りましょう」
「エッ！」
私は驚いて、
「いや、今晩はダメです」
あわてて首を振った。
泊るなら腕っぷしの強い用心棒を一人連れて、と思っていたのだ。――　深夜、用心棒が怪物と格闘していると、私が棒など持って応援する――というのが望ましい形式なので、岡村さんと二人ではご老体に格闘させるわけにはいかないから、私が矢面に立たなければならない。そういう場面は想像してもあまり好きになれない。
「次の機会にしましょう」
私は急いで車をスタートさせた。
「家へ帰ってメシを食って、懐中電燈もって出直してもいいがね」
未練気に岡村さんが言ったが、私は生返事をしてアクセルを踏み込んだ。
(後に開高健氏たちとクヤバに来たとき、私はこの話をして一行の気を惹いた。開高さんはともかく、編集者、カメラマンともに二十代なので用心棒として使えそう

だった。それに、ポルトガル語がさっぱり分からないので、お化けがゾッとするような事を言っても通じないから安心だった。全員乗り気になったがスケジュールの関係で泊りに行けなかった。今でも残念に思っている）

とっぷり暮れた行手の闇の中に、クヤバの灯が明るく見えてきた。

家に着くと、奥さんがすでに夕食を整え、テーブルにごちそうが並んでいた。

「おそかったのね。たくさん釣れました？」

「ウン、釣れた。これを料理してくれ。唐揚げでいい」

鷹揚に言いながら、岡村さんがコーヒー袋を台所の入口にドサッと置くと、奥さんが中をのぞいて、

「まあ、ピラニヤじゃありませんか。私はピラニヤだけはいじりませんよ」

と拒否した。

その口ぶりでは、以前噛まれたかどうかしたらしい。

「少しでいいからしろ」

「嫌です」

岡村さんは私に食わせると言った手前、困ったように立っていたが、

「まあ、明日でいい」

と亭主の威厳を保って言った。

……翌日、昼食の前に二人でビールを飲んでいると、

「まあ、まあ、外へ出しておくから魚が腐ってしまって

……。マリヤ、ジョガホーラ（マリヤ、捨てなさい）」
奥さんが女中さんに言う声が聞こえた。
岡村さんは聞こえない振りをしてビールを飲んでいた。

森への適応

ブラジル原住民のインヂオの主食はマンジョカ（マニオク）芋である。
これは野生に近くて生命力の強い植物で、地上部は蔦ではなく、細いながら木質の茎をだす。自家用くらいなら植えっ放しで良い。必要なだけ収穫しても、勝手に増える多年生の植物だ。（近年は安価に得られるアルコール原料として注目され、大規模なプランテーションが開発されつつある）
十株で一人養える、と言われる。
僻地（へきち）の住人たちは小屋のまわりにバナナとマンジョカを植え、ブタやニワトリを放し飼いにする。家畜に餌をやらないのが普通である。犬もいる。犬にも餌はやらない。
食性の関係で犬は不利で、ブタは一応肥えているのに犬はヒョロヒョロにやせているのが普通だ。ニワトリは勝手にタマゴを産み、ヒナをそだてる。さして増えないが、一家の食料としては常時二十羽もいれば充分

である。

僻地の住民たちの生活は、勿論、かつての原住民のインヂオたちの生活とはまるでちがう。かりにインヂオの血をひいていても、ブラジル国家の主権の下に部族間の闘争も消滅し、素朴なカトリック風の世界観を持っている。

インヂオの生活は民族学者によって比較的紹介されているが、その後に住んでいる森の住人たちの生活はほとんど知られていない。より濃い自然を求めて旅を重ねていると、森の住人に接する機会が多い。そして感じることは、自然への適応の見事さでは彼等の方が先住民族のインヂオ以上だということである。「セルタニスタ」（森を知る者）を目指す一釣師にとって、教わることも多い。

彼等は衣服や火薬など文明の恩恵を最小限に、しかし有効に受け、一方では部族間の抗争やタブーなどの負担がないから、平和に定住して、森に適応しながら暮らしているのである。

彼等の生活の一端を、思いつくままに書いてみよう。

まず、森の住人と呼んでも、特殊な人種ではない。辺鄙（へんぴ）な所にポツンポツンと住んでいる人たちを指している。黒人、ポルトガル人、ドイツ人たちの子孫、勿論、圧倒的に混血が多い。日本人の二世もいる。そして、すべての人々が人種を問わず、同じような生活、同じような思考をしている。

彼等は森の木を伐って、いくらかの空地を作り、小屋を建てている。壁はたいがい土壁で屋根は瓦か草ぶきである。

小屋をのぞくと、手製の楽器と古びた鉄砲が壁に掛かっている。火薬だけを買い、弾は自製して、ケモノや鳥を射つ。食用となるケモノはシカ、ケイシャーダ（猪）などである。サルやワニを食べることもある。タツー（アリクイ）は棲み家の穴をつぶして素手で捕えるが、美味である。

鳥を射つのに鉄砲を用いるのは、比較的貨幣経済の循環に参加している度合いの大きい住人たちである。自給度のより大きい住人は火器を用いないで、他の手段で鳥をとる。例えばブドッケなどを使う。これは石弓と訳されるが、小石や乾燥粘土丸を弓で発射するものだ。

やや幅の広い弓に弦を二本張り、中央に皮片をつけ石をはさみ込む。使用法は弓矢と同じだが、引きしぼって発射するときに左手で支えた弓をちょっとひねってやる。そうすると弓に当らず石は飛んでいく。これを怠ると弾丸は弓の中央に当ってしまう。かなり威力のあるもので、食用になる程度の大きさの鳥なら殺すか気絶させるかしてすべて落とすことができる。ブドッケで落ちないほど大きい鳥の肉は不味である。ブドッケの利点は発射時に音響をたてず、鳥を驚かさないことである。いつも鉄砲を射っているとだんだん鳥は遠ざ

かってしまうが、石弓は注意深く使用すればそのようなことはなく、いつも住居の近くで獲物を得られる。

貨幣経済への参加度が大きい住人が鳥をとるのに鉄砲を用いるのは、一面では火薬を買える金があるからだが、一面ではそれだけ環境が荒れているためである。

魚は『せん』でとる。ポルトガル語ではコーボというが、竹なり蔦なりで長さ一メートルくらいの大型の『せん』を自製し、流れ込みや淀みなどの数カ所に一年中仕掛けておく。その場所は自然に決まっていて、他人が場所とりをしたり中の魚を失敬したりすることはない。

魚獲童は、産卵期は別として、普通は少なく、一日一匹の魚が食卓に供される程度だ。とれない日もある。しかし、決して他の漁法で積極的にとろうとはしない。ひどく無欲なのだ。都会人の目には怠け者のようにさえ見える。しかし、結果的には、その無欲のために、こんな小川がと思うような流れも荒されずにいつまでも住民に魚を供給し続けることができる。

彼等は一様に、ひどく無欲である。そして、その無欲さだけが森の中で平和に生きていける唯一無二の原理だと、本能的に知っているようだ。

「労働」は都会人には「金を得る行為」と同義語である。そういう意味では、彼等は怠け者である。最低限の労働しかしようとしない。資本家は彼等を使ってみて「ちょっと金を与えると、その金がなくなるまではもう働こうとしない」と腹を立てるが、金銭を多く得るため

に働きだすと生活系のバランスが破壊されることを本能的に知っているのである。

労働は嫌うが、怠け者ではない。森の中を速く歩いたり、一晩中ヴィオロン（ギターの一種）を鳴らして唄ったりするのだ。

森や河筋に散在する人家はまったく孤立しているように見えるが、ある一軒を例にとれば、その家を中心とした約十キロくらいの距離までが親類や知人などの知り合い社会である。盗難などは決して起きない平和な社会である。

知人や親類を訪問する場合、男だけだと彼等はかなり速く歩く。古くポルトガルなどで使用されたレグアという距離の単位がブラジルに残っていて、それは約六キロの距離だが、彼等は森の中を一時間一レグアの速さで進む。それを基準にして遠さや時間を言う。私もしばしば同行したが、少しでも荷物があるとアゴが出るスピードである。

彼らが貨幣経済の循環に巻き込まれるのを本能的に怖れ避けているのは、多くの具体例で示すことができる。

一例を挙げれば酒である。彼らはピンガという安いサトウキビ酒を常用している。ウイスキーを飲ませると、旨いという。すすめればいくらでも飲む。しかし、自分が金をだしそれを買おうとは決してしない。品物を買おうという欲望が生態系の破壊につながることを

漠然と感じているのだ。
彼等が現金で買うものはごくわずかの品物に限られる。布、石油、火薬が主なものだ。
これらの無欲な人々の祖先を遡ると、ずっと遠く遡る必要もなく、たった一代か二代前の親たちは黄金を求めて入り込んで来たバンデランテス隊か、外国から大農場主を夢みて海を渡ってきた人々である。
欲望のかたまりのようだった人々が、無欲そのものの住民に変化するのにたかだか五十年くらいの年月があれば充分なのだ。社会学的にはこれは「退行」現象であろうが、森という生態系から見れば見事な適応である。彼らは決して自然を破壊しない生活様式に従って生きているのだから。
この短期間で達成される適応を、私は「強制適応」と勝手に名付けた。彼らは試行錯誤の末、そういう生活態度を選ぶのでなく、「無欲になれ！」と大声で命令する森の声に強制されて一定の生活様式を得るからである。「無欲になれ」と森はいつも語りかけている。
その声は決して弱々しいささやきではなく、大声で命令している。それは比喩的にではなく、樹木のエーテルが分泌する他感作用のような現実的な力で、住民に働きかけている、と私は感じている。住民が欲をだしたら森は破壊される。森は必死になって自己防衛の声を発し続けている。原始林の中で、おぼろ気ながら、私もその声を実感することがある。

だから私が森の奥で釣りをし、釣った魚を傷めずに放すように腐心するのは、魚を減らさずに次の機会にも釣りたいという実利的な心理もあるが、それ以上に、たとえ通過者にすぎなくても森に過す幾日かの間は他者ではなく森の一員でありたいと希い、森の声に従うからだ。

なぜ魚を放さなければならないのか、その行為をしながら自分にもよく説明できない。ただ森の声に命令され、従っているだけなのだ。

人間が幸せに生きるとは、どういうことなのだろうか？　と私は思うことがあるが、森の住人たちの素朴で平和な生活が幸せの一つの原型であると言えるようだ。

しかし、彼らの生活は文明の力が強大な現代ではきわめて不安定である。布、石油、火薬（いざとなったら病院も）だけを文明から貰い、あとは絶縁して過す生活がいつまで続けられるか、きわめておぼつかない。

ある日、遠い町で一人の役人が地図の上に一本の道路を引いただけで、彼らの生活形態が崩れ去ってしまう。近くに道が通れば、日ましに貨幣への依存度が増大する生活に変ってくる。だが僻地の人間が充分な金を得るのは不可能に近い。彼らは森をすてて都会へ出てくる。そして貧民群の仲間入りをする。

クヤバ市に行けば、それを実際に見ることができる。岡村さんはボヤきながら、せっせと低所得者用団地を

つくるのだ。
この稿を書きながら目に浮かぶのは、あのパクー釣りの「カン流し」の夫婦の姿である。
「フフフ」という妻の含み笑いがあでやかに水を伝い、夫が力強く櫂を動かした。一軒家に住み、ニワトリと犬を飼い、二人でカヌーに乗って生活の糧を得る。……夫婦の生き方の原型にすら思えた。
私たちが行った二年後に、コルンバ市に釣りクラブができた。快速モーターボートを十隻持ち、サンパウロの上流階級を対象としたクラブである。電話一本で往復の飛行機の世話までしてくれる。釣りに行った人に聞くと、クラブの釣場はまさしく私たちがキャンプした場所だった。
誰にだって釣りを楽しむ権利はある。しかし、快速ボートが連なってトローリングをしたら（それが最も簡単でつまらないドラードの虐殺法だ）、もう「カン流し」の釣法は不可能だろう。じっとカンの行方を追いながらモーターを始動するタイミングを見計らっていた、エジソンの厳しい目が目に浮かぶ。ずいぶん、遠い距離を彼は待った。
あの夫婦はもっと下流に移っただろうか？　しかしあまり遠くでは仲買人も来てくれないだろう。あの女の笑い声が耳に残っている。いつまでも、あんな風に笑っていてほしいと希っている。
森の住人たちの世界観は、ごく素朴なカトリックの

教義が中心になっている。神―人間―動物及び植物と順位ははっきりしている。この世は神が支配しているので、たいがいのことは、病気や死でさえも、「もし神がお希みなら」という言葉で甘受する。ブラジルの一社会学者は、そういう彼等（カボクロという用語を用いている）を規定して「運命論者である」と評した。

その規定に反対はしないが、釣師としての立場から言うと、表現を変えて、「彼等は自然にしたがう人々である」としたい。

釣りをしていて全然釣れないと、彼等は、

「今日は神が希まないのだ」

と言う。必ず言う。

そのときの〝神〟という言葉は、デウスではなく〝自然〟もしくは〝森〟という意味に私には感じられる。カトリックの教義を奉じながらも、森全体と一緒に息づいている汎神論的な感覚に生きる人々だと言えるだろう。

野生動物たち

ブラジルに広範囲に分布し、パンタナルにも多いサルは、ブジューという黒っぽくて大型のサルだ。パンタナルにはかなりの群で棲息し、朝夕一斉に鳴く。百から三百の群が鳴き始めると、ゴーゴーと遠くを嵐が吹き

過ぎているような、ジェット機が飛んでいるような響きで森は包まれる。ゴーゴーともグァーグァーとも聞こえる機械的な音響で、波のように高く低くなりながら絶え間なく約一時間続く。

山岳地帯の住人はブジューの鳴き声で翌日の天気を知る。雨の前日はとくに鳴き騒ぐものだからである。しかし、パンタナルでは毎日同じ調子で鳴くので、天気を占うことはできない。もっとも平地のパンタナルの天候は安定しているので、ブジューも天気の変りやすい山岳地帯のように変化をつけて鳴くことができないのかもしれない。

まったくの野生だが、人に馴れないこともなく、餌付けをすれば家の廻りの木をねぐらにするようになる。

しかし、パンタナルの住民は自給自足の生活で、犬にもエサをやらないくらいだからとても百くらいの群を餌付けすることなど不可能で、人間とブジューはまったく没交渉に生きている。人々はサルを殺すようなことはせず、サルもまた人家の周りの果実を荒したりしない。

彼等は主としてヤシの実などの野生の果実を食べているようだ。ブラジル・ナッツなどがあれば、勿論第一のごちそうだろう。ブドウくらいの実がなるヤシが多く、外皮は薄いが甘く栄養がある。皮はサルが食べ、固い実はパクーが食う。

昆虫もかなり重要な食糧らしい。母親にぶら下がっ

た子ザルが青い棒のようなものを旨そうにかじっていたが、よく見たら大型のバッタだった。

鳥の種類と数は実に多い。中でも、サギやツルのように岸辺に立って魚を捕食する、脚と頸の長い鳥が圧倒的に数が多い。

そのほかに、ウのように水に潜って魚を捕食する鳥、カモメのように空から水面の魚をさらう鳥もいる。

鳥たちの繁殖場は、それらの大ざっぱな三種に分かれて大集団を形成している。

サギの繁殖場は沼の周囲の森である。木の上に営巣するが、ざっと見ても五千羽以上のヒナがいる。ピンク、白、灰色、……五種類くらいの、体の大きさがほぼ同じサギが混棲している。鳥の重みやフンなどで、巣を作られた木は枯れているか枯れかかっている。

羽が生え揃ったヒナたちは毅然と頸をのばし立派な態度をしているが、親が魚をくわえて戻ると急にガキっぽくなりギャーギャーわめき始める。

カモメやウミネコに似た鳥は、本流沿いの砂浜に巣をつくる。砂の上に凹みを掘るだけで、そこに卵を産みヒナをかえす。何の防御物もないだけに、親鳥たちが侵入者に示す攻撃性はすさまじい。私がうっかり彼等の巣のある中州に上陸して頭をかかえて夕方まで過したことはすでに記した。集団の規模は砂地の面積次第であるが、一メートル四方に一つくらいの密度で巣がつ

くられている。一度に二つ卵を産むのが普通で、親鳥は白いがヒナは茶色がかった砂と同じ色をしていて、人が近づくとペタッと凹みの底にはりついて身動きすらしない。親鳥たちの呼び声はウミネコに酷似している。

パンタナルに棲息する鳥類のうち最大のものはトゥユーユーである。丹頂ヅルに似ているが、もっと大きく重々しい。でっぷりと肥ったツルのようである。佇（たたず）んでいる丈（たけ）は大人の肩くらいまである。

よほど重いらしく、平地では十メートルくらい助走しないと飛び上がれない。飛ぶのが面倒らしく人が近づいてもなるべく歩いて逃げようとする。ゆっくり近づくとゆっくり逃げる。急いで追うと急いで逃げる。どうしても飛ばなければならないと観念すると羽をひろげてヨタヨタと助走する。空中に浮かんでも急上昇はできない。

そのかわり、飛んでいる姿は美しい。十二歳くらいの少年ほどもある大きな鳥が白い翼をひろげてゆったりと飛翔する。河べりを移動するだけのときは、無駄なエネルギーの消費をさけてか水面すれすれを飛ぶ。静かな水面にクッキリと姿を映し、さながら二羽の鳥のように上下に連なって飛ぶ姿の美しさに、思わず釣りの手を休めて見惚れてしまう。

釣りをしてカヌーを漕いでいると、水辺の倒木にとまって魚を狙っているトゥユーユーによく逢う。助走できないから高みに登ってそこから飛ぶ。一メートル

も水面から高ければ飛べるらしい。カヌーで流れを降って近づくと、ジリジリと枝をよじ登りながら飛ぼうかどうしようか迷っている様子がアリアリと分かる。気の毒なのでそっぽを向きながら降り、二十メートルも過ぎてから振りむくと、安心したように枯枝をくだっている。

トゥユーユーは群棲せずに、一番（ひとつが）いで高い木の股などに巣をつくりヒナを育てる。枯枝を集めた大きな巣である。

パンタナルで野生のスクリー（水蛇、アナコンダ）に逢ったことはない。無毒だが、巨大に成長する蛇で水辺を好む。大きさは二十メートルとも三十メートルとも言うが、ハッキリとは分からない。素晴らしく大きくなることは事実で、射殺したスクリーを二十人くらいの兵士が並んで支えている一九三〇年頃に写した古い写真を見たことがある。

今から二十年くらい前にパンタナルで釣りをした人は例外なくスクリーを見たと証言するから、ひどく減少したことは事実だろう。

ワニやカピバラについては、すでに触れたが、釣りをしていて目的の魚だけでなく他の動物たちの姿態を眺めるのも楽しみである。木陰に人影がチラチラしているので、土地の男が岡張りをしているのかと思って近づくとカピバラだったりする。

ワニは流れの弱い所を好むので本流なら大曲がりの内側などに多い。流れのほとんどない水路や沼にはことに多い。

パンタナルでの私の釣りは急流を好むドラードが主なのでワニとの間にトラブルは生じないが、投網打ちなどは時にワニが入って因ることがある。

ワニの力は強大なので暴れられたら投網などはひとたまりもない。投げた網がすぼまらないのでワニが入ったとすぐ分かる。できるだけ静かに、絶対にワニを刺激しないように注意して、ソロソロと岸へ上げるのが網を破られないコツだそうである。ワニも妙なものがからまったことは知っているから、静かに網を外せばおとなしくしているそうだ。単におとなしくしているのではなく、流水か何かの擬態のつもりでいるのだろうか。

いずれにしても、網が外れた瞬間、だまし合いの静寂は破られ、ワニはバタバタと逃げだし、投網打ちは網が助かってホッとするのである。

フリーライターの菊谷さんとボートに乗って沼で釣っていたとき、彼が急に便意をもよおした。周囲の岸は雑木や草が茂って上陸できそうもない。沼の一隅に砂が露出した小さな中州があった。大小のワニが並んで甲羅干しをしている。

ボートを漕ぎよせて、ワニを追い払い、

「さあ、どうぞ。僕は見えない所に行っているから」

と言ったら、彼は、
「いいよ、いいよ。何だか、したくなくなった」
と言った。
水面のあちこちには追われたワニが目と鼻をだしてこちらをうかがっている。たしかにあまり落着けない感じだった。

野生動物ではないが、牛について少し言及する必要がある。パンタナルの牛は野生に近いから、釣師はその習性を知らなければならない。これは自然に得た知識でなく、漁師や住人に聞いたものである。
まず、牛を驚かせてはいけない。牛の水呑場は決まっていて群でやって来て次々に水を呑むのだが、舟上の釣師が彼らを驚かせると牛は引揚げてしまう。その日は戻らないから水を呑みそこなった牛はひどく弱るそうだ。
また、牛がいる近くの岸辺で魚を食べる場合は、その骨を遠くの水中へ投じるか、地中に埋めるのが心得で、そうしないと牛の足に刺さることがある。キャンプなどはなるべく牧場でない場所にした方が、牛を驚かさずに、人間も心おきなく談笑することができる。
初めてコルンバ下流にキャンプしたときのことだが、牧場の出口のある岸で戸見沢さんが河の水を掌ですくって飲んでいた。
その浅い河底に巨大なマリモのようなものが重なっ

て一面に沈んでいた。
「それ何だろう？」
指さすと、
「牛の糞です」
彼は平然と答えて、
「だから、味がでて河の水は旨いんですよ」
と言った。
私も見よう見真似で河の水を飲むようになり、甘く旨いとも思うが、あれから味がでたせいだとはいまだに思えない。

夕暮れの河で

昨年、パラグアイ河の最上流部で釣った。十月に入り、乾期と雨期の境い目の微妙な数日だった。雨期の前触れの雨が何度か降り、魚たちは遡上を始めていた。
カヌーをとめてひっそりと息をひそめていると、先を急ぐ旅人のようにドラードの群が流れをさかのぼる気配が河に満ちるのだった。
この辺は蚊が少ないので、私は夕まぐれの黄金のように豪華な、しかし移ろいやすい一刻を心ゆくまで味わうことができた。トゥユーユーの最後の一匹が羽をひろげて飛びたつと、河辺の鳥はもう姿を消して、茜（あかね）色の空を高く飛ぶ遠い鳥だけになった。コウ

モリや夜行性の鳥が飛び始めるにはまだ間がある。
ブジューの大合唱がゴーゴーと響き始めた。唄をうたうと腹がへることは誰でも経験している。寝る前に一時間も叫んだら夜中に空腹になるのではないか、と他人事(ひとごと)ながら心配になるほどブジューたちは熱心に咆哮(ほうこう)し続けた。両岸の森の色がだんだん濃くなった。
日が傾いて魚が上ずっているので、私はサーフェス・プラグを使っていた。アブのキノッチをモデルにした自製品である。先端をななめに切り込んだ砲弾型をしている。リップもない。消耗が激しいので最も手軽に製作できるモデルを模索して、自然にキノッチと同じような形になった。
鈎は胴に一本ついているだけである。尾が軽いから動きが実に良い。ちょっと引くだけで、さながら生きているように全身を軽快にくねらせる。いままで使ったプラグの歯型をみると九十パーセントまでは下腹部に集中している。犬魚もドラードも同じである。肉食魚は獲物の下腹部を襲い、殺しておいて頭からのみ込むのであるから、歯型が下腹部に集中するのは当然だろう。スズキやブリの腹を裂いても、小さなヒコイワシがちゃんと頭を先にして呑み込まれているのを見ても、泳いでいるのをポンプのように呑み込むのでなく一度殺してから順序よく呑むのだと分かる。
そのことに気付いてから、私はプラグも鈎は一本に

した。動きが良くなって実によく釣れる。馴れとは不思議なもので、小型のプラグに二本も三本も鈎をぶら下げた市販のものはうっとうしくて使う気になれなくなった。スピナーやスプーンはその構造上、鈎は一本しかついていないが、もしスピナーに三本も鈎がついていたらおぞましくて使う人はいないだろうと思われる。

カヌーは突きだした倒木の枝にしばってある。独り用の、文字通り独木（まるき）舟だ。軽く動くので歩くのより楽に移動できる。

プラグを投げる。着水した瞬間に魚がでることもある。流しながらチョッチョッと動かしているときに水しぶきが立つこともある。充分に流して、水中を曳いてくると竿が弓のようになることもある。

魚が大きいから一匹釣ると満足して十分くらい休むので、釣る数はさほど多くはない。私のドラード釣りは、いつの間にか一つの型ができてしまった。ドラードという魚そのものが一つの形式、古典的とも呼べる形式を持つ魚なのだ。私はその形式に対し、自分の気質に合う対処をする。その全体が一つの型になるのだ。それは具体的には、魚の大きさと釣具のパワーとのバランスということでもある。

私は、ドラードと自分との闘いを音楽のソナタ形式のように感じている。こんなことは説明するとキザかもしれないが、実感なので一応書きとめておこう。

ソナタは冒頭にまず正主題が提示され、副主題がそれに続く。展開部に入ると二つの主題が入りまじって変奏され、終曲部で再びもとのように正主題、副主題が鳴り、力強いコーダ（終章）で曲が終る。

ドラードの当り、引き込み、跳躍が正主題である。それは力強い〝ｆ〟フォルテで示される。正主題が一応提示されると釣師の反撃が始まる。それが副主題である。そして、これが肝心な点だが副主題は正主題よりいくらか弱くやさしく演奏されなければならない。それでいながら、正主題を引き立て張り合えるだけの強さ大きさが必要である。

私はだから、直径〇・四〇ミリ（六号）のナイロン糸を使う。この場合、絶対に六号でなければ楽譜にＤｏｌｃｅ（甘く）と指定された副主題のメロディは奏でられないと感じている。

〇・三五ミリ（約五号弱）では弱々しいメロディしか鳴らないし、直径〇・四五ミリ（八号）では副主題が強すぎて正主題の輝きを失わせてしまう。

それから展開部……魚と釣師の必死のやりとり。思いがけないエピソード、転調、〝ｆｆ〟フォルティッシモや〝ｐｐ〟ピアニッシモのからみ合いで展開部が繰り広げられる。

やがて終曲部。魚も釣人もすでに疲れている。しかし、ドラードは決して疲れを表わさない魚だ。最初の鈎かかりとまったく同じように華麗な跳躍、引き込み、反

転が提示される。
　それに応えて釣師は副主題を奏でる。最初とまったく同じメロディだが作曲家は注意深く四度か五度高く移調し、曲全体を高揚させ引きしめる効果を与えている。釣師も今はドラッグを締め糸の張りを高め、最初の副主題の提示には見せなかった荒々しさを加えて強引なポンピングを開始する。そのままコーダに流れ込み息づまるランディングで曲が終る……。
　魚をストリンガーにかけ、竿をカヌーに横たえて、ほっとして額の汗をぬぐいタバコに火をつけると、私の心にも河面（かわも）にもまだ演奏のあとの余韻（よいん）が鳴り響いているようだ。
　ソナタといってもさほど大がかりなシンホニーではない。カヌーに乗った一人の男と一匹の魚とのやりとりなのだ。例えてみれば、クーラウの「ピアノの為のソナチネ」のような素朴だがグラシオーゾ（喜ばしい）な曲なのだ。決して技巧的ではないが、あきないメロディなのだ。
　水が浸み込んだカヌーの底には、毀（こわ）れたプラグがいくつも浮いている。私はクーヤ（半割りにしたヤシの殻）をとって水をかいだす。
　森がざわめいている。私は生物に囲まれていることを知る。安らいだ、充足した気持ちになってボンヤリと坐っている。河面の赤が濃くなって、遡上するドラードが背を現わして泳いでいる。手を延ばせば背をなでら

れるほど近くを泳ぐこともある。メヌエットのように優美な夕暮れの光が河面に満ちる。

もう私の出番ではない。竿を持ったまま河を眺める。上流からモーターの爆音が聞こえてくる。土地の友人が迎えに来てくれたのだろう。

（第一部　了）

第二部　サンパウロ州の釣り

第一章　パラナ河

大物の話

サンパウロ州はブラジルで最も拓けた州であり、人口密度も生活程度も高い。したがって人類の自然に対する犯罪……工場汚水、農薬散布などの公害も進んでいて、釣師にとっては魅力の乏しい州である。

しかし、現在サンパウロ市に住む私にとっては、いや応なく州内での釣りが主となる。サンパウロ州はほぼ日本の本州と同じ面積をもつから、週末の二日だけでは州外へ釣りに行くのは不可能だ。

マットグロッソ州やアマゾナス州での釣りの旅を終えて、サンパウロ市に戻り、釣具の補給に釣具店へ行くと、店の奥で常連らしい釣りキチたちが熱心に両手を広げあったり、重いビクを持ち上げるゼスチュアをしているのが見える。

大体、サンパウロ市はイタリヤ系が多い。イタリヤ人の会話のゼスチュアの賑やかなことは世界一との定評がある。「船が沈んだとき、泳ぎを知らない二人のイタリヤ人だけが助かった」という小話があるくらいだ。どうして岸へ泳ぎついたか人々が不思議がると、二人は「おれたちは議論していただけだがね」と答えたそうだ。イタリヤ人が議論したらそのゼスチュアはまるで水泳でもしているようである。

……そういう連中が三、四人、店の奥で両手を広げて

いるのは壮観である。その見馴れた情景を眺めると、
「ああ、釣れない所へ戻って来たんだ」という実感がこみ上げる。
森の住人たちは、大物を釣った話などあまりしなかった。ましてや、釣った魚の大きさを相手に納得させようとして両手を広げるバカはいなかった。
ダイヤ掘りの親方に増田さんと共に釣況を訊ねたとき、
「今は乾期で水が少ないからペイシェ・ミウド（細かい魚）しかいないよ」
と気の毒そうに答えたのだった。
よく聞いてみるとドラードも親方の言う「こまかい魚」に入っていて、私たちは呆れて顔を見合わせたものだった。
アマゾン河の支流のタパジョス河の最上流部テレスピレス河の住人に釣況を訊ねたときもそうだった。その男は、
「大きな魚も釣った」
と言って、両手をほぼ肩幅に広げたのだった。
「小さな魚」
と言って二本の人差指を顔の幅よりやや狭く広げた。
（ずいぶん小さい魚だ）
と私は思ったが、すぐ気がついた。彼は一種の縮尺法を用いて表現しているのだった。その縮尺は約四分の一か五分の一だと思える。そのテレスピレス河には二

メートルになるピライバという銀色の大ナマズが棲んでいるのだ。二メートルの魚を釣った話をするたびに両手を広げていたら肩の関節が外れてしまうだろう。それに、お化けを見たわけではなく、たかが魚を釣ったくらいで昂奮して両手を広げる気にはなれないのだ。魚ならいくらでも釣れるのだから。してみると、『釣れない所に住む人ほど、大物を釣った話をしたがる』

という定義が成立するのではないか。

しかし、大物を釣った話はやはり聞いていて面白い。私は小説を書くことを主な仕事としているので取材によく行くが、取材が終ったあと酒でも飲みながら土地の釣人からそんな話を聞くのを楽しみにしている。

魚をたくさん獲った話は産卵期に多い。産卵期の遡上現象をピラセーマと呼び、私も目撃したことがあるが、急瀬を跳ねながらのぼる魚群は壮観そのものだった。

場所によってはフルイなどですくえる。魚をすくってトラックにどんどん投げ上げたが、積みすぎてタイヤがぺちゃんこになったので、今度は河へどんどん投げ降した、などという眉つばの話もある。

絶対に本当だと念を押されて聞かされた話は、パラナイバ河でそんな時期に投網をうったら、網が開きすぎると案内人におこられたそうだ。重くて網があがら

ないからだ。
大ナマズのピライバを掛けて、どうしても揚がらないので馬に曳かせたという話も聞いたが、多分本当だろうと思う。五十キロくらいのナマズでも砂浜などで足場が悪いと、三人くらいの大人がズルズル引かれるものだ。
私はここ数年、サンパウロ人文科学研究所の研究員の仕事もして、移民史関係のことを調べているのだが、或る日、研究室で資料をひっくり返していると、主任の斎藤教授のところに来客があった。
地方の日本人会代表者が講演を依頼に来たのだった。
斎藤さんは忙しいので渋っていたが、
「講演は二時間くらいで済ましていただいて、あとはゆっくり釣場へ御案内しようと、まあこんな風に考えております。何しろ、釣れて、釣れて、釣れて」
と、チラッと代表者がほのめかしたので、たちまち斎藤さんの腰が浮いた。
「ほう、釣れますか」
無理に無関心をよそおって彼が質問すると、代表者もまけずに朴訥（ぼくとつ）を装って、
「私どもの所ではあまり釣れるので、鈎がエスケンタ（加熱）しますです。ハイ」
と言った。
「……」
二の句がつげないでいると、隣の入植地の代表者が

負けじと、
「いや先生、私どもの所では鈎が熱くなるくらいでは済みませんぞ」
と割り込んだ。
「というと？」
「とにかく魚がウヨウヨしとりますからねえ。エサをつけるとき川の方を向いていると、鈎につける前にとられてしまいます。後をむいて魚にみつからぬようにつけるです」
と吹いた。
私たちは大笑いしたが、結局、斎藤さんは講演旅行に引っぱり出されたのだった(あとで聞いたら、あまり釣れなかったと苦笑していた)。

私が聞いたうちで、正真正銘の大きな話は、川上さんという人に関するものである。
彼は農閑期に州境のパラナ河へ釣りに行くのを楽しみにしているが、トラックに奥さんや塩や米などの生活必需品一切を積み込んで出発する。
釣り場に着くとテントを張ってから、まわりの土を耕して野菜のタネをまくそうだ。生えてきた野菜を食いながら延々と釣りをするのだ。
気宇壮大だが、どことなく可笑しみもある。農耕民族的な発想で狩猟をするところが可笑しいのだろうか。いずれにしても文句なしに大きな話だと思う。

ところで、その川上さんが釣りに行くパラナ河だが、サンパウロ州とマットグロッソ州の州境を形成していて、河幅二キロ余の堂々たる大河である(下流でパラグアイ河と合流してラプラタ河を形成する)。河が大きいから、ダムで寸断されてはいるが、サンパウロ州第一の釣場の地位はゆるがない。

パラグアイ河と同系の河で、棲む魚の種類も同じでありながら、その勢力関係はずいぶんとちがう点が興味深い。ドラードやピラピタンガのような野性的な食肉魚は少なく、植物食や雑食性の魚が多い。パクー、ピヤパーラ、クリンバタなどである。人里植物に例えるならば、これらの魚たちは人里魚類とでも言おうか、割合に人里の近くにでも棲める魚たちなのだ。ピラニヤも少ない(近年、ダムのために増えだした)。

これらの人里魚類の中で人気抜群なのは「ピヤパーラ」である。

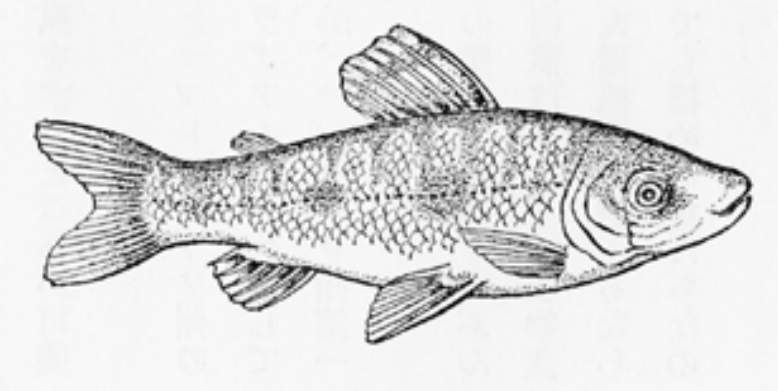
当りが繊細なこと、鈎がかりしてからの引きが上品で強いこと、美味なこと、と三拍子揃った申し分のない魚なので、技巧派の釣師を夢中にさせる。

私が初めてピヤパーラを専門に狙ったのは、数年前に河合さんと二人でパラナ河へ旅をしたときのことだった。そのときのことは釣り日記に詳しく記してある。帰ってきて愉(たの)しさの消えぬうちに書いたので、今読み返すと文章が弾みすぎているような気もす

るが、初めての対象魚にいどむ期待感がでていると思うのでそのまま載せることにする。

ピヤパーラ日記

ピヤパーラPｉａｐａｒａ
普通は五十～七十センチ、七、八キロまで成長し、形はマルタに(大物になると鯉に)似ているが、口は小さく鼠のような歯が並んでいる。雑食性。体側に黒い斑紋が三つ並んでいる。淡水のやや強い流れを好んで棲息し、肉は桃色で美味。



某月某日
人文研の大先輩、河合武夫さんのお誘いを受け、夜行バスでサンパウロを発った。ウルブプンガ発電所があるイリヤ　ソルテーラで思う存分釣りまくろうというのである。逸(はや)る心をウィスキーで押さえ、二人は座席の背にもたれて寝た。チラと薄目をあけて見ると、河合老は二本の竿袋を抱いてねている。果し合いにのぞむ剣客が仮眠しているようで、大いに頼もしい。
<…しかし、魚が果し合いの相手になってくれるだろうか？>という心配がチラと心をかすめる。

某月某日

夜明けにペレイラバレットスに着いた。輪湖（わこ）譲次さんが迎えに来ていた。譲次さんはこの辺の日本人開拓団の指導者であった故俊午郎氏の長男である。河合さんは久闊（きゅうかつ）を叙（じよ）し、私は初対面の挨拶をした。すぐ市街地のお宅へ案内され、我々はソファにくつろいで夜行の疲れを癒（いや）した。今日は月曜日である。輪湖さんは家業の印刷工場の仕事と客人の応対とで忙しい。私たちはここに四、五日、腰を落着ける予定である。

忙しい週日に私たちを呼んだのは輪湖さんの親切である。イリヤソルテーラは釣りの名所なので週末は混む。船が舷を並べ、ポイントに入れないこともある。私たちに心ゆくまで釣らせようとして輪湖さんは月曜に来るように指定した。土曜、日曜に釣人たちがジャンジャンとトウモロコシの撒き餌を投げ込んだあとに、二人だけで行って釣れば少々下手クソでも釣れるだろうと輪湖さんは心を配ってくれた。

その好意に甘えて、河合老と私はこの数日、釣りのことしか考えないことにする。

本当は今日一日休養の予定だが、我々が、ベランダで釣具を広げて、ああでもない、こうでもないと言っているのを見かねて、譲次さんは午後町の近くを流れるチエテ河へ案内してくれた。

「だけど、何も釣れませんよ」

車を運転しながら彼は言った。
「そんなことはない。あの橋の下へ行けば三十キロぐらいのジャウー（ナマズの一種）がガブッと……」
老が興奮すると、
「それは昔の話ですよ」
と譲次さんが苦笑した。
「ほう、今は釣れませんか」
「ダメです。さっぱり魚がいなくなりました」
「どうしたんだろう」
「水が悪くなりました。上流の公害です」
「こんなところでも？」
「ええ」
老は淋しそうな顔をした。
チエテ河はサンパウロ市の中を流れる。そこでは悪臭を放つ死の河だ。六百キロ下流のこの辺では水は一見きれいだが、有害な化学物質はとけたままらしい、と譲次さんは言った。
行手に有名なコンクリートの橋が見える。森を拓いた日本人開拓者たちの自力で架けられ、かつて『チエテの誇り』と呼ばれた百六十メートルの橋は、真中にヒビが入り《危険、通行時に注意セヨ》と立札がある。
「変りましたなあ……」
老は橋のたもとに立って感慨深そうだった。
昭和四年にブラジル拓植組合が四万六千アルケール（約十一万五千町歩）の土地を登記したのが始めで、

かつては香川県の広さがあると言われたチエテ日本人移住地だが、今は畑は姿を消し、ミナス州人が経営する牧場が荒涼と広がっている。集約的農法が得意な日本人農場は雑草一本生やさぬほど手入れをするのが特徴だが、近くに牧場があると雑草の種子が飛んで来て仕事にならない。移住地全盛期は牧場など寄せつけないのだが、地力が減退しはじめると土地を売って移る人が出はじめ、移住地の一画に牧場が現われる。そうすると移住地衰退のスピードは加速され、牧場がどんどん広がり始める。

人は散り、白亜の橋も老いた。橋の上から子供が釣糸を垂れていて、足許に小さなナマズが一匹泥にまみれて転がっていた。

「もう釣れませんか、ここは」

呟きながら、老は河面を眺めている。

私は彼が何を考えているか分かる。ペレイラバレットスの町は、河合さんの奥さんの実家があった。土木技師として知られた彼も、戦争中は逼迫してこの地に自らを幽閉した。第二次大戦の嵐が過ぎて春がくるまで毎日釣りをして暮らしたのである。

……三十数年前にフィルムが廻る。

八月の移住地入植祭の頃、澄み切った冬の陽をあびて、白く輝く橋の上には人だかりがしている。半分くらいは日本人だ。河面に船を浮かべている釣人たちを見

物しているのである。
　釣人たちは舟からの手釣りをしている。十キロ～三十キロくらいのジャウー、ピンタード、スルビンなどのナマズ類を狙っている。大物は、流れが強く底が岩になった深みに集まるが、橋の下がその理想的なポイントなのだ。一キロ近い中通しの大オモリをつけてポイントへ流し込む。魚が大きいから、見物しているだけで面白い。獲物はロープを通してボートの廻りに泳がせてあるから、誰が良い成績か一目で分かる。日曜ごとに釣りコンクールのような光景が展開されていた。
　勿論、若き河合さんの姿もそこに見出されたのだった……。
　橋の下をたくさんの水が流れ、時が過ぎた。
「あの下の方へ行きましょう。でも釣れませんよ」
　譲次さんはまた、念を押す（イヤな感じである）。絶対に釣れないと案内の人に保証された釣場へ我々は行った。青々とした水が一キロメートルほどの幅でゆったり流れている。早速シカケを作り、ミミズをつけて投げ込む。
　なるほど釣れない。ウンともスンともいわない。たまにピクビク竿先がゆれるが、上げてみるまでもなく五、六センチの小魚がエサをつついているのだ。
「なるほど釣れませんな」
　と老は妙な感心をしたが、
「でも、気持ちがいいですな。大いに気持ちがいい」

とノビをして言った。
夕日が地平線に近づいている。雲一つない澄み切った青空に黄昏の気配が迫り、鳥影が二つ三つねぐらへ急ぐ。
「ああ美しい。気持ちが良い」
と私も言った。
これは釣人の常套句である。釣れないと必ず景色をめでるのだ。そのくせ、釣れたら景色などどうでもいい。現金なものだ。
日が落ちて……老と私は、
「ああ、いい景色だ。大いに気持ちがいい」
といいながら車に乗り込んだ。つまり、一匹も釣れなかったのである。

ちょっと川へ出て竿を振っただけでも、腹がへる。奥さんの心尽しの夕食をパクついていると、
「こんばんは」
と声がして中庭の暗がりから一人物が現われた。
童顔でニコニコしているが目付きが鋭い。一芸を極めた人物の目付きだと思った。
＜これは釣りの達人！＞
とピンと来た。陽に焼け方が並々でない。箸をおいておじぎをすると、譲次さんが、
「この人は賢ちゃん。義弟の工藤賢一さんです。ピヤパーラ釣りにかけてはペレイラ広しといえど、この人

の右にでる者はいません」
と紹介した。
果せるかな、人物は釣りの名人であったのである。イリヤ　ソルテーラはピヤパーラ釣りの名所だが、釣人の大半は地元のペレイラの人である。そこの第一人者とすれば、ブラジルでも有数の腕前ということになる。目が鋭いはずである。
「明日からボクが案内します」
人物に声をかけられて、二人はハッと頭を下げた。
「先月、私たちの娘が結婚式をあげたんですが」
と奥さんが言った。
「賢ちゃんは三百人分の刺身を一人で釣ってきたんです」
老と私は顔を見合わせて唖然とするばかりである。
こういう人物と明日から釣りをするのである。私は猛烈にファイトがでてきた。
「奥さん、もう一杯お代り」
茶碗を差しだすと、
「たくさん食べて、たくさん釣ってください」
と奥さんは笑った。

某月某日

五時前に目覚し時計が鳴った。外はまだ暗い。起きて洗顔、歯をみがく。青黒い夜空には星の群がギラギラと輝いている。奥さんがカフェ（コーヒー）を淹れて待っ

ていてくださる。譲次さんもつき合いで起きて、一緒にカフェ。やがて、
「お早ようございます」
という胴間声がして賢ちゃんが入って来た。
「今日もいい天気になります」
坐りながら言う。
その声は渋く、塩辛声で、漁師にこういう声が多いことを私は経験で知っている。波や風の間で生活していると、そんな声になるらしい。アナウンサーのように滑らかな声の漁師などいやしないのだ。我等が師も、声だけですでに釣りのキャリヤの並々でないことが窺（うかが）われる。
「さ、行きましょう」
うながされるまでもなく、二人は釣道具を賢ちゃんの車に積み込む。充分に中古の、大型乗用車の内部には魚の臭いが充満している。魚屋のライトバンのような臭いだ。事に乗っただけで釣りの気分が出る。
町をすぐに抜けでる。空に明るさが現われると、地上には牧場がどこまでも広がっているらしいと分かった。千数百家族の日本人移住者が住んで綿やトウモロコシや大豆を作っていた「チエテ植民地」の面影はどこにもない。
街道のインターチェンジの所に、イリヤ　ソルテーラという標識の白い文字がヘッドライトに照らされて浮き上がった。道の両側はカヤが繁っている。その背景

の空が白んできた。ヘッドライトが消された。行き交う車とてない田舎の道を車はひた走りに走る。風が強いので窓を閉めると、魚の乾いた臭いがプンプンするのだった。

カヤが切れて、東方にはるかな丘が眺められる。黄色く染っている。釣人にとっては最も気がせく時刻だ。そんな思いを察したように、賢ちゃんが、

「ピヤパーラは雑食性だから、あまり早朝を狙う必要はないんです。勿論、朝のうちは良く釣れるが、太陽がでて一時間くらいした方がいい」

と説明した。

車はまだ寝静まっているイリヤソルテーラの町を抜けた。発電所関係の人々が住む町だ。

発電所の工事が始まると同時に、図面通りに建設された町だから、実に整然としている。ブラジルには、こんな町があちこちにある。ブラジリヤがその最大の例だが、味がないと不評を買う反面、子供たちはのびのびと育つ。芝生の平原の中にポツンポツンと家を建てたようなもので、町全体が子供にとって安全な遊び場のようだ。

発電所のゲートの前で左折して、五百メートルほどで川岸にでた。洋々と朝のパラナ河が流れている。上流二キロほどに高々とダムが聳(そび)え、水門から二条の水が白く泡立ちながら落下しているのが望見される。開放されている水門が多いほど豊富な水が流れて、釣

りには良いそうだ。
「今日は二つだから、あまり良くない」
と賢ちゃんはわずかに眉をひそめた。
イリヤソルテーラは「孤り島」とでも訳そうか。その地名の由来となった島が水門の下流にポツンと見える。ここの釣況は月が満ちていく方が、欠けていく期間よりも良いとのこと。今日は十一夜で、月廻りは最高だそうだ。船番の男が賢ちゃんの持船を廻してくる。五馬力の船外機をつけ、道具を積み込んで我々は出発した。
水は薄い茶色で流れている。岸に沿って降った。広い河だが魚のつく場所は決まっているそうだ。ピヤパーラのポイントは岸に近く、流速が適当にあり、岩や埋れ木など底に変化のある付近ということらしい。
十五分ほど降って第一のポイントに船をとめた。サンパウロ州側の岸で、岩が水中から露出している下に、流れに直角に両錨でボートをとめた。
露出した岩の所が急瀬になっていて、その下流が四、五メートルの水深になっている。河幅は三キロくらいあろうか、眺めているだけでも惚れぼれとする釣場である。
昨夜教わった仕掛けを早速つくる。穂先の柔らかい片手投げのリール竿に四号くらいのみち糸を使い、中通しナツメオモリをヨリモドシでとめる。ハリスは三号を三十センチくらいで袖型の十二号くらいの鈎を結ぶ。あたりの景色も素晴らしいのだが、こういうときは

景色が目に入らない。ただ全身で朝のすがすがしさを感じているだけである。

エサはこの辺でミニョッカ・スーと呼ぶ大ミミズである。エンピツくらいの太さで三十センチほどの長さがあり、桃色をしておとなしいミニョッカ(ミミズ)だ。

これは湿地帯に棲み、捕獲するにはまず大穴を掘る必要があるそうだ。ふつうのミミズのように地表を掘り起こしていたのではあまりとれない。「大穴を掘りまして、その壁を崩していくのです。そうするとたくさんとれます」と譲次さんが教えてくれた。

ただ湿地帯で泥んこになって掘るのが大仕事だから、ペレイラあたりでは専門に掘る人がいて、一リットルの空カンに一杯二十クルゼーロで売っているそうだ。今日のエサは、したがって、買ったものである。エサの大ミミズを買うとき、悪い売人から求めるとカンの底に泥がつまっていて、つまり上げ底になっていて損をすると譲次さんは言った。ミミズの売り買いにもいろいろとかけ引きのあるものらしい。普通のキジでもいいが、柔らかすぎて小魚にすぐエサをとられてしまう。ドバミミズだと固すぎて喰いが悪い。ミニョッカ・スーが理想的だそうだ。

大ミミズといえばブラジリヤの辺には一メートルほどの大きなミミズがいるが、これは割に固い土の、草原などに棲んでいる。ブラジリヤの釣りキチがリンス市の釣友の家へ正月に遊びに来て、「何もお土産がないか

ら」と大ミミズを一箱持って来たという話を聞いた。貰った方も有難くおしいただいたそうだ。釣りをしない人が見たら正気の沙汰ではないが、ブラジリヤの大ミミズは十キロ級の大ナマズを釣るには良いエサだ。ナマズ類はミミズが大好物だが、大物用の太い鈎には普通のミミズでは刺すこともできない。

ところで……そのミミズは大きく、鈎は小指の爪ほどにも小さい。どうやって付けるのかと思って師匠の手許をみると、まず頭部を刺し、一回ぐるりと軸に巻いてまた刺す。そうやってミミズを丹念に巻きつけて団子をつくる。三十センチのものを縫いつけるのだから、ちょっとしたズボンのほころびを縫うくらいの手間が要る。出来上がりは鈎がすっかり隠れて糸の先に大きなミミズ団子がぶら下がっているアンバイになっている。手を抜いて、ミミズの一部が途中で垂れていたりすると、そこから喰いちぎられて鈎がかりが悪いそうだ。団子にするにはケン付鈎がひっかかりがあって良い。

エサを付けると三十メートルほど下流へ流し、底へつけ、糸を張って置竿にして待つのである。師匠の説明によると、ピヤパーラは細心な魚なのであまり舟の近くには寄らないそうだ。

一仕事終って、煙草に火を付けてフーッと煙を吐きだす。朝風に乗って紫煙が河面（かわも）をゆるやかに流れ去る。

師匠はニワトリの飼料用のくだいたトウモロコシを三つかみほど撒いた。
と、老と私の竿先が早くもピクピクと揺れている。
二人とも慌てて竿尻をとろうと手を延ばした。その瞬間、
「まだ！」
と師匠の叱咤（しった）が飛んだ。
「まだ竿をとってはダメ！」
「ハイ」
二人とも悪戯（いたずら）を叱られた子供みたいに手をひっこめた。
「魚がエサをつついているのです。そのとき竿を手にとると異状が伝わって、魚は離れてしまう。口が小さいから一口にガブッとはこない」
「なるほど」
また竿先がピクピクする。思わず手が延びる。
「マダッ！　まだ、まだ！」
師匠の声で二人とも手を戻す。
と不意に、竿先がさっきより深くおじぎをした。
「いま！」
と師匠は声をはげました。
二人とも慌ててガタガタと竿をとり、大合わせに合わせた。
「オソイッ！」
と師匠の声。

たしかに何も手応えはなかった。
チョンチョン、ブルブルとひっきりなしに竿先に魚信がある。まだ様子がのみ込めないので、何がなんだか分からないが、とにかくここで合わせても掛からないのである。二人とも数回空振りをした。
岸にはパイネイラの巨木が二本聳えている。もう花は散ってしまったが、ブラジルの風物――牛車や黒人娘――　とパイネイラの花は実に良く調和する。三十メートルほどの高さで思いきり枝を張った巨木も、広い風景にうまく収まる。
そんなことを思っていると、舟の中央に坐っている河合老の竿先がグーと曲がった。
「いまだ！」
師匠の突撃命令がくだる。いいタイミングで老が竿をひったくった。毎朝、水泳と剣道をしているので反射神経は速い。
数十メートル下流の水中で何かが走った。糸がピンと張り、小竿が弓なりになった。
「かかりました」
河合さんは年下の師匠に舟上では敬語を用いる。折目の正しい人なのだ。
私は自分の竿をあげて見物した。中形リールを重そうに巻いている。
「そう、ポンピングをして……。あまり暴れるようだったら少し遊ばせて」

やがて、五メートルほど先の水面を魚の尾がピシャッと叩いた。それから潜った。のぞき込むと、魚影が水中で大きな輪を描きながら抵抗している。ここが正念場だ。船影を認めておびえた魚に糸を切られることが多い。

薄茶色の水面に魚が浮かんだ。あっという間に反転して、また深く潜る。竿は真下に曲がった。

「落着いて、落着いて、……その調子」

老はリールをゆっくりと一巻き、二巻き、魚が再び浮かぶ。師匠のタモがのびる。一瞬早く魚は潜る。

なかなかに弱らない魚だ。傍で見ていてハラハラする。

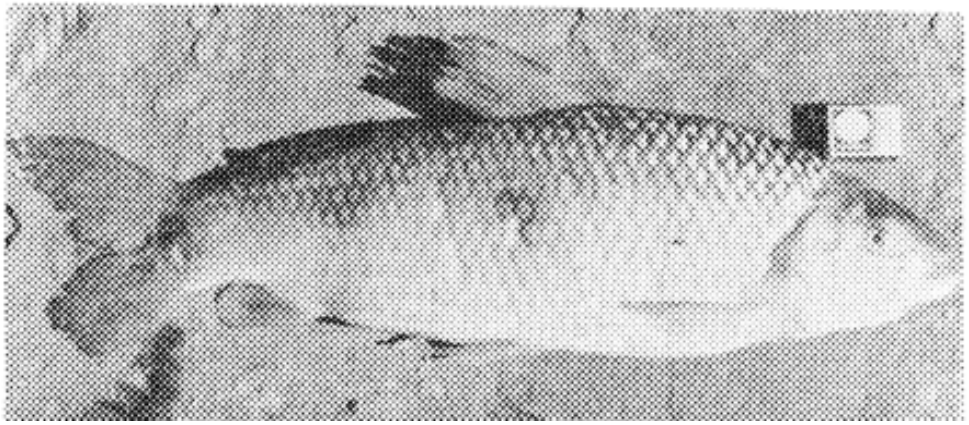
再度魚が浮いた。反転するより早く、タモが一閃した。魚は鮮やかにタモ深く収まった。

水をまき散らしながらドサリと魚がボートに投げ込まれた。二キロくらいある。

「これがピヤパーラ」

二人は感激の面もちでホッと溜息をつきながら、跳ね廻るみごとな魚体を眺めた。この魚を釣るためにはるばるとやって来たのだ。

背は青緑色をしていて、腹部は白い。横に黒っぽい丸斑が三つ並



んでいる。小さな円口がやや下むきについていて、鼠のような歯がのぞいている。全体の感じはほっそりした鯉のようである。

「やりましたねえ」

「やりました」

彼は嬉しそうに破顔一笑した。

感心して眺めているうちに、私の竿も深めに曲がった。急いで竿をとると、うまく魚がとまったらしい。小気味よく引きまくる感覚が竿から手許に伝わる。三号のハリスでどの程度の力でリールを巻いて良いのか、初めてなので分からない。やや慎重な取り込みをする。

近くまでは割に楽に寄る。舟のそばで急に馬鹿力を発揮する魚だと分かった。だからあまり急いで寄せると舟の下へ駆け込まれて都合が悪い。そう気がついたけれど後の祭り。仕方がないのでやや強引に水面へ魚の口をだした。そこを師匠のタモがサッとすくう。私の方が小さいが、とにかくカタを見たので満足である。

魚をビクに入れてから、マホウビンの熱いコーヒーをコップに注いで飲む。実に旨い。温かさが体にしみわたった。熱い地方でも、早朝に川にでていると体が冷えているらしい。ビクをあげて、もう一度魚を眺める。自分が釣った魚と、魚屋に並んでいる魚とはちがうのだ。釣りあげたときのこの満足感はどこからくるのだろう？　不思議なほどの満足である。

原始的な本能であるとしか言いようがない。

気がつくとあたりには三々五々、船影が散っている。週日だからそれほど多くない。週末になるとここらにはギッシリと舟が並び、舷を接して釣技を競い合うとのことである。大半が地元のペレイラの人で、しかも日系人が多い。その中で、ペレイラのケンといえば一般ブラジル人、日系人を問わず皆が一目置くとのことだ。

その、我らが師匠はポイントを弟子二人にゆずって、自分はジャマにならぬようにポイントを外して沖目へ投げているので出足が遅い。

そのうちに師匠の竿がピクッと動いた。やがて重々しく引いた瞬間、手は竿をとっている。むしろ竿が手に吸い寄せられた感じで鮮やかだった。魚が掛かっている。グイグイ寄せてポンとゴボウ抜き。傍で見ていると呆気（あっけ）ないくらいだった。

そのうちに、師匠の変った技を見ることができた。竿先に異状が伝わると、そっと竿をとって胸に抱くのだった。斜めに竿を抱いているから、横にした頬に竿が当っている。ケンカデイリを前にした平手酒造（ひらてみき）が刀を抱いているようである。目を閉じて、竿から伝わる聴覚と頬に当てる竿の動きだけだ。グッと竿先が引かれた刑部（せつな）、右手が横に突き出される。居合いの逆抜きのようである。百発百中かかる。

私も早速真似てみた。当りのタイミングはつかめなかったが、面白いことが分かった。河底にいるのはピヤパーラばかりではない。ダボハゼのような小魚も盛ん

にエサをつつく。竿先のピクピクは同じようなものだった。ところが竿に耳を当てると、小魚の魚信はコトコトと聞こえる。ピヤパーラのように大きい魚はゴツンゴツンと重い響きだった。

何十メートルもの糸が聴診器、もしくは電話ゴッコの糸のような微妙な働きをして、エサをつついている魚の大きさをハッキリ伝えてくれるのだった。

釣用語に「聴いてみる」というのがある。これは魚が居喰いをしているような気がしたら、竿先をソーッと上げてみる動作を言うのだが、賢ちゃんのは文字通り〝聴く〟のである。こんな釣技をみたのは初めてだった。

ドラードの釣法にエサの小ナマズがグーグー鳴いているかどうか、糸を耳に当てて聴くやり方がある。

師匠のやり方は、しかし、馴れないと合わせのタイミングが分からないので、私は再び置竿にした。手釣りにしてみち糸の末端に聴診器のようなものをつけたら、もっとハッキリ分かるかもしれないなどと思った。

水中の物音を聴く方法で私がマスターしたのは、海で岩根を探す方法である。これは漁師に教わったが、マスターしたなどと威張るほどでもない簡単な方法である。

櫂を垂直に水中に突き込んで、末端を耳に当てるだけだ。岩根の真上に舟がいると、ザワザワ、ピチュピ

チュ、サワサワというような雑音がハッキリ聞こえる。岩に当る潮流や生物たちの生活音らしい。砂底の上では音というほどの音はしない。私が試みたのはせいぜい十メートル程度の沿岸だから、どの程度の水深までこの方法が有効なのかは分からないが、櫂の木質を通して水底のあの爽やかなざわめきを聴くと、いかにも魚たちが餌をあさっている場所の真上にいるという気分になっていいものである。

水中での採餌行動は音に頼る比率が大きいそうだから、我々ももっと釣りの音に関心を持っていいかもしれない。

某月某日

花火の好きな秋の川
茜のすきな川の魚　　惣之助

今日も一日中、ピヤパーラ釣りを楽しんだ。この魚は微妙で豪快な釣り味を持っている。

パラナ河に舟を浮かべる釣人の大半がこの魚のファンなのもうなずけるのだった。昨日帰って刺身を食べたが素晴らしく旨かった。マグロの刺身など一人前食うだけだが、昨夜は大皿に山盛りを一人で平らげた。

ピヤパーラ釣りは掛けるまでが大変で、置竿で喰い込みを待つ方法を昨日は習ったが、今日は手持ちにし

て小突きながら積極的に誘う方法を習った。水底のオモリをフワーッと浮かせて、糸を二十センチほどくれてやってストンと底につくときに喰う。その当りが分かりにくいが、馴れるとこの方が数は釣れるそうだ。合わせは肘から穂先まで一直線にする感じでしゃくる。手首のスナップを利かせて合わせると、反動で穂先がブレる。その一瞬に魚は口を離してしまうそうだ。

掛けるまでも技術が要るが、掛けてからの引きがすばらしい。上品であきがこない引き込みをする。柔らかく女性的な引きのくせに力強くねばっこい。スピードも充分にある。賢ちゃんたちは他の魚は見むきもせずに、惚れた女に通うようにピヤパーラ釣りに通っているが、その気持ちもよく分かるのだった。

思うに、胴で引く感じの魚はあきないようだ。頭の力の強い鋭角的な引き込みをする魚は、スリルはあるが入れ喰いにでもなるとあきてしまう。大型の黒鯛なども、どちらかというと、頭の力が強い印象で、処女磯にあがって三キロクラス以上の入れ喰いに逢うと（そんなことは滅多にないが）あきてくる。しかし、マルタとかピヤパーラなどの引きはあきが来ないような気がする。

今日は賢ちゃんが屠殺場から牛の血を石油カン一杯貰って来たので、砕きトウモロコシに血をまぜて撒いた。これは非常に集魚効果がある。細心なピヤパーラが昨日よりずっと近くに寄っている。

ブラジルは日本と反対で、海釣りにコマセを使用する習慣はあまりないが、淡水には多量のコマセをかぶせる。俵にトウモロコシを入れて沈めておいたりするくらい熱心にコマせる。大河が多いので必然的にコマセの必要が生じたのだろう。河幅が数キロもあるところで、河底にもさしたる変化がなければコマセで集めないと釣りにならない。

釣りをしていると時間がたつのが早い。大体の感じはつかめたが、上達したとも思えぬうちに今日も暮れた。

空が茜（あかね）に染った。

「もう上がりましょう」

師匠の声で我々は納竿した。ダムの水門が閉じられて、タービンを通った水だけで、水量が少なくピヤパーラ釣りには不向きの日だったそうだが、ビクはずっしりと重い。

我々は魚臭い車に乗り、ペレイラ目指して帰路についた。今朝と同じように空は赤々と燃えている。カー・カセットから東海林（しょうじ）太郎の歌声が流れた。

男心に男が惚れて……

あの人はブラジルに二度来たことがある。ブラジルが好きな人だった。二度目に来たとき、縁があって一緒に旅をした。ウイスキーを飲みながら、ちょうどこんな風景の中をススキを眺めながら車で走った。

一度目に来たときの想い出話をしてくれた。第二次

大戦後まもなくで、まだ日本との交流も少なく、移民たちが各地で熱狂的に歓迎してくれたそうだ。三味線豊吉や小唄勝太郎たちと各地を廻ったが、乗用車とてなくトラックでガタガタの田舎道を走ったそうだ。歓迎野球大会などもあり、東海林さんはセンターを守ったが可愛い犬が迷い込んで来たのでその犬と遊んでいて、平凡なフライをホームランにしてしまったそうだ。最近の歌手がブラジルに二泊くらいのスケジュールであわただしくジェット機でUターンするのを思うと、やはり隔世の感がある。

田舎町のステージが終り、したたかに酒を飲み、エナメルの舞台靴を泥だらけにしてコーヒー園の径を歩いてふらふらホテルへ戻ったこともあったそうだ。

「泥酔ですね」

と私が言ったら、

「うまい」

とほめてくれた。

……そんな話をしたのは、ちょうどこんな景色を眺めながらだったからだ。

あたりはだんだん暮れていった。明日、午前中だけピヤパーラ釣りをして帰る予定だった。

（ピヤパーラ日記　終り）

大ミミズの話

賢ちゃんの許（もと）で腕を磨いた翌年、そこから三百キロほど下流の、やはり有名なベルデ河合流点の釣場で第一人者の名の高い川崎さんに教えを乞いにいった。

川崎さんはドラセーナという町でオメガの代理店をしているだけあって、用心棒スタイルの賢ちゃんと対蹠的にソフィスティケーテッドな釣りをする。まず道具にうるさい。竿は自分で改造し、置竿の特殊な台もつくる。賢ちゃんが腕で釣る釣師で、川崎さんは道具で釣る釣師だ。勿論、道具だけではピヤパーラは釣れず、腕の方も凄いが。喰い渋ったときのピヤパーラはオモリが重いともう喰わない。三、四十メートル糸を繰りだしてやっと底につくくらいのオモリを水深と水流によって選ぶのだが、初めのうちはタチがどうしても分からない。草の葉が一枚ひっかかったくらいの感じがあって、その一瞬をのがすともう糸だけが流れに持っていかれてしまう。

一般の釣人と川崎さんの釣果は、一匹と十五匹くらい差があるのだった。

この辺には大ミミズは棲んでいないので、エサは牛の心臓とかタニシなどを使っている。

そのほかトウモロコシも使う。キジミミズは小魚の

エサとりが少ないときは有効なエサである。

釣り日記にも少し記してあるが、ブラジリヤの大ミミズは親指くらいの太さがある。引っ張ると細くなって延びるが両手一杯に延ばしてもちぎれない。さほど固くはない。おとなしいミミズである。

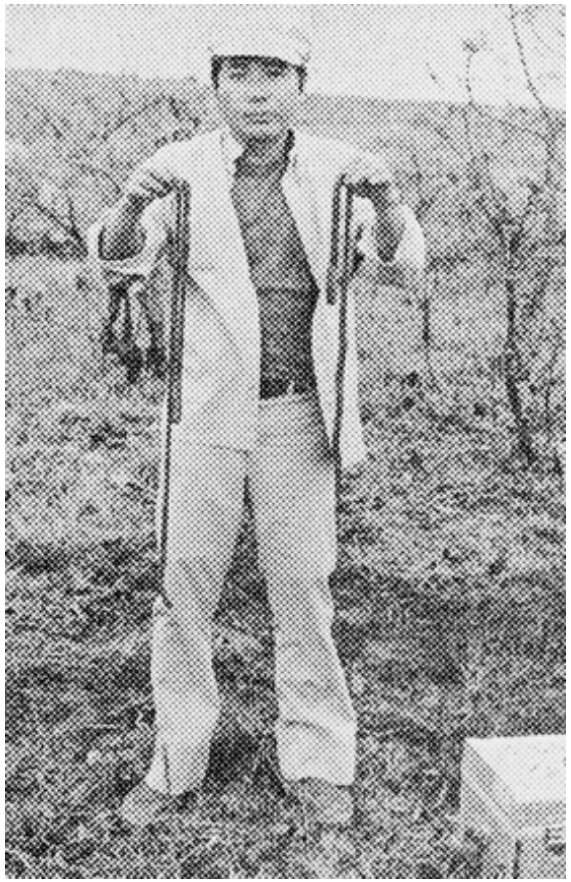
地下に一匹ずつ棲み、群棲はしない。地表の穴の工合で見当をつけて掘ると、三十センチくらいの深さにいる。あまり先の鋭くない鍬（くわ）でミミズに傷をつけないように丁寧に掘る。

なぜかブラジリヤの大ミミズが有名だが、大ミミズ（ミニョッコン）はほぼブラジル全土に分布していると思える。ただし、ずいぶんと種類があるようで、盲蛇かと思うようなのもみたし、気味が悪いほどピンクなのも見たことがある。

めったに地表にでないが、雨のあとなどに凄いのが地表を這っていたりする。釣りに行くときだと、勿論、大喜びでつかまえるが、普段はいじる気になれない。

ブラジルでは大ミミズが暴れて地震を起こすと信じられている。

例えは、サンパウロ州イタピチニンガ



町に古い言い伝えがある。
『今世紀の初めにイタピチニンガに住んでいた僧が断言したことだが、「今のように人々が振舞い、酒を飲んだり賭事にふけったりして放縦な生活を送っていたら、一匹の大きなミミズ　――その頭は本寺の下にあり、胴はガード通りの下にあり、尾がペケタの方向にある――が廃頽者たちへの警告として動くであろう。その動きは地震を呼び、家はくずれ廃頽者たちはその下じきになるであろう」と言った』
　もう一つの出所不明の言い伝え。
『フラビオ・シャヴエル・トレド師が伝えたことだが、あの有名なＮｈｏ Ｑｕｉｍ Ｇａｎｃｈｏノー・キム・ガンショの地では大ミミズが動き、茶の川の窪地に大きな亀裂が生じたので、多くの人が大ミミズを怖がってロザリオを手にして祈った、と』
〝ノー・キム・ガンショ〟という地名は知らないが、茶の川などとあるので東洋の地名のようにも思える。ジェスイット僧が南米や東洋を行き来していた時代の言い伝えであろうか。
　今はサンパウロ市やリオ市の都内高架道路を、そのウネウネした形の連想から「ミニョッコン」と呼ぶのだが、アパート住まいの主婦などがテレビの社会番組で「大ミミズのせいでやかましくて、夜も寝られない。トラックが通るとベッドまで揺れるのだ」などとうったえているのを見ると、大ミミズの伝説もあながち嘘で

もなかったような気もする。
ブラジリヤの大ミミズは冬は活動が鈍るが、体に白い脂肪をいっぱいためている。脂ぎったミミズというのは、普通のキジミミズで気づいたことがない。

第二章　汽水帯にて

釣り初めの頃

サンパウロ州は海に沿って、八百メートルほどの高さの海岸山脈が走っている。海岸山脈の内側に源を持つ川はどんな小川でも、延々とパラナ河に注ぎアルゼンチンまで流れて行かないと海にでない。それに反し、海岸側の川はストンと海に落ち込んでしまうから、さしたる大河はない。全長や水量が利根川とほぼ等しいリベイラ河が最大の河である。

それらの河の河口付近は標高一～三メートルの低湿地帯であることが多く、マングローブ林の発達した中を水路が縦横に走る汽水帯である。海底が隆起したのか、川からの泥で埋まったのかは正確に知らないが、地質学的には比較的新しく形成されたもののようである。

横浜という港町で生まれ育ったために、幼時からやみくもに外国に憧れた私は、学校を卒（お）えるとすぐ日本を飛びだしたのだったが、十年たったとき不意に文章が書きたくなった。異国体験が続くと、心の底に文章で整理したいものが沈澱するのだった。ブラジルの日系人の間で、俳句、短歌、随筆、詩、小説などの文芸が盛んなのもそのためなのだ。

私は忙しい都会生活を整理して（ちょっとした事業家になりつつあったのだった）、アナジアスという海岸から五キロ入った土地の日語学校の教師となった。文章を書いた経験のなかった私は、文章とは静かな所で

書くものだ、と決めこんでいたからだった。
アナジアスは山に三方を囲まれた小さな平野で、海に近いだけでなく川も池もあった。教師は私一人だった。平野はバナナ畑で埋まり、緑色一面の静かな村だった。
赴任した翌晩、前任者の阿部松先生がゴム長をボタボタさせてやって来た。先生は近くでトマト作りを始めたのだった。
「ここでは釣りでもしなければ、他にすることはありませんよ」
と言って夜釣りに誘われた。私用の竹竿もミミズも用意してくれた。
その夜、学校の裏の小川で私はトライーラとナマズを釣り上げた。阿部松先生は鈎を外してくれた上に、
「なかなか筋がいい」
とほめてくれた。
ほめられたのが凄く利いて、私は魚釣りに夢中になった。岩を噛む激流から、中流、下流、河口、磯……と手近になんでも揃っていて、ここに住む二年はどの間に入門書を頼りに最上流の毛鈎釣りから荒磯のクエまで一通りマスターできたのだった。竿やリールはすべて自製し、どこでも竿をかついで歩いて行った。現場に住む利点は、釣り技術の上達よりも、自然の変化と釣況の関係が体に叩き込まれる事だろう、と今になって思う。魚がエサを求めている条件のとき竿をだせば、道

具や釣技は二の次で釣れるのだった。
バナナは一種の油を消毒用に散布する程度で、農薬をほとんど使わないで済む植物だから、平野一帯の自然も自然そのものの濃密さだった。ハチの子、青蛙、野生の果物の中の蛆、大アリの幼虫など贅沢なエサがいくらでも使えた。ハチの巣は日語学校の裏側の軒下に三十近くも並んでいて、落としても次々に巣をつくるから私一人では使いきれなかった。巣をとると真中辺のフタだけ破って窓辺へ置いておくと、翅（はね）の生えたやつはモゾモゾ這いだして飛び立つ。
淡水の場合、白くて柔らかいものは大概よい餌なのだが、ハチの子はこの条件にピッタリで雑食性の魚が飛びついてくる。特に清流では効果が顕著だった。
ブラジルのバナナ園主の大半は日系人である。昔はポルトガル王家の血をひいた貴族などが広大なバナナ園を経営していたのだったが、果物が市場に豊富に出廻るようになると、粗放栽培の野生に近いバナナは見栄えが悪くて売れなくなった。バナナが曲がっているのは直しようがないが、太くて艶がよくないと売れないのだ。資本がないから小面積でコツコツやっていた日本人のバナナだけが売れるようになった。したがって、現在のバナナ園は三人くらいの雇人を使う小規模なものが園主の目が届き、経営的には最も安定している。
かつてのブラジル農業は、コーヒー園などに代表さ

れるように、大農場主と労働者にハッキリと分かれていたから、その伝統が今だに尾を引いて自作農タイプの小農園主層が少ない。それでバナナも外国移民である日系人(主として沖縄県人)が中心的な栽培者となっているのだ。

アナジアスでもバナナ園主たちの九十パーセントは日系人だった。ブラジル人はその使用人たちだった。一年作物で今年は何で当てようかと目の色を変える地方とちがい、バナナは永年作物だから村人たちはおっとりして親切だったが、その反面保守的で、日本の戦前の農村の気風を濃厚に保っていた。釣りなどは老人か病人のするもので、一人前の男が釣りをするのは怠け者である、と村人たちは考えているような節があった。

そのせいか、アナジアスでの釣り仲間は日系人もブラジル人も貧しい人々ばかりだった。主流のバナナ作りの人はいなかった。野菜作りの人々ばかりだった。暑すぎて野菜は有利な作物ではなかったが、借地だと永年作物のバナナ栽培ができないのだ。ついでに言えば、日語教師の身分も、村では一応のインテリだが経済的には落後者の職業と、移民社会の相場が決まっているのだった。

二、三人でロウソクを点して草やぶに並んでの夜釣りの話題は、だから決して景気のいい話はでないのだった。そのかわり欲のかけらもない人々で、熱帯に近

い海岸部の気候のせいか暗さはみじんもなかった。ブラジル人の釣り仲間（ほとんどは黒人だったが）もそうだった。

私と阿部松先生のほかに、蜂須賀さんという人がトリオで一緒によく釣りをした。ヒマかげんが三人ともつりあっていたせいだと思う。蜂須賀さんは無類の善人だが、何をやってもうまく行かず、その頃は町へ行商に行ったりしていた。エビス様のような顔の小柄な人だった。

私の竹竿が折れたとき、蜂須賀さんは、

「先生、直してあげますよ」

と言って〝万能ハンダ〟なるものを持ちだした。竹竿をハンダづけできるわけがないと私が言うと、

「いや、それがつくです。新製品です」

と自慢した。

彼の家の暗いランプの下で、蜂須賀さんが道具箱から出したものを見ると、厚紙が巻いてあって一端に白い金属棒が露出している。彼がそれを薪の火であぶると金属はボーボーと燃えだした。

「あっ、燃えた！」

私が叫ぶと、

「いや、燃えてもかまわないんです」

と炎を吹き消して、手早く竿の折れたところに塗り込んだ。

「ほら、もうつきました」

渡された竿をみると、ちゃんとついている。しかし、竹竿をハンダでつけることにこだわっているので、〝万能ハンダ〟を見せてもらうと、いやにフワフワと軽いのだった。

「そこが新製品です。最近の製品は何でも軽くなってます。うちの割れた丼もつけたし、靴底も直しました」

と蜂須賀さんは答えた。

どこで買ったのかと訊ねると、町で男に売りつけられたと言った。

ますます怪しいので、ライターの火を金属棒に近づけると、それは金属らしからぬ軽薄さで、融け、燃え始めるのだった。あまつさえ、ポタポタと滴が落ちた。

(まるで松ヤニが燃えるみたいだ)

と思ってから、アッと気がついて、火を吹き消して、厚紙をはがしながら、

「蜂須賀さん。これは松ヤニに銀粉をまぜてとかして、型に入れて固めて金属みたいに見せたインチキですよ。紙に包んであるからちょっとごまかせるけど」

と言うと、

「さすがに先生。よく分かりますなあ」

と感心したが、

「でも、よくつきますよ、これは。一本あげましょう」

と言ったのだった。

全然反省した様子がないので、何に使ってもいいが、丼だけは危いから使わないようにとクドクドと私は念

を押した。

ここでは手長エビの夜釣りも味わいがあった。なるべく柔らかい小竿――竹の枝の方がいい――でエサのミミズをたっぷりつけて脈釣りをする。すぐ当りがあるが、エサにかじりついているだけなのでソッと竿を立てる。たいがい水面で手を放してしまうが、エビに水中と空中の区別を感じさせないようなあげ方がコツだった。遅くあげればいいというものでなく、程よいスピードが必要だった。手長エビは空中でキチキチと関節を鳴らす音を微かにさせながら、ロウソクのおぼろな光にきらめいて上がってくる。それをパッと左手でつかむのだ。一発で掌に入らなければ、エビは手を放して草むらに逃げてしまう。水面から手許まで、一、二回ロウソクの光を反射してきらめくだけの透明な小さな物体を、闇の中で百発百中つかむのは非常な熟練で、蜂須賀さんが上手だった。

阿部松先生はしょっちゅう掴みそこねて、

「アリャ、アリャ」

と言いながら草の中を掻きまわすが、まず見つからないのだった。私も似たりよったりだった。それぞれが頑丈な竿を一本、捨て竿にしておいて、大きいナマズが喰いついたりする期待もつないでおく。

エビ釣りはひっきりなしに誰かの竿が上がっているから、草むらに坐り込んでの夜釣りにも一種の賑やか

さがあって、話もはずむのだった。
　ある日、小川を遡って山のすその池まで行ってみた。澄明な水の中を、今まで見たこともない美しい銀色の魚が数匹の群で、ゆっくりと泳いでいた。三十センチくらいあった。私は夢中になってミミズをたらしたが、魚たちは廻りを数回まわっただけで喰いつく様子がなかった。
　それがセイゴとの出逢いだった。
　帰って来て蜂須賀さんに話すと、
「さあて、ロバーロ（フッコ）みたいじゃがそんな上流にいるじゃろか」
　と首をかしげた。
　その日から私は夢中になってセイゴやフッコを追い廻した。だんだんに分かったことだが、雨の後の水の澄み口には上流まで彼等は遡るのだった。エサは手長エビやモエビが良い。学校裏の深んどでも雨で濁ったあとの澄みかけの二日くらいは、セイゴが釣れた。ブラジルのスズキ類は海水と淡水と二種いることも分かった。汽水帯には両種が混棲している。
　海のスズキは一メートル以上に成長し、口吻がやや平たく、口の下がツルツルしている。
　河スズキはせいぜい五十センチまでしか成長せず、体高があり、口吻のうらに細かい鱗がある。初めのうち、私は棲息場所の違いで体型が変るだけで同一種かと思っていたが（両者はよく似ている）、口の下のウロ

コに気づいて違う種類だと分かった。
普通はロバーロとだけ呼んでいるが、リベイラ河の住民は海スズキをロバーロ、河スズキをカンブリアペーバと呼び分けている。

スズキ（フッコ）

生徒が少ないので日語学校の経営は苦しかった。日本人会が先生に給料を払うシステムなので、父兄以外の会員に負担がかかり過ぎた。ペロンの死後、アルゼンチン経済が不況でペソが下落し続け、アルゼンチン向け輸出に頼っていたアナジアスの人々は打撃を受けていた。

私は父兄会の人々と話し合って、一時、日語学校を閉鎖することにした。隣国の独裁者の死が、無名の日語教師の生活まで動かしたのだった。平和な眠ったような村だが、国際政治と無縁には生きられないのだった。

二年間の牧歌的な生活があまりに居心地良かったので、都会がなつかしい気が少しはあったが、まだサンパウロ市へ戻る決心はつかなかった。依然として、文章を書くのは静かな所が良いと思っていた。幸いに、日系社会にあった四つの文学賞を全部貰ったので、将来のことはともかくとして、もう数年は書くことを主にした生活を続けたかった。それから先のことは分からな

かったが、現在成功している移民たちも元々は無一文から出発したのだし、私も書くという変な情熱にとりつかれる直前は事業らしいものに一応成功していたので、書きたいものを書いたら再出発すればいいと先のことは楽観していた。

学校を辞めた私は二ヵ月分の退職金を持って、アナジアスから三十キロ離れたイタニヤエンという海辺の小さな町へ移った。そこは町こそ小さいが、定年退職した人やサンパウロ市からの海水浴客たちで賑わって活気があった。そこで私は無謀にも河漁師となって、フッコを魚屋に卸して親子三人の生計を立てることにしたのだった。ここの職漁師は海ばかりで河漁師はいなかった。ブラジル人もスズキは珍重し、高価だった。一日五キロ釣れば生活できる計算だった。しかし、いざ始めてみると、コンスタントに五キロの釣果をあげるのは大変だった。河口のスズキは『朝まずめ』しか釣果があがらない。潮が悪い日は一匹しか釣れなくても、魚屋へ持って行った。魚屋の肥った親父が面倒くさそうに計りにかけ、濡れた手で一枚の紙幣をくれると、その札がまるで屈辱のように私の掌に張りつくのだった。

しかし、釣りたてのフッコはすぐに売れた。魚屋の親父が一度も文句を言わなかったのはそのためだろう。たなに並べても、銀色に輝き目が真黒に光っていた。目がどんよりと白濁しかけた他の魚と見較べて、私はい

つも満足しながら魚屋の店先をでて、その足でパンと牛乳を買って帰るのだった。

イタニヤエンに移ったときは雨期で、濁った河は増水し、釣りにならなかった。私は中古のカヌーを買い、櫂を自製し、エサのエビの生簀を作り、いろいろな準備をした。

買ったカヌーは小さな独り用で、文字通り独木（まるき）舟だったが、底が偏平でツルリとして上流用だった。激流を横切るには舟底に水流をうけず水すましのように方向転換が自在だが、方向性がないので広い河には不向きだった。それで舟尾に一本の突出した筋をつけた。あまり筋が高いと真っ直ぐには進むが、方向転換性が悪くなる。漕いだ櫂を水から上げる寸前にちょっとヒネリを与えると、その方向にスーと曲がってくれるくらいが良いのだった。

町はクリスマスの飾りが賑やかだった。釣りができないので毎日カヌーを漕いで過した。

水車のように一点でクルクル廻れるようになったし、岸の寸前まで全速で近づきUターンできるようにもなった。馴れると歩くよりははるかに楽だった。舟底に少しでもザラザラがあると、滑り方が悪くなるのも気づくようになった。ツルツルに磨き上げてタールを塗っておくのだった。

エサのエビは大潮の朝、アミですくうのだった。草の

根に隠れていた川エビが、水が引くので岸辺に並んでいるのだが、河口近くの河岸は太腿まで入る微細なドロで、大変な仕事だった。その上、大潮の朝はブヨ類の活動が活発なので、たまらないカユさと闘かわなければならなかった。

私は河に画した小さな家を借りたが、その両隣りは退職した釣り好きのドイツ人とアメリカ人が大きな家に住んでいた。彼等もカユくて悲鳴をあげながら、大潮の朝ごとに泥んこになって自分でエビをとっていた。街からくる釣人用にエビを売っているエサ屋があったが、決してそこから買おうとしなかった。船外機も自分で分解して修理していた。一種の釣師気質のようなものを持っている人々だった。

ドイツ系のワルテル（ウェルテル）は、私の顔をみると、必ず、

「きのうは何匹釣ったか？」と聞く。

「五匹」と答えると、

「そうか。俺は七匹だった」とかならず私より多く言うのだった。

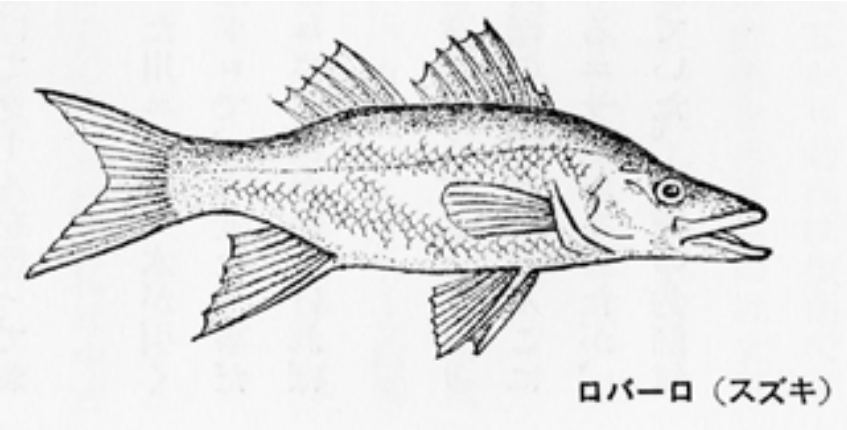
彼が「一匹しか釣らなかった」と言ったのは、一メートルを越す海スズキの大物をかけて興奮してすぐ戻って来た時だけだ。根は親切で、エビとりの朝はモーターボートに乗せて遠くまで連れて行ってくれた。

正月が過ぎて、河が平常に戻ってから私はいよいよ釣りを始めたのだった。

夜中に起きて朝まで小説を書く。夜があけると河にでて釣った。
その魚をすぐ魚屋へ運び、朝食をして十時頃から昼寝をした。その生活を一年続けたのだった。

ロバーロ（スズキ）

獲物は平均して六百グラムくらいのフッコだった。一キロを越すのは少ない。淡水に棲む種類だった。
河口の釣りは潮に左右される。イタニヤエンは朝が常に干潮だった。大潮の朝なら大場所の深んどに集まっていた。潮が差してくるとかけ上がりへでるが、陽が高くなってからの釣りはセイゴがボツボツしか掛からないから商売にはならなかった。
小潮の朝は枝川などの深みが良かった。いずれも、流れが彎曲したり、ボサがあるような場所に魚はひそんでいた。深みの中心ほど型が良く、岸辺はセイゴクラスだった。
朝日が昇る十五分前に喰いが立ち、日が昇って四十五分過ぎると荒喰いが終る。それからさらに三


ロバーロ（スズキ）

十分もするとほとんど喰わなくなる。あとは浅場を回遊するセイゴクラスしか釣れない。

岸から釣るときは竹の延竿を使った。カヌーに乗ったまま釣るときは、片手投げのリール竿を使った。両方とも目印のウキをつけただけのフカセ釣りである。川エビはシモる傾向があるからオモリは不要だった。ウキはエビが水底の木の根などにしがみつかないための役目を果した。

エビを水面に投じると、驚いたようにピンと跳ね、二、三回グルグル廻ってから潜り始める。第一投なら、エビが沈み始めたとき、まだ黒っぽい水の中を巨きな白銀色が走る。すかさず竿を立てると、もう合っている。糸は四号くらいを使っていたが、ヒューヒューと糸鳴りがするのだった。掛かった瞬間に、金にしていくらの魚と見当がつくようになってしまったので、やりとりの面白さどころではなく、逃がさないようにするので精一杯だった。

この一匹がパンと牛乳、次の一匹でバターと、ちゃんと決まっているから、無事にとり込むとホッとした(農業雑誌に連載小説を載せていて、家賃はそれで払えた)。

一応その日の最低の食糧分(約一・五キロ)を釣ってしまえば、あとは楽だった。

当時、私が持っていた唯一のリールはオリムピック社の輸出用の「シァイアン二九」という小型リールだっ

た。竿も同社のソリッドの小竿である。サンパウロの釣具店で最も安いという理由で買ったものだった。後に私はアブだのミッチェルだのと言うようになるのだが、一年間生活を支えてくれた道具にはいいしれぬ愛着があって、先頃わざわざ新品を探してもらった。このリールについてなら、多分製作者より詳しいと思う。

イタニヤエンで漁師仲間の知り合いができるにつれて、私は沖釣りに便乗させてもらってワラサ級のブリまでこのリールと竿で釣りまくった。何度も修理して欠点を知り尽しているから、故障させなかった。いや、一個しか持たないから故障させられないのだった。

両隣りのワルテル氏とヤング氏は別格として、私の友人たちは貧しい人々ばかりだったから、当時の感覚から言うといくつもリールを持っている方が異状なのだった。磯釣りに同行した男など、根がかりする度に海に潜って鈎を外しに行ったくらいだった。初めてその様子をみた時は、さすがに驚いたが、馴れると不思議ではなくなった。延竿で黒鯛を狙っている土地の男たちはスペアの鈎を持たないから、根がかりすると実に悠長に鈎が外れるまで待っている。現代においてもこうなのだから、鈎を探しに海中へ行った「海彦・山彦」の神話は本当にあったことだ、と思える。

延竿で釣っているときに大物が来て、糸が危くなると竿を放した。そっとカヌーに戻り、舟で追う。竿はご

くゆっくり動いている。竿尻をとり、魚の真上まで来て竿を立てる。そうすればまず魚はとれた。

日が昇るにつれて、魚は底へつく。ウキ下をだんだん深くし、最後はオモリをつけて底をしばらく釣って、一日の釣りが終るのが常だった。

毎日二時間ほど釣ればどうやら過せるのだから楽な仕事のようだが、餌採りが割に大変だった。大潮の三日間は餌採りでつぶれた。一月（ひとつき）に六日間は釣りができないことになる。しかし、暑い国の有難さで普段はショートパンツにゴムゾウリ、寝具もシーツ一枚で充分だったから生活費が少なくてすんだ。子供も小さくてまだ学校へ行っていなかった。勝手にその辺で遊んでいた。アナジアス時代の青年が数人、一週二回夜学に通って来て月謝の代りに野菜や果物を運んで来てくれた。

……だから、今になってよく考えてみると、とてもプロなどと言えたものではなく、いくらかの食い扶持を稼いだにすぎない。

ちょうど一年たって、再び雨期になり川が増水したとき、私はサンパウロ日語普及会の講師の職を得て、イタニヤエンに別れを告げた。

引越しの頃、何かと忙しくて二十日ほどカヌーを河に浮かべたままにしておいた。最後の日にお別れのつもりで乗ったら底がブヨブヨして、水が噴き出したの

で急いで岸へ戻った。
引き上げて調べると、大潮ごとに海水に乗ってくる木喰い虫がビッシリついて舟底が腐りはじめていた。二十日間放置しただけでカヌーはすっかり駄目になってしまったのだった。

マングローブ林

海岸地帯第一の大河であるリベイラ河は、日本人移民にとって因縁（いんねん）の深い河である。大正二年に日本人最初の植民地がこの沿岸に拓かれたのだ。日本移民は明治四十一年から始まっていたが、まだコーヒー園労働者にすぎなかった（「植民地」はコロニアの訳語で、集団、集団地、開拓地などの意味である。侵略的な意味は付与されない）。
第二次桂内閣の農相をしていた大浦兼武に目をかけられていた青柳郁太郎というカリフォルニヤ大学帰りの青年が中心となり、桂首相の肝煎（きもい）りで資本金百万円の民間会社を作って、植民地経営に乗りだしたのだった。
桂はプロシヤの富国植民政策に興味を持っていたし、大浦農相は海外に邦人の手による安定した米の供給地を欲していた。青柳は「日本人は海外に発展せざるべからず」という明治という時代のテーゼを胸に抱いた青

年だった。
リベイラ平野は森の中に眠っていた。青柳たちの作った植民会社「東京シンジケート」は、河口から三十キロほど遡行したレジストロという集落を中心に広大な官有地の無料払い下げをうけて、大規模な植民地造成に乗りだしたのだった。二千家族以上の日本人が入植した。
結果的にはこの植民地は成功しなかった。米作にそれほど適地ではなく、適作物が発見できなかった。道路が開通した現在はサンパウロ市からたった百六十キロの距離にすぎないが、当時は海岸沿いに舟、汽車と三日がかりの不便な所だったから、よほど有利な農産物でないと引き合わなかった。
前面に海をひかえ、後方に山を負ったりベイラ沿岸の風景は、山にかかる霧や不意に通る時雨（しぐれ）など、きわめて日本に似た環境だったから、経済的には成功しなかったが、植民者の中に牧歌的な気風を育てあげた。
この植民者の住宅の一つが明治村に運ばれていったが、二階建ての日本風を加味した家が建てられたのはここだけである。
この河にはマンジューバというワカサギに酷似した魚が海から遡行する。きわめて美味である。日本移民が初めて入植した当時は、ナベでも布でも手あたりしだ

いにすくえたくらいたくさんいたそうだ。
マンジューバの群を迫って海スズキ、河スズキが跳ね廻っていた。
マンジューバもスズキも刺身の旨い魚である。ここに入った日本移民は、少なくとも食生活においては恵まれていたと言える。
このイグアッペ植民地に入った日本人たちは五年十年とたつうちに、文化的には退行し土着の先住者たち（カイサーラ）の生活様式を多く取り入れるようになった。
海岸地帯の土着人をカイサーラと呼ぶのだが、彼等は米をすでに栽培していたが、棒で穴をあけモミをまき、ナイフで穂をつんで収穫する原始的なやり方をしていた。つんだ穂は一日乾してから、床の布の上へまき、隣近所総出でファンダンゴという踊りをギターに合わせてモミの上で踊るのだ。そうして脱穀する。非常に愉快な方法なのだ。
日本移民はそこまで退行しなかったが、多くの点でカイサーラの生き方を学んだ。あまりに不便な所で近代的な農法が役に立たないので、結局は彼等の生活の知恵に学んでノンビリ生きるしかないのだった。脱穀の踊りなどは隣近所の労力奉仕であるが、振舞い酒がでて、小屋の暗いカンテラの下で十六、七のムンムンむせるような混血娘たちと抱き合ってワイワイ踊るのだから、日本人の青年たちもよろこんで行ったそうだ。

カイサーラが魚をとるのは、多くの地方に共通したやり方だがせん（うけかご）を使うのが普通だった。
蔦で編んで、直径五十センチ長さ一メートル半くらいの大型のせんを、家の近くの川に仕掛けておくのである。パンタナルのところでも少し触れたが、魚を根こそぎとるやり方は絶対にせず、少なめ少なめにとるのが土着人のやり方だ。これは今日でも変っていない。街から行って初めて見ると、何て間の抜けた無気力な連中だろうと思ってしまうが、結局は彼等の方が正しいのだ。
日本人たちもせんを仕掛けるようになった。雨で畑に出られない日は、森から伐ってきた蔦でせんを編むのが楽しみの一つだった。入るのは主としてナマズ類と、雷魚に似たトライーラだった。四十センチくらいの大きさだった。
このリベイラ河にはトライーラの一変種が棲息していて、それは二十キロほどにもなる。
せんなどに入るはずはないが、産卵期に洗濯女に噛みついて鍬（くわ）で叩き殺されたりする。歯が非常に鋭い猛魚で、専門に狙ったら面白いだろうと思われる。
土地の男たちはトライーラもナマズも、ポカン釣り専門で狙う。しかし、この釣りについては後に述べるので、今はスズキのことに話題を戻そう。
リベイラ河畔の中流はバナナ畑、下流はマングロー

ブ林で埋まっている。釣場の雰囲気としては、森と水草のパンタナル、一面の水の世界のアマゾンなどと趣をことにして、それなりの味わいがある。特に夕方など、潮の香りがプンと鼻をついたり、マングローブの空中根にカキが付着していたりして、人家の煙と共におだやかな人間臭さがある。

舟からの釣りなら問題はないが、野釣りや岡っ張りの場合、バナナもマングローブも竿さばきがむずかしくなる。

バナナの葉は幅が広く、頭上におおいかぶさっているのが常だし、マングローブは空中根もそうだが枝も迷路パズルのような線を空間に描いている。魚の喰いが立って興奮するとつい枝に糸をからませてしまう。河スズキの場合はひどく短くせいぜい一時間ほどのものだから、釣果の多寡は手返しの良し悪しにかかっている。

河スズキの引きは強く、爽快味に富んだ釣りだが、殊にその時合(じあい)が早朝なので河面にはモヤが立ち込め、鳥たちもさえずりはするがまだ活発には飛び廻らず色鮮やかな姿を木の枝に見せ、汽水帯特有の甘い泥の匂いすらすがすがしい。描きあげたばかりの絵のように、あたりは水々しく静的な雰囲気に満ちている。その静寂を破って、鈎がかりしたスズキがガバガバと水面にエラアライするのだ。

河スズキと海スズキは外見は酷似しているが、食性

に多少のちがいがあり、河スズキはシコイワシなどよりもモエビが抜群に良い餌だ。ルアーの追いは海スズキより悪い。シン・スプーン（薄いスプーン）の赤白の五グラムくらいのもの、白いバック・テールのジグなどが比較的良い。

その代り、海とちがってポイントが見定めやすいから、ルアー釣りの効率はさほど悪いとは言えない。倒木やボサ廻り狙いだから、それらの場所に馴れないと根がかりの連続ということになる。

マングローブの木からは紅茶色の色素がでるので、湿地帯の水は黒い。カイサーラたちはこの色素で渋染めをして釣糸を強くしていたが、ナイロン糸になってからは忘れられてしまった。土地の老人にその法を教わって、ナイロン糸を黒染めにしたことがある。糸が見易くなって良いものである。麻布などもこれで染めると強くなるそうだが、今は染める人はいない。

海岸沿いにリオ　プレト（黒い河）という名の河が多いが、名を聞いただけでマングローブなどの色素をだす植物が群生する湿地帯を流れる河だと分かる。

それらの河の水はコーヒーのような黒褐色をしている。ちょっと不気味で、怪物が棲むという言い伝えがあるのも、うなずける。しかし、水中メガネをかけて潜ってみると、濁流とちがって黒いなりに澄んでいて視界はかなり良いのが不思議なくらいだった。初めて黒い河で釣ろうとしたとき、こんな黒い水では半透明な生

エビなど魚は見付けられないのではないか、と心配になって、橋杭(はしぐい)にそって潜ってみたのだった。材木の節目などは勿論のこと、四号くらいのナイロン糸も一メートルくらい離れてハッキリ見えたので驚いてしまった。水から上がって見下すと、不気味にただ真っ黒な水なのだ。

水面に光をまるで反射しないが、地味だがチャンと儲けている企業のように、中へ入ってみると多量の光がゆき渡っているのだった。

黒い河に棲む怪物の伝説は、爬虫類のような形態のものが多いが、リベイラ河の支流の〝黒い河〟に棲む怪物の正体は「白い馬」だということだ。

素晴らしい体格の悍馬(かんば)で、満月の夜に河中から姿を現わす。青白い光が燃えているようだという。河辺を歩いている処女を河へ追いつめて一緒に河底へ姿を消す。この伝説はまだ力を失っていなくて、満月の夜に娘の帰りが遅いと母親たちは白い馬にさらわれたのではないかといまでも本気で心配する。

リベイラ河でスズキの半夜釣りをしたことがあるが、それでこの美しい伝説の雰囲気が味わえたのだった。農家はいくらかの馬を飼っているが、用がないときは放したままにしておく。河辺に草が多いから、ポツリポツリと馬がいて夜でも草を喰っている。川とマングローブ林の暗い夜景の中で白馬が月光を浴びている様は印象的である。それに、海に近い平地なので月が実に

大きく見えるし、明るい。月には人を狂わす力があるのも本当らしい。ルア（月）とルアー（擬似餌）もほとんど同じだが、〝誘われる〟のは魚だけでないようだ。

都会にいると月の満ち欠けにはまったく無関心だが、リベイラ河流域のような汽水帯に滞在すると、満月の夜には体の芯がうずくような衝動をはっきり感じる。その頃に性行為をするのはカニやブヨやゴカイたちだけでなく人間もそうだと思ったりする。平安朝の歌人が月のことをあれほど詠ったのは、単なるキレイごとの美意識ではなくて、彼等の恋愛感情の起伏に月の満ち欠けが現代よりずっと大きな影響を与えていたのではなかったか、とスズキを釣る手を休めて考え込んだりしてしまう。

この辺のカイサーラは月の満ち欠けに生活のリズムを合わせることを重視していて、その点では太陰暦的である。例えば、野菜の種は新月（闇夜）に蒔く。月が満ちる力と共に育つ野菜は強く、害虫や病気に犯されないと言う。

釣師というのは、そもそもが太陰暦的な人種だから、カイサーラたちの考えと一致する部分が実に多い。四季の差が少ないブラジルでは余計にそうだと思う。そして魚類の中では、汽水帯に棲む魚たちが最も月の影響をうけて生きていると言える。

水路のほとりに住むカイサーラの家にとめてもらい、古びたカヌーを借りてスズキを追い廻す汽水帯の釣り

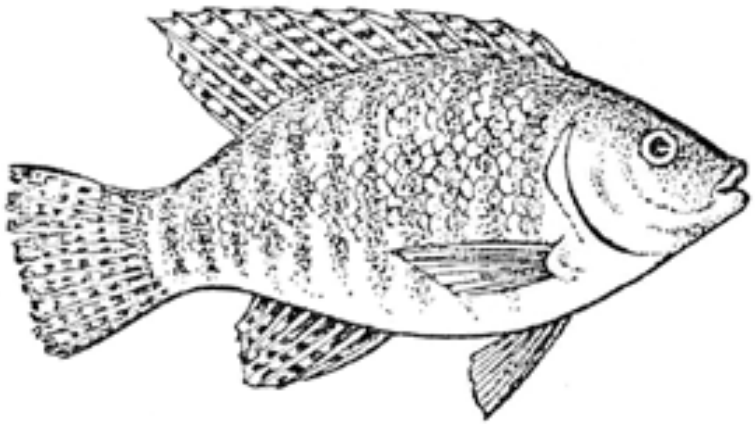
は、月を友とした風雅そのものである。しかし、そんな日程の余裕のある釣行はめったにできなくて、普段は良い月齢と休日が一致する日を機械的に選んでの夜討ち朝駆けであるのもやむを得ない。

第三章　湖沼の釣り

チラピヤ

Ｔｉｌａｐｉａはアフリカ東海岸地帯の原産だが、世界中の熱帯、亜熱帯、温帯まで現在猛烈な勢いで繁殖している。日本でも養殖されて市販するまでになっているが、一九三〇年代に東南アジアに入ったのを、一九五〇年代に日本へ入れたと聞いている。後に、皇太子殿下がタイの水産試験所へチラピヤ（タイ名、プラニン）を送ったという新聞記事があった。殿下に直接うかがった話では、チラピヤはすでにタイ国に入っていたが高地のチェンマイ地方では成長が思わしくないのを見て、チェンマイの気候に合いそうなＮｉｌｏｔｉｃａ Ｌｉｎｚｅｕｓ種を送った、とのことである。

日本ではティラピヤと英語読みで呼んだり、本によってはカワスズメという和名をつけてある。沿岸の岩礁地帯に棲むスズメダイに良く似ているのでカワスズメと名付けたのだろうが、非常に良い名だと思う。養殖業者が売らんかなという欲まるだしで「新鯛（にいだい）」などという名を付けたそうだが、いやな名だし、イメージとしても合わな



い。第一、鯛が永年かかって日本人の間に築きあげた名声をそっくりいただこうというのは良くない。

ブラジルにチラピヤが入ったのは十年ほど前のことにすぎないが、気候が合うせいもあってサンパウロ州を中心に猛烈に広がっている最中で、池や湖はチラピヤに完全に征服された感がある。岸辺の草やプランクトンを食べてどんどん成長し、最大二〜三キロ、肉は自身でかなり美味なので、第三の蛋白源などともてはやされているが、草食魚のくせに獰猛で他魚を絶滅させてしまうのだ。

Ｍｏｚａｍｂｉｑｕｅｍａｔｈｂｒｏｏｄｅｒという名が示すように、モザンビーク生まれで、雌が口中で卵を育てる。浅場に穴を掘って産卵したあと、雌は稚魚になっても口で育てるのだ。他魚は草と一緒にむさぼり喰うし、小魚も追って呑み込んでしまう。

夕方など小魚の群が跳ねて逃げ廻っているが、とても草食魚のチラピヤに追われているとは信じられない光景である。試みに三グラム程度のスピナーや毛鈎を投げてみると、ガクンとかかるのがチラピヤである。その腹を裂いてみてもごく薄い腸がギッシリ詰っているだけで、フィッシュ・イーターたちが持っている胃袋のようなものは見当らない。一体、小魚をのみ込んで消化できるのだろうかと首をかしげたくなる。

サンパウロ市から七十五キロ離れた人造湖に繁殖していたブラックバスを、チラピヤはほぼ五年で絶滅さ

せてしまった。友人が目撃したところによると、産卵床を護っているブラックバスが舟が近づいて深みに姿を消すと、チラピヤの群が襲いかかって卵を瞬間的に喰い尽したそうである。

かりにチラピヤの目をのがれて孵化しても四センチ以上に成長するまでに喰われてしまう。成魚は釣人に釣られるので、その湖のブラックバスはあっという間に姿を消してしまった。他のフィッシュ・イーターだと餌の小魚が少なくなると自分たちも減少し、自然のバランスがとれるものだが、チラピヤは元来が草食魚だから他の魚が絶滅しても一向に困らないのである。

農業用の小さな溜池などでは、チラピヤ以外の魚は一匹もいないという池が増えた。

止水なら、かなりの汚水でも生きる。唯一の弱点は低水温が苦手で十度以下ではまったく活動せず、死んだりする。サンパウロ州でも冬はあまり活動しない。国土開発が進み、大規模なダムが各地に誕生しつつあるので、近い将来、共に止水を好み大繁殖するピラニヤとチラピヤの水中大決戦が行われると予想される。

鋭い武器を持つ魚集団と一見平和な魚集団……騎馬民族と農耕民族の闘いにも似た壮大な闘争が、人間が作ったダム湖という新しい舞台で展開される。チラピヤ侵入の歴史が新しいので、まだ実例がなく予測しがたいが、武器という点では圧倒的にピラニヤが有利である。

チラピヤは雑草の葉を噛み切るだけのヤスリのような細かい歯しかないのだから。体型や大きさはほぼ等しい。

だが、チラピヤは幼児殺しというか、次の世代を絶ち切る特技があるので、ひょっとするとピラニヤに対しても圧勝する可能性がある。雷魚といえば草食魚の大敵だが、その雷魚と同じトライーラでさえもすでに絶滅させているし、害魚論がやかましいブラックバスなどまったく問題にならず息の根をとめてしまう。チラピヤの強味はその圧倒的な繁殖力にあって、フィッシュ・イーターたちにどんなに喰われようとまったく問題にならない。他の魚種だったら自滅するしかない大群が小さな池に生きることができるのだ。

鬼子母神も自分の子をさらわれて降参してしまったが、ピラニヤも鬼子母神の二の舞になるかもしれない。しかし、今のところマットグロッソ州やアマゾナス州でのピラニヤの繁殖ぶりに対しては、人間はお手あげだし、他の魚たちも押さえることができないでいる。

地図を広げてみると、サンパウロ州とマットグロッソ州の州境のパラナ河に近年できた幾つかの巨大なダム湖が、ピラニヤ軍団とチラピヤ集団との最初の接点になると思われる。

釣りの対象魚としてみた場合、チラピヤは歓迎すべき魚である。ヘラブナをやや荒っぽくした魚と思えば

間違いない。旅行で来たヘラ師を案内したことがあるが、一日釣っての感想は、

「ヘラですな」

ということだった。

その人はネリエを使ったが、当りから鈎掛かりしてのノシ方まで、ヘラを彷彿（ほうふつ）させるそうだ。

最も普通の釣り方は、河辺に繁っているカッピンという柔らかい雑草の葉をハリにチョン掛けにしてフカセで狙う。喰いやすいように葉を結んだりしばったりすると来ない。あくまで自然のチョン掛けだから、合わせのタイミングが割にむずかしい。糸がスーと動き始めてから六つ数えるくらいのタイミングだが、日や場所でちがうからややこしい。トバセウキや当りウキをつけたり、やりだすと夢中になってしまう。

サンパウロ州の釣人も、チラピヤ釣りが一番多い。手軽にいけるし、延竿一本あれば良いという利点もあるが、とにかく微妙でやればやるほど両白味のでる釣りだ。

抜群に利く餌は動物質で、生きていて、白くて柔らかいものが良い。サシ、アリの子、ハチの子などだ。竹竿の先に草の束をつけて水に浮かべ、それに寄ったチラピヤを釣る。

ズラッと湖畔に並んで釣っているが、一キロクラスの大物は警戒心が強く、そんな所には寄らないから、大物狙いの連中は一人一人孤立して岸に盾のようなもの

を作り、草でカモフラージュして姿を隠してヒッソリと釣っている。

並んで賑やかに小物をつるのはイタリヤ系に名人が多いが、隠れて忍耐強く大物を釣るのはドイツ系やポルトガル系に多い。ドイツ系やポルトガル系の人は日本人の目から見ると呆（あき）れるくらい無器用な人が多いが、釣果という点になるとそれほど劣らない。

ブラジル人がサシを使うようになったのはごく近年のことで、チラピヤ釣りがエスカレートしてお互に釣果を競うようになってからのことだが、頭の良い餌売りが「ブリジット」という女優のような名をつけてビンに入れて売り始めてからのことだ。

女の人などで、何の虫か知らずに使い、残りを持って帰ったら蝿に化けたので卒倒しそうになった、などとよく聞くが、一度使ってしまうと身許が分かっても案外平気で使うものである。

「ブリジット」が流行する数年前に、私は「チラピヤはハエのウジで釣るとたくさん釣れる」と新聞に発表したが何の反響もなかった。結局、ネーミング次第で流行るものがあるわけだ。しかし、ブリジットというのは瞭（あき）らかにブリジット・バルドーからの連想で付けた名前なので、ハエのウジがいくら小柄で色白だからといってちょっと厚かましすぎるような気もする。

チラピヤは新しい外来魚だが、都会の釣人たちが開

発した画一的な釣法のほか、それぞれの住人によって土着性の強い釣法もすでに生まれている。

湖畔に住む黒人のおかみさんなどのオカズ釣りは、マブナのズキ釣りのような方法をとる。四メートルくらいの延竿にみち糸を一メートルくらいにして、チラピヤが草を喰っている浅場へ近づいて草の間へチョンチョンと仕掛けをおろす。一日じっくり釣る方法ではないが、十匹くらいの魚を手軽に得るに適した釣法である。エサは草でもトウモロコシでもミミズでもいい。

ただし、この方法は裸足でないとダメである。靴をはいていると、どんなに注意深く歩いても近づくと魚の気配が消えてしまう。それとも、黒人の女は体がしなやかで忍び足が特別にうまいのだろうか？

土地の男が大型のでる深場で釣っているのをみると、ニゴリをうまく使っている。澄んでいるとどんなにマキエをまいても大型はなかなか寄らない。しかし、ニゴリが入ると割合に寄ることを知っている。かと言って、泥を撒いたのでは音で逃げる。岸からニゴリが四メートルほど沖へ払いだしたその接点がいいそうだ。

崩れやすい赤土のかたまりを岸において波に洗わせてニゴリを送りだしたりと、素朴だがかなり細かい技巧を用いる。釣れた魚を糸でむすび、わざと浅場におき、魚の鰭の動きでニゴリを出している人もいた。こういう大らかな発想は日本人では出にくいので感心して眺めたことがある。

人間の思考は一つのパターンがあり、その流れから出にくいものだと実感した。私はニゴリが良いと分かると、チヌの備中釣りの要領で赤土ダンゴで餌をくるんで試みたが、さして効果はなかった。ニゴリを見てエサに寄るチヌとちがい、メジナにおけるサラシのように身を隠すためのニゴリだから集中的な団子では効果がないのも当然だった。

牧場地帯の池で釣るときはアリの子が良い餌になる。牧場にはいたるところアリの塔がニョキニョキと林立している。高さは一メートルから二メートルくらいある。これを鍬でくずすと基部に白アリが詰っている。充分に鈎にさせるほどのプクンと腹がふくれた大アリである。石油カンに入れて運び、半分くらいは土ごと撒き餌とする。

副産物としてアリ塚のあとにはキノコが生える。アリが培養していた菌と関係のあるキノコらしい。一般のブラジル人はまず野生のキノコを食べないが、日本人は「アリタケ」と呼んでこれを珍重する。ただし、牛の糞のあとに生える「クソタケ」と区別しないといけない。

牧場にはウズラも多い。草の中をヒナが一列になって逃げだすと思わず鍬を投げだして追いかけたくなるが、案外と逃げ足が早く、結局クタクタになって犬のようにあえぎながら戻ってくるのがオチである。それに、

良く考えてみるとウズラのヒナなどつかまえても仕方がないのである。

チラピヤは釣りたてを洗いにすると身がしまって非常に美味だ。普通の刺身にするとヌルッとした感じがあるのが欠点だ。

「蒲焼にするとウナギよりうまい」

と教えてくれたお婆さんがいた。

彼女は十歳のとき移民して来たのである。すなわち五十数年間ウナギの蒲焼を食べたことがないのだ。それなのに、ウナギより旨いと力説するのが面白かった。……もっとも、ごく最近ブラジルでもウナギの稚魚をフランスから入れて養殖に成功した。サンパウロ市の日本料理店では一応蒲焼が食べられるようになった。

ブラジルの日本人は故郷の味が懐しくて、あらゆるものを日本からとり寄せてここで作りだした。結果的にはそれが産業(特に農業)面で大きな貢献をこの国にしているのだ。

つい最近まで、ブラジルにないのはウナギとマツタケとハマグリだけだと言われていた。

あとは竹の子でもワサビ、シイタケ……何でもできる。ソバやカラスミなどは逆輸出しているくらいだ。

ウナギが登場したので、これで無いものはマツタケとハマグリだけになった。昭和十年代に三菱系の東山農場支配人の山本喜与司博士が日本からハマグリの稚

貝をとり寄せてウバツーバ海岸へ放したことがある。何度とりよせて放しても、翌年掘ると影も形もない。あまりに費用もかかるので側近の人が見かねて、「マツタケのない国にハマグリが居つく道理はありません」といさめたという話が残っている。

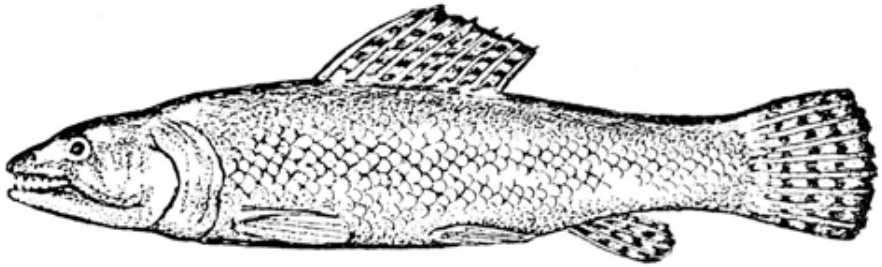
ポカン釣り

ブラジルで最も土俗味の強い釣りはトライーラとナマズのポカン釣りだろう。このナマズは日本のものと同じで、背は黒青色、大きさも三十五センチくらいの種類である。

このポカン釣りは釣りの常識の反対を行くもので逆説的な釣法としてぜひ記しておかなければならない。

その前にトライーラという魚を紹介しておく。

Ｔｒａｉｒａ　地方によってはロボーとも呼ぶ。形態は鯉に似るが、習性は雷魚そのものである。平野部の池沼や、川の流れのゆるい深みの、倒木や草陰などにひそみ鋭い歯でエビ、小魚、蛙などを襲う。成魚で五十センチくらいだが、一メートル以上に成長す



る種類もある。
全体に茶色がかった灰色で、腹部の白も薄く茶色がかっている。ウロコは硬く、全体にヌルヌルしている。夜行性であるが昼間でも釣れる。小骨が多いが、肉は白身で淡白な美味。

田舎の休日に竹の延竿をかついでテクテク野の径を歩いている男を見かけたら、十中八九はポカン釣りだと思って間違いない。
小麦粉の袋を仕立て直したシャツを着て（この布地は労働着として理想的なのだ）、ツギだらけのズボンに破れたムギワラ帽……というのがサマになっている。ミミズを入れた空カンとストリンガー代りの針金一本を持っている。
男はコーヒー園か綿畑が広がる炎天下を釣場へ急ぐ。テーラロッシャと呼ばれる肥沃な赤土がむきだしになった道が、波状丘陵地にどこまでも続く。
歩くのも田舎風ポカン釣りの大きな要素の一つだから、その男と一緒に歩いてみょう。名を訊ねたらジョゼと答えたことにする。ジョゼは痩せ型で色は浅黒く、茶色い無精ヒゲを生やしている。彼等は一週間に一度くらいヒゲをそるのが普通だ。
田舎の道はいろいろな生物が行手を横切る。一番多いのはナンブーという山鳩だ。トカゲも多い。大物は一メートル以上になるが、五十センチ以上になると食用

として価値がある。
緑色に輝く種類は肉が生臭いが、銀色や茶灰色の種類はクセがない。ニワトリの手羽肉のような味である。
サウーバ（葉切り蟻）の行列も道にそった草むらの下を通っている。柔らかい葉を巣に運んで発酵させ、その菌を食用にするので、必然的に農作物に甚大な被害を与える。広々した野菜畑を数日でダメにしてしまうし、一本の木を一晩で丸坊主にする。草陰の作業なら日中もせっせと働くが、野菜畑のような開けた場所は夜に仕事をする。「サウーバがブラジルを殺すか、ブラジルがサウーバを殺すか」という有名な標語があるくらいである。
この蟻は茶色で全体の大きさは二センチくらいだが、不恰好なほど巨大な三角形の頭部を持っていて、虫眼鏡でみると凄い切断器をそなえている。木の葉のクキなど軽く一回で切りとる。頭部と胴を切り離して観察したことがあるが、三十分たってもそれぞれが生体反応を示した。机をトントンと叩くと頭の無い胴だけがキッと脚を立てて身構える。転がっている頭に葉柄を近づけると噛みつく。さすがに切断する力はないが、かなり深い傷をつける。薄気味悪くなって捨ててしまったからそれ以上は分からないが、多分一時間以上は反応を示すにちがいない。小川などを渡る必要がある場合は幾百匹かが蟻柱となって浮橋をつくるそうだ。勿論、水中の蟻は犠牲になって死ぬ。死んでも浮橋はその

ままである。
北杜夫さんとこんな風な田舎を歩いたことがあるが、氏も大いなる関心を持って葉切り蟻を観察していた。北さんは泊っている家の近くの森へチョウを捕りに行った。迷いはしないかと私たちが心配すると、
「目印にチリ紙を点々と置いて行ったから大丈夫でした」
と言った。
ドイツ童話の少年はパン切れを置いていくので森に迷ってしまうが、チリ紙なら小鳥にくわれる心配はないと思った。
小型のオウムも田舎には多い。三十羽くらいの群が普通である。実に騒々しい。この群は下痢便をまき散らすので、その下に行かないように注意しなければならない。
ようやく釣場に着く。
草が茂った小川か池である。ジョゼは早速釣りはじめる。しかし、その道具の素朴さについて詳しく書く必要がある。竿は穂先をうんと詰めてある。糸はヨレヨレでつぎだらけ、鈎は真っ赤に錆びている。つまり、一度仕掛けをつくったらそのまま軒先に立てかけておくからそういうことになる。また、放っておいてもかまわないほど頑丈な仕掛けでもある。
真っ赤に錆びた鈎など都会の人間が使うことはまずない。ところがポカン釣りに関してはこの鈎が抜群の

偉力を発揮する。
錆びているから装餌するのがやっかいだが、その代り、魚にエサをとられる必配がない。
水面をチョンチョンと叩いたり、水中に沈めたりするとトライーラが来る。昼間だからガブ呑みせずに餌の一端をくあえてジッとしていることが多い。一瞬、両者のさぐり合い。ジョゼがちょんと糸を引いて、すぐゆるめる。エサに逃げられると思ったトライーラは大きく喰わえ直す。そのときいきなりゴボウ抜きで揚げてしまう。
ここでまた、錆びた鈎が効果的なのだが、先がくきって丸くなっているから充分に刺さらず、草の上へドスンとおけば自然に鈎が外れる。新品のハリだと口腔に深く刺さるが鋭い歯の持主なので鈎外しが大変である。ナマズが釣れても同じで、歯がないかわりに固いゴムのようだからてこずる。
夕方、手許が薄暗くなってバタバタ喰いが立つような刻（とき）には新品の鈎だと餌もとられるし、鈎外しの困難が一層加わるので、釣果の差は大きくなる一方である。
それに、ポカン釣りは竹竿に勝る素材はない。魚が当った感じ、喰わえている感じが手許まで充分に伝わってくるからだ。
このように道具だてが素朴で、獲物の大きさも食膳を賑わすに足ることが、田舎でポカン釣りが圧倒的な

人気を得ている所以（ゆえん）だと思われる。
話が前後するが、釣り始める前に竿先を水中に突っ込んで水を数回かきまわす。固い竿だからかなり激しい水音をたてる。これはポカン釣りにかぎらず、ほぼ全ブラジルで肉食魚を延竿で釣るときに観察できるやり方だが、魚の捕食音を真似しているのだ。
釣りはじめだけでなく、途中でも餌をつけ換えたりするたびにガボガボかき廻す。魚を追い払っている印象をうけるほど強く水音をたてる釣人もいるが、正しい擬音を出すと非常に効果的な方法である。
澄んだ池で偶然に観察したことがあるが、釣人が竿先で擬音をだすと三十メートル離れた草陰にひそんでいたトライーラが音の方へ向いた。彼が擬音をなおも発し続けると、トライーラは中くらいのスピードで音の方へ泳いでいった。警戒心を感じさせない、ノビノビした泳ぎ方だった。それを実見してから、私はこの無分別にさえ感じられた擬音の効果について再認識したのだった。
それまで私は擬音は餌の小魚や蛙が発する音であるべきだと信じていた。
海でのホースで散水してのカツオ釣りも、ドラード釣りで小ナマズをグーグー鳴かせるのもそうだ。ルアーでもサーフェス・プラグがたてる音は餌の小動物の音で、だからこそプラスチック製より柔らかいバルサ製の方が効果が的確で持続するのだった。

汽水帯のフッコ釣りで大きな固い木の飛ばしウキでエビをポイントに投げ込むと二匹くらいしか釣れないが、小型の柔らかい木のウキにナマリを仕込んで注意深く飛ばすとずっと多くのフッコを同じポイントで釣ることができる。大型の固いウキの着水音がフッコを驚かせて散らせてしまうものと思われる。勿論、船外機つきのボートよりカヌーの方が釣果が挙がり、船外機付きの場合でも近い場所の移動ならモーターを始動しないで漕ぐようにしなければならない。リベイラ河口の町イグアッペでは船外機の普及につれて、以前は町から二キロ離れれば釣れたスズキが今は十八キロ以上離れないと釣れないようになった。土地の人々にいろいろと質問したが、釣り荒れや公害ではなく船外機の賑やかな音を魚が嫌うとしか思えない。

そういう観察例に基づいて、釣人の気配はできるだけ消し、エサの水音のみを演出するのが一般のセオリーで、私もそれに従っていたのだった。

しかし、魚自体の捕食音（主として水面で）も釣技に加えるとなると、ずいぶん新しい技法も未開拓であることに気づく。

スズキ、ブラックバス、大ピラニヤなどを釣ると、もう一匹か数匹がピッタリ横をついてくることがある。番（つが）いの場合、私は文句なく夫婦だと決め込んで哀れに思い、自分を罪深くも思っていたのだった。

だが、ポカン釣りをみて魚たちが仲間の捕食音にいかに惹きつけられるかという実例をみてから、釣られた魚についてくる仲間は惜別の情からではなく、あわよくば餌を横取りするか少なくともおこぼれにあずかろうとして密着して泳いでいるのではないか、と推測した。

黒ピラニヤを釣ったとき、そういう二匹が舟側に寄り、私はとっさに肉切れを投げてみた。夫婦の情のこまやかさとしか見えなかった状態が破れ、自由な方の黒ピラニヤは肉切れにアタックして水中深く潜ってしまったのだった。

私はふつう、肉食魚をルアーで釣るし、餌釣りの場合も舟ばたは正念場なので稀なチャンスを的確にとらえて実験を繰り返す余裕がなく、成功したのはその一回だけである。一例だけからすべてを決められないが、数匹もついてくるのは特に喰いが立ったときに見られる現象であることも思い合わせて、情愛半分、横取り半分くらいではないかと思っている。つまり、釣師と魚たちの接点は一片のエサにすぎないが、あまりにエサ中心に魚を観察するのは味気ないから、惜別の情で魚がついてくることも半分くらいあると思っているのだ。したがって、罪深さの想いも半分に減じた。

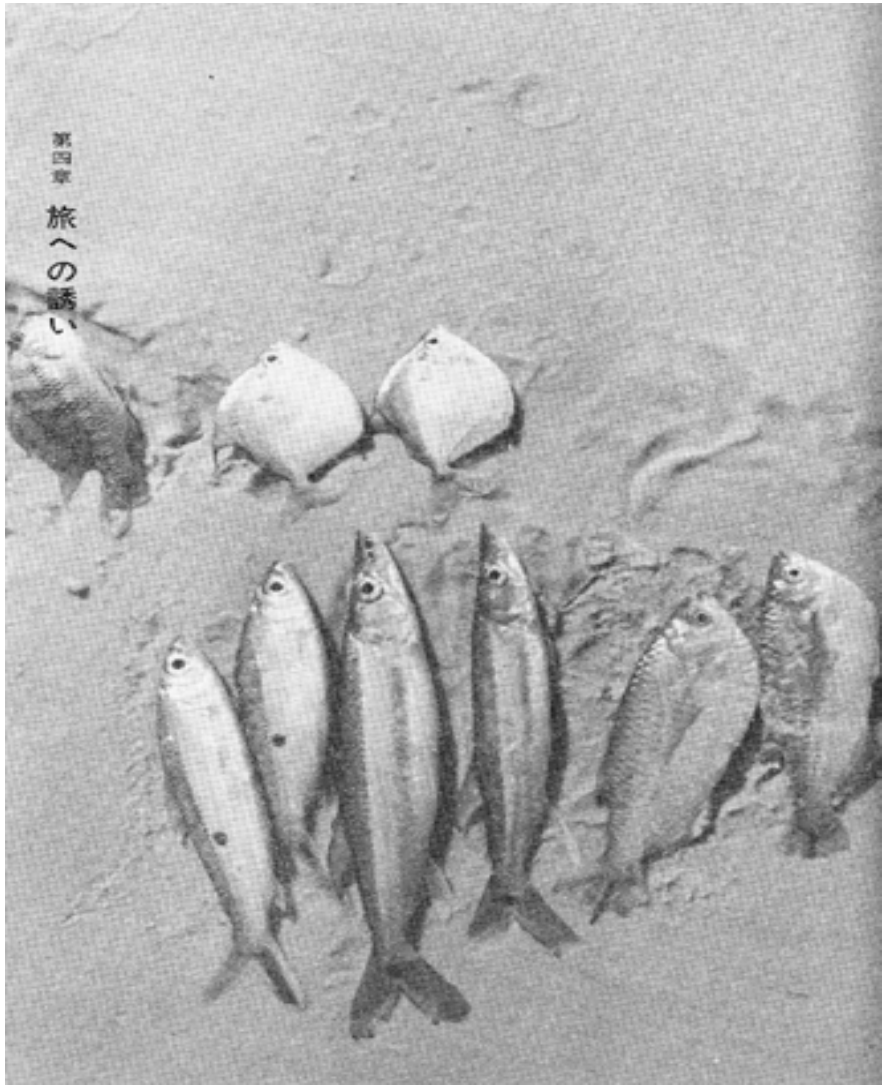
コッシンの山本さんが甥の水死後、魚釣りをやめたのは、それまでにあまりにたくさんの魚を殺しすぎたという後悔が心の底に澱んでいたからにちがいない。

大都会に住む釣人は幸か不幸か、自責の念にかられるほどたくさん魚を釣ることはできないのである。

ポカン釣りは全世界に分布する土着的な釣法である。近代化しスポーツ化する釣りに対し、反現代的な要素ばかりで成立しているような素朴な釣りである。その釣場たる小川や池も、汚染されるか埋めたてられやすい存在だ。だから、ポカン釣りが盛んな場所ほど自然が豊かな場所だと言えるだろう。

「自然がまだ残っている」とか「自然を残す」という言い方を私たちはついしてしまうが、ずいぶんと思い上がった表現である。自然こそが人間を生かしてくれる存在であると思えば、少なくとも対等の存在であると思えば、「残す」などという見下した表現が口から出るはずはないのである。それにもかかわらず、都会の周辺を眺めれば、「残っている」としか表現できない風景が展開されている事も事実である。

第四章　旅への誘い



練餌と擬似餌

田舎で釣りを始め、都会に移ってその趣味を持続させていると、初めはまず釣ることが興味の中心だったのが今では自然の中に身を置くことが第一の眼目になったようだ。

釣りを好む点は初めの頃も今も変りない。面白さが

釣技と無関係に感じられるのが釣りの美点だろう。心臓がドキドキするとか、手許に伝わる快感とか、水面をにらんだ期待感とか、そういう肉体的な反応が釣りの面白さだが、それは初心者でも充分に楽しめるものである。

しかし、味わいとなると、釣技が上達すればするほど深まるようである。これはむしろ精神的なものである。

肉体的な面白さだけでいつまで押し通すとガサツな釣りになる。面白さを感じなくなった体で味わいだけを追うとひねこびた釣りになる。いつまでも新鮮な面白さを感じながら味わいを深めていくのが釣師の理想像だろう。

超ベテランのお供をするのは勿論大好きだが、初心者と一緒に行くのも良いものだ。磯釣りにミミズを持って来たり、投げ釣りにオモリを忘れたり手を焼かせる連中だが、その代り、釣場での彼等の新鮮な感動が快く伝わってくる。釣場付近に棲息する餌を採集するだけで愉しくて仕方がない、といった風だ。中にはエサ採りを面倒がる初心者もいるが、そういう人は釣りに不向きで決して上達しない。何十人かの観察例で、ほぼ断言できる。釣りは魚がエサをあさる行為で成立するのだから、自分がエサ採りを面倒がる人は釣り全体のタイミングのようなものを会得できない気質のようだ。ルアーや毛鈎でも原則は同じである。

エサといえば淡水ではミミズが最も普遍的であるが、これは茶ぶせ、砂ぶせ、苔ぶせなどにして泥を吐かせる程度で加工はしない。ところが練餌となると、忠実に個人の好みを反映させるので興味深い。つまり人間は、自分が旨いと思うものは魚も好むにちがいないという原則に立って、練餌の配合を工夫するのである。

サンパウロ市の釣り好きたちは大半がヨーロッパ系の子孫であるし、特にイタリヤ系が多いせいか、チーズを多用するのが特色である。つまり、自分がマカロニに粉チーズをたっぷり振りかけたり、牛カツに厚いチーズをのせて煮込んだりするものだから、魚のエサもチーズが入っていないと喰いが悪いと思い込んでいるのだ。

小麦粉をつなぎにしてチーズ粉をこねまわして数日置いて発酵させたものが、一般的な練餌である。パン種のようにブツブツと気泡ができた耳たぶくらいの柔らかさに仕上げる。だから日本の練餌のようなバラケ工合は無視してよい。

練餌はどこまでもエスカレートする可能性があって、それぞれ門外不出の秘伝を持っている人も多いが、チーズの場合、発酵度をどの辺にしたらどの時期のどの魚が好むかというのも釣師たちの重要な研究課題となっている。

中には、うんと腐らせて臭くしさえすればいいという極端な主張の釣師もいて、かつてピヤーバ釣場でそ

んな餌を分けて貰ったが、臭いこと臭いこと、鼻をつまもうにも指先が汚染されているのでできず、閉口したことがあった。どんなに臭いかというと、ナポレオンが「ジョゼフィーヌ、余は欲しくない」と言ったとかいう伝説のある系統の臭いの強烈きわまるものだった。

地方へ旅して河辺の黒人系の釣人の練餌を貰うと、マンジョカ（マニオク）芋の粉を水練りしただけである。それが彼等の主食であって、この場合も自分が食べつけて旨いと思うものを餌として使用しているのだ。

日系移民はその民族的嗜好のしからしむるところで、ミソやスアマを混ぜるし、マカロニに粉チーズをまぶして釣っているイタリヤ系の隣でウドンで釣ったりしているが、やはり不利はまぬがれない。釣場での魚の馴れという点からは、多数の人が使う練餌の方が効果があがるのが一般論として正しいからだ。

その証拠として、一般ブラジル人の家に飼われている犬に白ゴバンにミソ汁をかけたのをやると、ちょっとにおいを嗅いで実にバカにしたようにこちらをチラと上目で見てソッポを向いてしまう。日系人の家の犬だとセパードなどでもミソ汁ゴハンを尾をふりながら旨そうに喰うものだ。

猫でも魚の供給機関がない僻地の町の猫は、魚を与えても知らないから食べないものだ。

そんなわけで、イタリヤ系が多いサンパウロ周辺ではチーズが入っていないと魚にも歓迎されない。

他人に荒される危険性が少ない釣場なら、それぞれに撒き餌をして飼いつける。雑食性の魚なら、マンジョカ芋やトウモロコシを俵ごと沈める。俵の破れ目から少しずつ餌がこぼれて一カ月くらい効果が持続する。

牛肉の消費量が多いだけあって、牛の血の入手が容易だから、これを釣場で撒き続けると集魚効果が非常にある。一日に二十リットルくらいの血をトウモロコシ粉にまぜて使う。

牛馬は電気ショックに弱く、落雷でよく死ぬ。死んだ牛を水上の枝に吊しておいて、発生した蛆がポロポロと水面に落ちるのを寄餌とする方法がある。これは殺伐で試みる気はないが、絶大な集魚効果のあるものだそうだ。

無理に丸ごとの牛である必要はないので、要するに蛆が発生してこぼれ落ちれば良いのだから、金網やビニール網の籠に魚のアラや肉片を入れて水上へ吊せば目的は達せられるはずだ。長期間のキャンプなどをして多人数に魚を供給しなければならない場合など応用すべき方法として、頭のすみに記憶しているのだがまだ実地に試みるチャンスはない。

擬似餌がなぜ発生したかと考えてみることがある。水面に浮かんだり、水中を流れて行く餌以外の物――白い羽根や木片や穂綿など――を魚がくわえる行為は太古から観察されただろうから、擬似餌の発明自体はさほど大袈裟(おおげさ)に言うほどのこともないだろ

う。

擬似餌釣りが発生し、定着した背景には、目的の魚だけを得る意図が支えとなっていたのではあるまいか。

擬似餌にくる魚は美味だし、価値があるのが普通だ。ところがミミズや魚肉を餌にした釣りは五目釣りでどんな魚でも釣れてくる。釣技や釣具が進歩した現代でもその傾向があるから、延竿の釣りが主だった昔のことでは一層そうだったにちがいない。

日本のような島国では河の流程が短く、魚の棲み分けが比較的ハッキリしている。イワナを釣ろうと思えば山奥へ行けばいいので釣り分けたい必要はさほど感じないで済むが、大陸の淡水魚は混棲が複雑でミミズや魚肉では外道が多すぎる。昆虫を使ってもそうである。不要な魚をつらず、どうしてもあの魚だけを釣りたいという要求が強く生じてくる。勿論、その魚に美味な肉がタップリあるからだ。

その釣りたい魚がフィッシュ・イーターならば擬似餌を使えば目的はほぼ達せられる。他のフィッシュ・イーターも釣れるが、餌釣りに較べれば外道の数はずっと少ない。さらに擬似餌の色彩や型態に工夫をこらせば、ほとんど目的魚以外の魚は来なくなる。そうやって土着の擬似餌釣りが発生し、定着したのではないか？　と思えるのだが。

都会の釣師はその擬似餌釣りの中に、ゲームとしての面白さを発見して別途に改良を加え進歩させていったのだろう。

ブラジルの土俗的な擬似餌をいくつか見たが、ほとんどがバケに分類されるタイプである。ごく素朴なものだが、目的魚だけが釣れるというレベルに達した時点で進歩改良は停止するのだと考えられる。勿論、各自の手作りである。

現在でもブラックバスとニジマスが共存している湖で、仮にタナが同じとしてそのどちらかだけを釣ろうと思えばルアーの種類を選ぶしかない。ましてや、ミミズを使って釣り分けることはほとんど不可能だ。

土俗的なバケは対象魚がハッキリしているのが一大特色で、どんな魚にも利くオールマイティのルアーなどは都会的な産物である。

ドラード釣りでピラニヤの猛襲に悩まされて、私が白いプラグを自製して使うようになったことはすでに記したが、体験的に自然にそうなったのだ。何とかしてドラードだけを釣りたい一心がそうしたのだ。ピラニヤは黄色に最も関心を示し、次に赤である。黒や白への関心度は低い。ところがドラードは黄色も白も変らない。

アマゾンの先住民族のインヂオは、ツクナレという非常に美味な魚（ブラックバスに似ている）を釣るのに、白い羽根のバケを使った。〝シリリカ〟と呼ばれる釣法だがシリリカとはサラサラという意味だ。水の表面をゆっくりバケを滑らせるとツクナレがガバッとく

るのだ。

これなども結局は、あまりうまくないピラニヤなどを釣らず、美味なツクナレだけを得たい必要性から生まれた擬似餌だと思う。餌釣りでピラニヤとツクナレを釣り分けるのはまず不可能だからだ。白いバケならツクナレが釣れる可能性がずっと大きい。

したがって、現在私たちが楽しんでいるルアー釣りは都会的なゲーム性を中心に発展しているのだが、そもそもの発生は魚を釣り分ける必要性からではなかったかと思っている。釣り荒れしていない場所なら、擬似餌釣りの方が餌釣りよりむずかしいなどということはないものである。

擬似餌が考察されたヒントの一つとして、落下物や漂流物に魚が飛びつくことのほかに、尾の長い陸上動物が尾の先を水面でピチャピチャさせて魚を釣りあげる生態があったかもしれない。

オンサ(アメリカヒョウ)もそうやって魚を獲るらしく、多くの目撃例が報告されている。ただし、外国人のジャーナリスティックな探険家がアマゾンについて記したものは必ずしも信用がおけない。魚を釣っているオンサの尾にワニが喰いついて、オンサ対ワニの一大血闘が密林の中に展開されて手に汗を握ってそれを眺めたという風になっているのが常である。ヨーロッパ人やアメリカ人だけでなく、日本人の中村某氏が大正時代に書いた『大アマゾン探険記』でもそうなってい

る。中村さんの場合、ワニはすでにヨーロッパ人が書いていると思ったのか、巨大なペイシェ・ボイ（河牛）との死闘を見たことになっている。

私は実際に見ていないので、オンサの尾にワニや河牛が喰いつく可能性をまったく否定するわけではないが、土地の人間が見たときは普通の魚が釣れ、外国人が来たときだけワニや河牛が釣れるのが不思議で仕方がないのである。

いずれにしても、動物の尾の毛を使ったバックテイル・ジグなどはこういう生態を基に考案されたものかもしれない。尾の先をそのまま使ってオモリをつければ立派なジグが出来上がる。

鮭鱒類が棲息しなかったブラジルでは、フライは発達せず、羽毛を使っても形態的にはバケもしくはジグであった。

旅の心

ブラジルには大河が多いから大物も棲息するが、一般の人々から最も親しまれている釣魚はランバリというタナゴほどの小魚である。河口から源流まで、急流にも池にも棲息する分布の広い愛らしい小魚である。子供たちは小竿を手にランバリ釣りをして一日を過す。その記憶があるせいか、大人になってもランバリ釣り

のファンが多い。
十センチほどの体長なのに引きが強く、唐揚げにすると旨い魚なので、充分に大人の興趣の対象になり得るせいもある。
サンパウロ市ではチラピヤが増えるまではランバリ釣りが人気のトップで釣り大会も毎年ひらかれていた。雑食性の魚なのでエサは動物質でも植物質でも良い。能率の点からは脈釣りに分があるが、興趣はウキ釣りの方が良い。ニワトリの羽根の気泡のある芯を寝ウキにするのが一般ブラジル人の湖沼での釣法である。
私は山間の渓流でハヤ用毛鈎でランバリを釣るのが好きだ。ルアーも追うが三グラムのドロッペンでも大きすぎるので、アルミ片でごく小型のスピナーを自製する。色は銀が良い。
岸辺に雑草が生え、タンポポなども咲いた小川に静かに大した欲もなく釣糸を垂れるのが、釣りの一つの原型でないかと思われるが、ブラジルの場合ランバリ釣りがそれに相当する。繊細な釣技を楽しみつつ、ふと、どこか遠くへ行って大物を釣ってみたいと夢想したりする。
人間の心理は不思議なもので、遠くへ行けば大物が釣れるような錯覚がある。内陸部の人が海へ来るとき、目をむき出したくなるような大道具を持ってくるし、反対に海に近い住人が奥地へ遠征するときも現地の人が呆れるほどの大仕掛けを準備するものだ。

そういう滑稽さはあるが、日常の忙しさに負けて仕事だけの人生になりがちな日常に、何とか時間を作って遠くへ行き大物や珍しい魚を釣りたいという刺激を与え続けてくれる希望は貴重である。

私なども貧しい生活を続けながら、振り返ってみるとずいぶん旅をした。豊かな自然の中に身を置き、多くの懐しい人にも逢えた。魚を釣りたい一心が、魚以外の実に多くのものに私を逢わせてくれたのだった。

一人で、友人たちと、家族と、そういう旅を重ねてきた。しかし、まだ未知の釣場は多い。地図を広げ、香り高い紅茶などを飲みながらそういう釣場の在り場所を眺めていると、豊かな充足した時間がゆっくりと過ぎてゆくのだった。

（第二部　了）

醍醐麻沙夫（だいご・まさお）

１９３５年横浜に生まれる。学習院大学哲学科卒業。大学卒業後ブラジルに渡り，事業経営に成功。その後，文学を志し，事業を放棄し，日本語学校の教師を勤めるかたわら釣りも始める。一時は漁師のような生活もしたが，サンパウロ新聞文学賞，オール読物新人賞など受賞，作家生活に入る。現在サンパウロ在住。近作には『その窓から何がみえるか』（光文社）がある。

「原生林に猛魚を追う」
1981年2月20日　第1刷発行
著者－醍醐麻沙夫
定価－1300円
①Masao Daigo 1981
Printed in Japan
発行者－野間省一
発行所－株式会社講談社
東京都文京区音羽2－12－21〒112
電話　東京03－945－1111（大代表）振替　東京8－3930
装幀－山岸義明
印刷所－慶昌堂印刷株式会社
製本所－藤沢製本株式会社
●落丁本・乱丁本はおとりかえします
0075－4585546－2253（0）
（学2）